琉球大学学術リポジトリ

琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2017-03-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Giis, van der Lubbe, ハイス, ファン　デル　ルベ
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33729

琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究

Gijs van der Lubbe

138095J

人文社会科学研究科　比較地域文化専攻

目次

１章　　序章 6

1.1 沖永良部語正名方言の地理と系統 6

1.2 研究目的 7

1.3 方法 8

2 章　音韻体系 9

3 章　名詞と名詞形態論 12

3.1 代名詞 12

3.1.1 人称代名詞・再帰代名詞 12

3.1.2 数量名詞 22

3.1.4 指示表現 23

3.2 形式名詞 24

3.4 疑問詞 25

3.5 名詞形態論 25

3.5.1 名詞の形態論と有生性の階層 25

3.5.2 名詞につく接尾辞 27

3.5.3 複合名詞 27

3.5.4 格形式 27

4 動詞形態論 37

5 形容詞形態論 49

5.1 第 1 形容詞 49

5.2 第 2 形容詞 52

5.3 その他の形容詞と似ている語 52

6 コピュラ形態論 53

7 動詞・形容詞・コピュラにつく接辞 54

7.1 尾略形につくムード語尾 54

7.1.1 -mu 終止形と -N/-Ø 終止形 54

7.1.2 強調形-ru 60

7.1.3 推量形-ra 60

7.2 語根につくムード語尾 60

7.2.3 表出形-(r)o: 60

7.2.4 意志勧誘形-(r)a(:) 61

7.2.5 命令形-(r)i(:) 62

7.3 旧連体形につくムード語尾 62

7.3.1 旧連体形事態：非実現 62
7.3.2 禁止-na 62
7.4 音便をおこすムード語尾 62
7.5 条件づけをあらわす接辞 62
7.6 様態節に関係ある接辞 69
7.6.1 -gatʃana 69
7.6.2 -genja 69
7.6.3 -suku 70
7.6.4 -dake 70
7.7 時間節と関係ある接辞 70
7.7.1 -ni 70
7.7.2 -Ntane 70
7.7.3 -tiNgenja 71
7.8 目的節接辞-ga 71
7.9 等位節・並列節と関係ある接辞 71
7.9.1 -i 71
7.9.2 -di 71
7.9.3 -dana 72
7.9.4 -ti 中止形 72
7.9.5 第 1 形容詞の-nu 中止形 73
7.9.6 -taja 73
7.9.7 -gane 74
7.10 連体形接辞-nu 74
7.11 準名詞接辞-ʃi 74
7.12 テンス・アスペクトと関係がある接辞 75
7.12.1 過去形-ta- 75
7.12.2 継続形 -tu- 75
7.12.3 過去の反復習慣形-ita- 75
7.12.4 重複形 76
7.13 否定形-(r)a(:)- 77
7.13 可能表現 77
7.13.1 可能形 -(r)a(:)r- 77
7.13.2 能力可能-jus- 78
7.14 ヴォイスをあらわす形態論 78
7.14.1 使役形-(r)a(:)s- 78

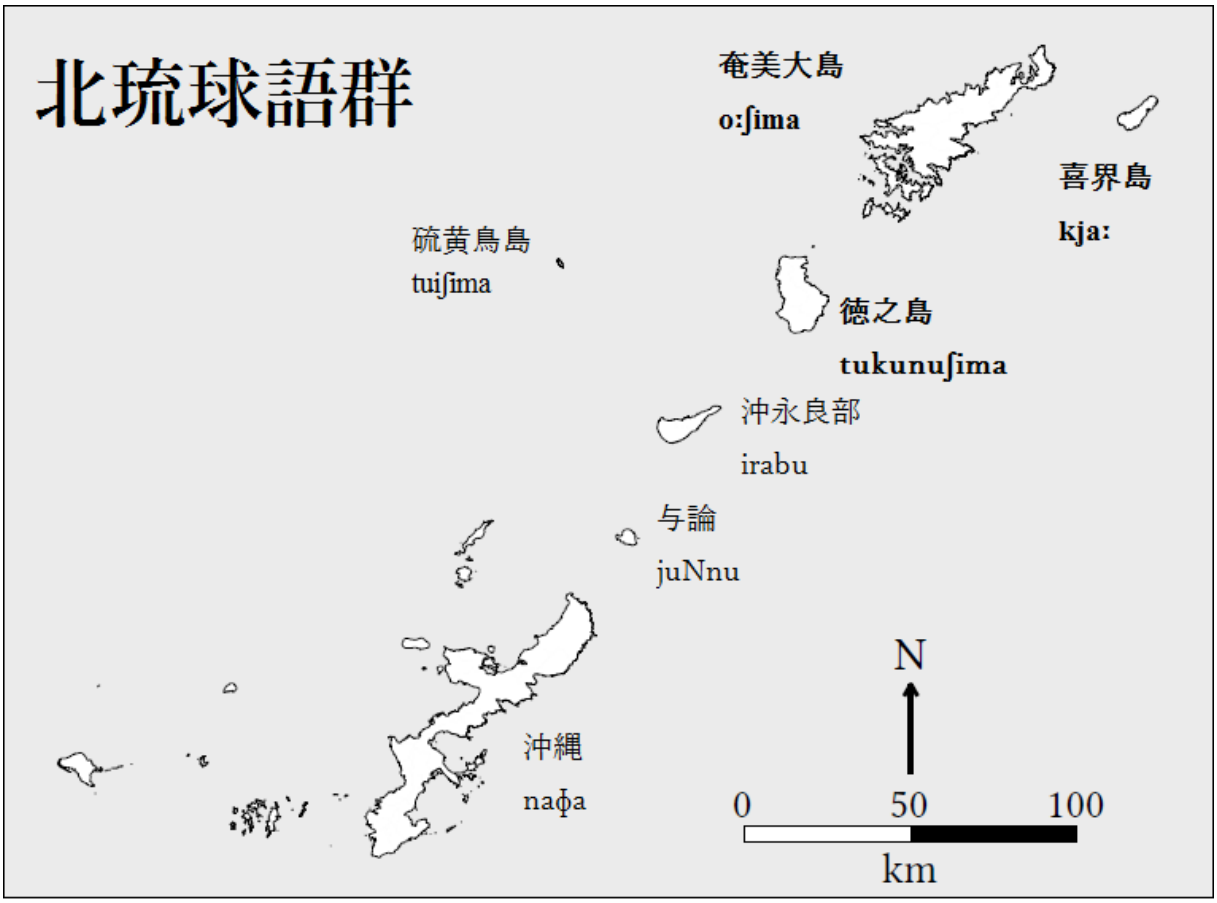
7.14.2 受身形-(r)a(ː)r- 79
7.15 待遇表現接辞 79
7.16 その他 80
8 章　単文 81
8.1 疑問文 81
8.1.1 肯否疑問 82
8.1.2 選択肢疑問文 88
8.1.3 疑問詞疑問文 89
8.1.4 確認要求の疑問 93
8.1.5 疑いの疑問文 102
8.1.6 修辞疑問：非難の質問文 112
8.1.7 意志の疑問文 113
9 章　複文 115
9.1 条件文 115
9.1.1 原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文 115
9.1.2 条件をあらわすつきそい・あわせ文 116
9.1.3 うらめ・ゆずり的なつきそい・あわせ文 123
10 章　テンス・アスペクト・ムード 127
10.1 主体動作動詞のテンス・アスペクト・ムード 127
10.1.1.用語の概説 127
10.1.2 沖永良部語正名方言のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー形式 128
10.1.3.主体動作動詞 129
10.1.4.主体動作客体変化動詞 138
10.2.正名方言シテアルキオリの歴史的な経路と北琉球語群の中の位置 142
10.2.1.北琉球語群におけるテ中止形＋ʔakkimu のアスペクト的意味 143
10.2.3.今帰仁村謝名方言 145
10.2.4.久米島町謝名堂方言 146
10.2.5.三つの方言のテ中止形＋あるく形式のアスペクト的な意味の一覧 146
10.2.6. テ中止形＋ʔakkimu の使用の制限 146
10.2.7 主語がある程度有情性をもち、意図的な運動にしか用いられない 147
10.2.8. 空間的に限定されていない場合しか用いられない 148
10.2.9.主体変化動詞にテ中止形＋ʔakkimu 形式が用いられない 148
10.2.10 三つの方言のテ中止形＋ʔakkimu の使用が限定されることの一覧 148
10.2.11 まとめ 148

11 章　待遇表現 150
11.1 待遇表現形式 150
11.1.1 応答詞 150
11.1.2 二人称代名詞 152
11.2 待遇表現形式 152
11.2.1 丁寧形式 153
11.2.2 尊敬語 155
11.2.3 謙譲語 158
11.3 尊敬語形式の組み合わせ 160
11.4 まとめ 162
参考文献 164
付録 169
付録１：ペア・ストリー 169
付録 2：沖永良部語正名方言の地名 172

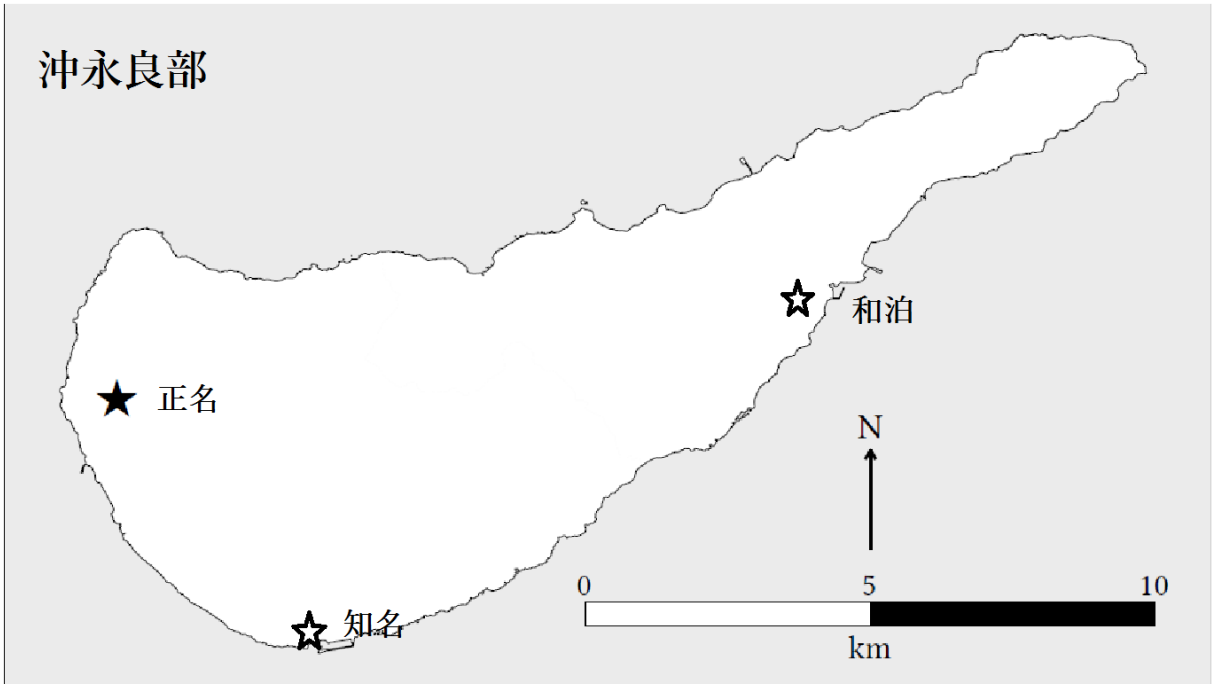
1 章 序章

1.1 沖永良部語正名方言の地理と系統

沖永良部島は、鹿児島県の奄美群島に属している約 94 平方キロの島である。沖永良部の西部にある知名町字正名の人口は約 300 人である。沖永良部は、行政的に鹿児島県に属しているのに対し、文化的、または言語的には琉球列島の一部である。本記述文法の対象となる正名方言、「正名ムニ」は、沖永良部語の下位方言である。50 歳以上の人が正名方言を日常生活の中で使用している。正名方言と日本語が混ざることは多いが、年齢が高いほど正名方言の割合が多くなってくる。現在ではまだ正名方言がよく話されているが、話者の高齢化が進むにつれ、使用されなくなりつつある。50・60 代の話者が使う正名方言には、周りの集落の沖永良部語の方言と日本語に影響されており、純粋な正名方言というより「最大公約数的な沖永良部語」と呼んでも良かろう。そのため、正名方言話者が生きている間に充分な記述をおこなわなければならない。



地図 1. 北琉球諸島の沖永良部島の位置。



地図 2. 沖永良部の正名の位置。

沖永良部語諸方言は、方言連続体をなしているが、その下位方言の間の相違点は音声的だけではなく、文法的な面にもあらわれる。話者によると、沖永良部語諸方言の間の相違理解度は高いが、方言を聞けば、人の出身地がすぐ分かるそうである。

琉球諸語の中の沖永良部語の位置は、北琉球語群に属しているが、それより細かい区画は今でも議論されている。狩俣繁久の「奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ」（2000）によると、沖永良部方言は、与論方言と沖縄北部諸方言と 1 つのグループをなしている。しかし、ペラール（2015）によると、奄美諸方言（奄美大島、喜界島、徳之島）と与論方言と沖永良部方言は、1 つのグループをなしており、沖縄島全体がもう 1 つのグループをなしている。かりまた説もペラール説もさまざまな共通の音韻変化の比較に基づいているが、現在、北琉球語群のさまざまな言語変種の文法の比較は、まだ充分におこなわれていない。

沖永良部島は、言語的に 1 つの連続体をなしている。その連続体の中に発音とイントネーションの相違点はあるが、沖永良部の集落同士の会話に支障をきたすほどの違いはない。北にある徳之島の言語と南にある与論の言語は、沖永良部の言語と相違理解度が低い。話者の経験談によると、沖永良部の人々にとって徳之島のことばが特に聞き取りにくいとのことである。与論のことばは、ある程度聞き取れるが、もし、沖永良部語の話者と与論語の話者がお互いに自分の島のことばで話すと、会話がなりたたないとのことである。

1.2 研究目的

沖永良部語正名方言の記述文法が研究の目的である。記述文法とは、何かをこのセクションで考察する。記述文法は、ある言語の音、形態素、単語、センテンスというような形式的な特徴を考察するものである。しかし、当該言語の音韻体系、形態論、統語論を考察するだけでは、十分でない。記述文法の目的は、多くの文法的な現象を取り扱い、網羅的でありな

がら、当該言語の文法的な現象を言語学的な観点から分析することである。3 年だけでは、網羅的な文法を書くことができないため、博士論文としての記述文法を網羅的な記述文法へ向かっての第一歩として考えて良かろう。

記述文法のもっとも重要な特徴は、確実な用例が豊かであることである。その用例は、考察される文法的な現象を明確に明示するために選ばなければならない。用例は、著者が集めた自然談話のコーパスからとられていないばあいは、当該言語の母語話者に再確認しなければならない。なお、音声表記とグロスに一貫性があることをよく確認すべきである。もう一つの重要なところは、読者にとっての利用しやすさである。記述文法は、辞書のように引けるものである。そのため、論文の構造を考えるとき、読者の観点から考え、読者が文法のどのようなところを理解してほしいかを考慮に入れる。

記述文法を分かりやすく書くために言語学理論が必要である。しかし、永続的な価値がある記述文法には、特定の言語学理論に偏りすぎてはならない。

1.3 方法

本章では、文法分析の対象となった1）話者、2）調査方法、3）分析資料・分析方法について説明していく。まず始めに、本研究を行なうにあたり、2012年から2015年にかけて、鹿児島県沖永良部島正名集落の正名方言話者に方言調査を行なった。対象者の年代は60代から80代である。また、対象者に調査を依頼する前に、対象者の知人もしくは親戚に対象者の正名方言習得度を評価してもらった。評価が高ければ、対象者に面接を依頼しデータ収集を行った。

次に、調査方法は2通りある。一つは、調査の際に複数の話者を集め、対象者同士で日常生活に起こりうる話題について話してもらった。その会話の中に出る文法を書き取り、分析データとした。二つは、話者に、いくつかの日本語の用例を話者に読み上げ、その用例を正名方言に訳させた。その際に出る正名語訳を分析データとした。これらの音声は全て、対象者の許可の下に録音し音声データ化した。

前述した調査方法で得たデータを分析資料とし、文法分析を行なった。さらに、分析結果後、分析資料を基に再度聞き取り調査を行った。本研究では、一人の話者から出た用例を複数の異なる話者に確認させている。その理由として、危機言語を調査する際に最も重要なのが、話者一人から出た用例を多くの話者に確認させることにある。また、危機言語は限られた環境にのみ使用されていることから、個人差が出ることも多い。

2 章 音韻体系

現在、沖永良部語正名方言を母語とする人は、日本語も母語のレベルで習得している。正名方言話者同士の会話のなかでも、沖永良部語と日本語のいわゆるコード・スイッチ（code switch）が常におこる。本稿で正名方言の文法的な特徴を立証するため、語彙的なコードスィッチが入っている用例が少なからずある。日本語と沖永良部語正名方言は、それぞれことなる音韻体系をもっている。そのため、正名方言では、日本語の音がことなる音と異音的な関係にあっても、同じ音が同じ異音的な関係にあるとはかぎらない。たとえば、日本語の破擦音/ts/と/tʃ/は、異音的な関係にあり、母音の/u/の前には、/ts/としてあらわれ、/i/の前に/tʃ/としてあらわれる。例：ɸutʃi「縁」VS ɸutsu:「普通」。一方、沖永良部語正名方言の音韻体系では、破擦音は、/u/の前で/ts/があらわれず、/i/の前でも/u/の前でも/tʃ/としてあらわれる。そのため、日本語の音韻体系と正名方言の音韻体系が混ざっている用例には、1 つの音素のあらゆる異音を 1 つの記号であらわす純粋な音声的表記法よりは、ある程度音韻的な要素を含んだ表記法を用いることにする。そうでなければ、下記の用例 B のような問題がおこりかねない。用例 B では、ts と tʃ の両方が c のみの表記法で書かれているため、音の違いが分からない。また、本論文では、沖永良部語の用例に日本語の単語が出るばあい、その単語を括弧< >内に表記する。

1) A: masana=nu tʃu-Nkja=ni=wa ʔuri=ga <ɸutsu:> =dja
B: masana=nu cu-Nkja=ni=wa ʔuri=ga <ɸucu:> =dja
正名の人々にとっては、それが普通だよ。

このセクションでは、沖永良部語正名方言の音韻体系を簡単に紹介し、その表記法も紹介する。

1. 沖永良部語正名方言の子音音素目録

			両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	無声	非喉頭化	P	t		k	ʔ
		喉頭化				(ʔk [kˀ])	
	有声		B	d		g	
破擦音	無声			tʃ [tɕ]			
	有声			dʒ [dʑ]			
摩擦音	無声	非口蓋化	ɸ	s [ɕ~ʃ]			h [ç~ɸ]
		口蓋化		ʃ			
	有声			(z [dz])			
鼻音		非喉頭化	m	n			N [ɴ~ŋ~ɲ~n~m]
		喉頭化	ʔm [mˀ]				
接近音		非喉頭化	w		j		
		喉頭化	ʔw [wˀ]		ʔj [jˀ]		
弾き音				r [ɾ]			

沖永良部語正名方言の子音音素は、上の表のとおりである。破裂音は、両唇破裂、歯茎破裂、硬口蓋破裂、軟口蓋破裂、声門破裂がある。無声軟口蓋破裂音には、非喉頭化と喉頭化の対立が高年層には、のこっているが、70 代前半以下の話者には、ほとんどのこっていないため、衰退しつつあるようである。喉頭化した無声軟口蓋破裂音がどこにおこるかには、話者によるずれがあるため、表記にあらわさないことにする。

2. 沖永良部語正名方言の母音目録

	前	中央	後ろ
高	i		u [ʊ]
中	e		o [ɔ]
低		a [a~ ɔ]	

長母音は、短母音の長いバージョンとして分析する。

正名方言の音節構造には、2 つのパターンがある。次のとおりである。

①：(L) (C1) (G) V1 (C2)
②： (L) (C1) (G) V1 (V2)

一番基本的な音節構造は、CV である。少なくとも、母音が 1 つ必要であり、そのほかの構造位置に子音が入る。構造位置 L には、語頭にあらわれる声門破裂音/ʔ/が入る。/ʔ/があらわれる位置は、母音の前と、子音の/m/、/w/、/j/の前である。構造位置 C1 には、すべての子音があらわれるが、構造位置 G には、接近音/w/と/j/しかあらわれない。構造位置 C2 には、鼻母音/N/が入る。構造位置 V2 には、V1 の母音の調音化がおこるか、/i/があらわれる。しかし、正名方言の音韻体系においては、超重音節がゆるされない音素配列論的な制約が働くため、C2 に/N/が入ることと V2 に母音の調音化か/i/が入ることは、同時におこらない。この制約が正名方言の形態論にも大きな影響を与えている。

沖永良部語正名方言のモーラ構造では、すべての母音と末尾子音としてあらわれる/N/がモーラとして機能する。北琉球語群で広く見られる最小 2 モーラ制約が当該方言においても働くため、一番短い単語が 2 モーラであり、1 モーラの単語がない。

正名方言の名詞のアクセントは、下の 3 パターンがある。

1. 名詞 (松森 2000, 2001)

	はだか		+助詞 nu		
a.	ɸuu	HH	ɸuu-nu	HHH	帆
	hii	LH	hii-nu	HLL	木
b.	hadi	HH	hadi-nu	HHH	風
	jamaa	HLH	jama-nu	HLL	山
	hama	LH	hama-nu	LLH	浜
c.	hibuʃi	HHH	hibuʃi-nu	HHHH	煙
	haganii	HHLH	hagani-nu	HHLL	鏡
	hatana	HLH	hatana-nu	HLLL	包丁

gudʒija	LLH		gudʒija-nu	LLLH	クジラ

動詞のアクセントは、下の 2 パターンがある。

2. 動詞(Uwano 1998a/b)

	正名
unaccented	HHH
accented	HLH

3 章 名詞と名詞形態論

3.1 代名詞

代名詞は、日本語記述文法研究会（2010：105）の定義では、「物事を、文脈や場面に基づいて指示する名詞」である。代名詞という範疇には、人称代名詞（再帰代名詞（反照代名詞）・相互代名詞も含める）、指示代名詞、疑問代名詞が入っている。人を指す場合は、単数と複数が対立している。

3.1.1 人称代名詞・再帰代名詞

沖永良部語諸方言の代名詞については、平山（1986：869-870、905-908）、内間（1984：162-164）、徳永（2013）で概説されているが、正名方言の人称代名詞についての概説は、ない。

正名方言が北琉球語群のほかの言語変種と共通しているのは、純粋な人称代名詞は一人称と二人称しかない点である。三人称は、指示代名詞か指示連体詞＋tʃu:「人」であらわされる。表 2 で示すように指示詞が人称代名詞として用いられる場合だけ複数をあらわす ta・ŋkja がつくことがある。双数をあらわす一人称 watte と二人称ʔutte が存在していることが特徴的であるが、奄美群島で使われる琉球諸語のほかの言語と共通している（下地 2013）。三人称双数形 natte が北琉球語群のなかで珍しいようである。

もう 1 つの特徴的な点は、敬意度の高いことをあらわす二人称代名詞がʔui と nata の 2 つあることである。2 つとも何の違和感もなく目上の人に対して用いられる。ʔui と nata は、敬意度は同じである。しかし、ʔui は、沖永良部島の 3 つの集落内（田皆、正名、住吉）でのみ使用され、上記集落以外の人に対しては、nata が用いられる。

1. 正名方言の人称をあらわす代名詞。

		単数	双数	複数
一人称		wanu	watte	wakja
二人称	（非敬称）	ʔura	ʔutte	ʔukja
	（敬称）	ʔui		ʔuita
	（敬称他地域）	nata		natata
三人称	近称	ɸuri		ɸurita/ɸuNta
	近・中称	ʔuri		ʔurita/ ʔuNta
	遠称	ʔari		ʔarita/ ʔaNta
三人称		na:ni	natte	nakja

一人称代名詞 wanu は、助詞によって不規則な形を示すことがある。主格助詞の ga がつく場合、不規則的に wa-に拘束される。表 2 のとおりである。表 2 の助詞 ni、gatʃi、tu、wa は、wanu と音声的に融合する。

2. 一人称単数代名詞の語形と文法的機能

	助詞	
主格	ga	waga

属格	-	wa:
与格	ni	waNni
与格（相手）	gatʃi	waNgatʃi
共格	tu	waNtu
到達格	Ntane	wanuNtane
対格	-	wanu
トピック	wa	wana / wanuwa
並列	mu	wanumu
フォーカス	du	wanudu
フォーカス（疑い）	ga	wanuga
極限	gadi	wanugadi / waNgadi
数詞複合（私一人）		waNtʃui

上の図でしめしているように、wa-には、接辞がつきうる語根のような役割がある。属格をあらわすばあいは、wa-が単独で用いられ、最小 2 モーラ制約で wa:というように長音化している属格専用の語形が用いられる。

1) ʔuri=wa wa: hama =doja:
それ=TOP 1sg:GEN 鎌 =ASR
それは私の鎌だよ

wanu という形をはだかの形とよぶことにする。wanu は、対格にもなるし、主格にもなる。

2) ʔunu <seNtakumono>=wa wanu ɸuʃʃ-abu-ra
その 洗濯物=TOP 私 干す-POL-INT
その洗濯物は私が干しましょう

3) wanu taʃiki-ri =jo:
私 助ける-IMP =ASR
私を助けろよ

トピックをあらわすとりたて助詞 wa「は」が文法的にさまざまな機能をもっている。Miyara（2011：88-89）によると、沖縄語のばあいトピックも否定作用域も同じ助詞 ja によってマークされるが、基底のレベルでは、区別すべきであるとのことである。沖永良部語では、主語の位置に wanu がトピックマーキングを受けるばあいは、wana になるが、否定作用域マーキングをうけるばあいは、wana が非文法的になり、wanuwa になる。

4) wana naɸa=gatʃi=du ʔiki-ʃiga
私:TOP 沖縄=ALL=FOC 行く-ADVRS
私は沖縄に行くけど
ʔari=wa jamatu=gatʃi=du ʔiki-ru
彼=TOP 日本本土=ALL=FOC 行く-EMP
彼は日本本土に行く。

5) ʔari=wa wanu=wa ʔabi-ti kuri-ra-N
彼=TOP 私=TOP 呼ぶ-SEQ 呉れる-NEG-IND

彼は私は呼んでくれない。

数量名詞 tʃui「一人」が wanu と融合し、waNtʃui「私一人」になる。

6) waN-tʃui=ʃi: ʃi-N =do:
1sg-1 人=INST する-IND =ASR
「私 1 人でするよ」

7) waN-tʃui=ga me: hima tʃuku-ti kuri-ta-mu =di
1sg-1 人=GEN ため 暇 作る-GER くれる-PST-IND ＝QUOT
私 1 人のために暇を作ってくれたそうだ。

一人称が 2 人であるばあい、一人称双数形 watte が用いられる。通時的には、この語形が一人称代名詞語根 wa-に双数をあらわす接辞がついた形であると考えられる。接辞-tte が人の数をあらわす数量名詞 tai「2 人」と同源であろうか。

3. 一人称双数代名詞の語形と文法的機能

	助詞	
主格	ga	wattega
属格	ga	wattega
与格	ni	watteni
与格（相手）	gatʃi	wattegatʃi
共格	tu	wattetu
到達格	Ntane	watteNtane
対格	-	watte
トピック	wa	wattewa
フォーカス	du	wattedu
フォーカス（疑い）	ga	wattega
極限	gadi	wattegadi

watte は、助詞と融合しないし、文法的に専用的な形式をとらえない。上の図で示しているように、主格も属格も ga がついた形で表現する。

8) watte=ga ʃi-N =do:
1DU=NOM する-IND =ASR
私たち 2 人がするよ。

9) ʔuri=wa watte=ga muN =doja:
それ=TOP 1DU=GEN 物 =ASR
それは私たち 2 人の物だよ。

watte 自体にも「2 人」という意味が入っているが、tai「2 人」という数量名詞を後接することもできる。話者の内省によると、これは、2 人だけであることをより強調するためにする。

10) ʔuri=wa watte-tai=ga muN =doja:. ʔura muN ʔana-N
それ=TOP 1DU-2 人=GEN 物 =ASR 2SG:GEN 物 COP:NEG-IND
それは私たち 2 人の物だよ。あなたの物じゃない。

一人称複数形 wakja「私たち」は、一人称代名詞語根 wa-に複数をあらわす接辞-kja がついた形である。

4. 一人称複数代名詞の文法的機能

	助詞	
主格	ga	wakjaga
属格	-	wakja
与格	ni	wakjani
与格（相手）	gatʃi	wakjagatʃi
共格	tu	wakjatu
到達格	Ntane	wakjaNtane
対格	-	wakja
トピック	wa	wakjawa
フォーカス	du	wakjadu
フォーカス（疑い）	ga	wakjaga
極限	gadi	wakjagadi

wakja は、助詞と融合しない。属格は、はだかの形であらわされる。

11) wakja ʔama=wa kira-wunagu ja-tta-nu gutu ʔa-N
1pl 母=TOP きれい-女 COP-PST-ATTR よう ある-IND
私たちのお母さんは美人だったみたいだ。

watte という双数専用形式があるにもかかわらず、wakja は、2 人をあらわすばあいもあるということから 2 人をあらわすばあいに watte の使用が義務的でないことがわかる。

12) wakja-tai=mu ʔik-a=i?
1pl-2 人=ADD 行く-INT=YNQ
私たち 2 人も行こうか？

二人称で同輩や目下をあらわすには、二人称代名詞ʔura が用いられる。

5. 二人称非敬称単数形の文法的機能

	助詞	
主格	ga	ʔuraga
属格	- (ga)	ʔura (ʔuraga)
与格	ni	ʔurani
与格（相手）	gatʃi	ʔuragatʃi
共格	tu	ʔuratu
到達格	Ntane	ʔuraNtane
対格	-	ʔura
トピック	wa	ʔurawa
並列	mu	ʔuramu
フォーカス	du	ʔuradu
フォーカス（疑い）	ga	ʔuraga
極限	gadi	ʔuragadi

ʔura は、助詞と融合しない。属格は、主にはだかの形であらわされる。助詞 ga がつくばあいもあるが、まれである。

13) ʔura muN=wa ʔuduru =jo?
2sg 物=TOP どれ =WHQ
あなたのはどれか？

14) ʔura=ga muN=nu=du ʔitʃìbaN ʔubisa-mu =djo:
2sg=GEN 物=NOM=FOC 一番 大きい-IND =SOL
あなたのが一番大きいなぁ。

二人称が 2 人であるばあい、二人称双数形ʔutte が用いられる。

6. 二人称双数代名詞の語形と文法的機能

	助詞	
主格	ga	ʔuttega
属格	ga	ʔuttega
与格	ni	ʔutteni
与格（相手）	gatʃì	ʔuttegatʃì
共格	tu	ʔuttetu
到達格	Ntane	ʔutteNtane
対格	-	ʔutte
トピック	wa	ʔuttewa
フォーカス	du	ʔuttedu
フォーカス（疑い）	ga	ʔuttega
極限	gadi	ʔuttegadi

上の図でしめしているように、二人称双数代名詞ʔutte は、一人称代名詞 watte と助詞のつく形が同じである。watte と同様に、数量名詞 tai「2 人」がつくばあいもある。

15) ʔuri=wa ʔutte-tai=ga muN =do:
それ=TOP 2DU-2 人=GEN 物 =ASR
それは、あなた方 2 人の物だよ。

7. 二人称複数代名詞の文法的機能

	助詞	
主格	ga	ʔukjaga
属格	-	ʔukja
与格	ni	ʔukjani
与格（相手）	gatʃì	ʔukjagatʃì
共格	tu	ʔukjatu
到達格	Ntane	ʔukjaNtane
対格	-	ʔukja
トピック	wa	ʔukjawa
フォーカス	du	ʔukjadu
フォーカス（疑い）	ga	ʔukjaga
極限	gadi	ʔukjagadi

二人称複数代名詞ʔukja は、ʔura のʔu-に複数接辞-kja がついた形である。助詞がついた形は、一人称複数代名詞 wakja と同じであり、属格をはだかの形であらわす。

16) ʔukja ʔuja=wa hissa jamatumuni ʃiː ʔmeː-ta-N
2pl:GEN 親=TOP 先ほど 日本語 する-GER 居る:HON-PST-IND
あなた方の両親が先ほど日本語を使っていらっしゃった。

沖永良部語正名方言は、ʔura は、同輩や目下に対して用いられる人称代名詞であり、目上に対しては、ʔui「あなた様」が用いられる。日本語には、目上の人に対して容易に用いられる二人称代名詞がないため、日本語訳としては、「あなた様」を使うことにする。このセクションでは、二人称敬称代名詞ʔui の形態論的な特徴を考察する。使用上の詳細については、待遇表現で言及する。

8. 二人称敬称単数形ʔui の文法的機能

	助詞	
主格	ga	ʔuiga
属格	- / ga	ʔui / ʔuiga
与格	ni	ʔuini
与格（相手）	gatʃi	ʔuigatʃi
共格	tu	ʔuitu
到達格	Ntane	ʔuitane
対格	-	ʔui
トピック	wa	ʔuiwa
並列	mu	ʔuimu
フォーカス	du	ʔuidu
フォーカス（疑い）	ga	ʔuiga
極限	gadi	ʔuigadi

上の図でしめしているように、ʔui は、属格でもちいられるばあい、助詞 ga がついた形でもはだかの形でも用いられる。

17) ʔui=ga jaː=wa ɸugumi=ne=du ʔa-jabu-N=nja?
2sg:HON=GEN 家=TOP 小米=LOC=FOC ある-POL-IND=YNQ
あなた様の家は小米にあるのですか？

18) ʔui muN=nu=du kirasa ʔa-jabu-ru
2sg:HON:GEN 物=NOM=FOC きれい ある-POL-EMPH
あなた様の物のほうがきれいです。

ʔui に「まで」という到達点をあらわす助詞がつくばあいは、ʔui+Ntane は、* ʔuiNtane のように超重音節になるため、超重音節を避けるために、Ntane より tane としてつく。

19) midi=wa ʔui=tane=wa hane-ra-dana ʔa-jabu-ti=na?
水=TOP 2sg:HON=LMT=TOP 跳ねる-NEG-SEQ ある-POL-SEQ=YNQ
水はあなた様までは跳ねませんでしたか？

ʔui には、双数形が別にないが、ʔui に数量名詞 tatokoro「お二人様」がつき、2 人の目上の人に対して用いられる二人称代名詞と同じ機能をする語形がある。

20) ʔui-tatokoro=tu madʒini ʔi-dʒimu jukkwa ʔa-jabu-N=nja?
2sg:HON:2 人:HON=COM 一緒に 行く-CONC 良い ある-POL-IND=YNQ
お二人様と一緒に行ってもいいですか？

ʔui に複数接辞-ta がつき、二人称敬称複数形になる。

9. 二人称敬称複数形ʔuita の文法的機能

	助詞	
主格	ga	ʔuitaga
属格	ga	ʔuitaga
与格	ni	ʔuitani
与格（相手）	gatʃi	ʔuitagatʃi
共格	tu	ʔuitatu
到達格	Ntane	ʔuitaNtane
対格	-	ʔuita
トピック	wa	ʔuitawa
並列	mu	ʔuitamu
フォーカス	du	ʔuitadu
フォーカス（疑い）	ga	ʔuitaga
極限	gadi	ʔuitagadi

ʔuita「あなた様方」は、助詞 ga が主格をあらわすばあいも、属格をあらわすばあいも用いられる。

21) ʔuita=ga=du <paːɸoːmaNsu> ʃaːbu-N=nja?
2pl:HON=NOM=FOC パーフォーマンス する:POL-IND=YNQ
あなた様方がパーフォーマンスをしますか？

22) ʔuita=ga jaː=wa ʔuduru dero=jo?
2pl:HON=GEN 家=TOP どれ COP:POL=WHQ
あなた様方の家はどれですか？

三人以上をあらわすばあい、ʔuita が muːru「皆」と複合することが多い。

23) ʔuita-muːru, ɸugam-jabu-ra
2pl:HON:皆 お目にかかる-POL-INT
皆さま、こんにちは。

24) ʔuita-muːru=ga <basu>=wa ʔari dero=na?
2pl:HON:皆=GEN バス=TOP あれ COP:POL=YNQ
皆さまのバスは、あれですか？

正名・住吉・田皆の目上の人に対しては、ʔui が用いられるが、他地域の目上に対しては、二人称敬称の nata が用いられる。正名方言話者は、nata を他の地域のことばとみなす

が、よその集落の沖永良部語話者と会話するばあいに正名方言話者も nata を用いるため、正名方言のよその目上に対する二人称敬称として記述することにする。

10. 二人称敬称単数形 nata の文法的機能

	助詞	
主格	ga	nataga
属格	- / ga	nata / nataga
与格	ni	natani
与格（相手）	gatʃi	natagatʃi
共格	tu	natatu
到達格	Ntane	nataNtane
対格	-	nata
トピック	wa	natawa
並列	mu	natamu
フォーカス	du	natadu
フォーカス（疑い）	ga	nataga
極限	gadi	natagadi

上の図でしめしているように、nata の文法的機能は、ʔui のそれとほとんど同じであるが、到達格助詞 Ntane のばあいは、nataNtane「あなた様まで」のようにつく。

18) midi=wa nata=Ntane=wa hane-ra-dana ʔa-jabu-ti=na?
水=TOP 2sg:HON=LMT=TOP 跳ねる-NEG-SEQ ある-POL-SEQ=YNQ
水はあなた様までは跳ねませんでしたか？

複数形のばあい、ʔuita と同様、nata に複数接辞-ta がつく。

11. 二人称敬称複数形ʔuita の文法的機能

	助詞	
主格	ga	natataga
属格	ga	natataga
与格	ni	natatani
与格（相手）	gatʃi	natatagatʃi
共格	tu	natatatu
到達格	Ntane	natataNtane
対格	-	natata
トピック	wa	natatawa
並列	mu	natatamu
フォーカス	du	natatadu
フォーカス（疑い）	ga	natataga
極限	gadi	natatagadi

三人称をあらわすのに ɸuri（これ）、ʔuri（それ・これ）、ʔari（あれ）という、ものや概念などを指示するばあいにも用いられる指示代名詞が使用される。有情物をあらわす場合のみ ɸuri、ʔuri、ʔari が複数形をとらえる。

ɸuri　+　ta >　　ɸurita/ɸuNta
ʔuri　+　ta >　　ʔurita/ ʔuNta
ʔari　+　ta >　　ʔarita/ ʔaNta

日本語の「彼女」（女性）と「彼」（男性）のような、性を区別する三人称代名詞は、沖永良部語正名方言には、ない。有生物をあらわす場合のみ ɸuri、ʔuri、ʔari が複数形をとらえる。

もう 1 つの三人称をあらわす代名詞は、na:ni である。この形式は、見た目では、北琉球語群であまねく見られる na:系の二人称敬称代名詞と似ているが、三人称をあらわすため、宮古語と八重山語で見られる nara 系の再帰代名詞と同源であると考えられる。Lawrence（2013：391）の報告によると、八重山語鳩間方言において照応的に用いられる再帰代名詞 ʔuna:は、三人称でしか使用できないとのことで、このような面で沖永良部語正名方言の na:ni 系人称代名詞と似ている。

12. na:ni 系三人称代名詞の文法的機能

	助詞	単数 na:ni	双数 natte	複数 nakja
主格	ga	na:niga	nattega	nakjaga
属格	ga	na:niga	nattega	nakja
与格	ni	na:nini	natteni	nakjani
与格（相手）	gatʃi	na:nigatʃi	nattegatʃi	nakjagatʃi
共格	tu	na:nitu	natteni	nakjani
到達格	Ntane	na:niNtane	natteNtane	nakjaNtane
対格	-	na:ni	natte	nakja
トピック	wa	na:niwa	nattewa	nakjawa
並列	mu	na:nimu	nattemu	nakjamu
フォーカス	du	na:nidu	nattedu	nakjadu
フォーカス（疑い）	ga	na:niga	nattega	nakjaga
極限	gadi	na:nigadi	gattegadi	nakjagadi

na:ni のさまざまな形式に特徴的なのは、双数形 natte もとらえることである。上の図でしめされている形式から見ると、na:ni 系のさまざまな形式において na-が語根として機能するようである。na-に双数接辞-tte と複数接辞-kja がつく。なお、na:tʃui「彼 1 人・自分 1 人」という、tʃui「1 人」という数量名詞 がついた語形もある。na:ni の-ni 接辞の由来は、ni:「ところ」にあるであろうか。wanu 系の属格系 wa:に ni:がついた形に由来する、「私がいるところ」という意味をする wa:ni があるため、na:ni も似たような語源があると考えられる。

ɸuri、ʔuri、ʔari と na:ni との使用の相違点については、未確認であるため、今後の課題とする。1 つの相違点は、ɸuri、ʔuri、ʔari は、ある人物を指示するのに用いられるが、会話のなかでその人物に初めて言及するばあいにも用いられる。それに対し、na:ni は、話題になる人物がもうすでに会話のなかで言及したばあいのみ使用が可能であり、照応的にしか用いられない。次の用例は、na:ni 系を用いることができない例と、用いることができる例である。

19)　（畑で働いている人を見た上での発話）

A:	×mi-ttʃi	m-i:!	nakja=wa	wugi	to:-tʃu-N	=sa:re
	見る-SEQ	見る-IMP	3pl=TOP	砂糖黍	倒す-CONT-IND	=ASR
B:	○ mi-ttʃi	m-i:!	ʔaNta=wa	wugi	to:-tʃu-N	=sa:re
	見る-SEQ	見る-IMP	3pl=TOP	砂糖黍	倒す-CONT-IND	=ASR

見てごらん！彼らは砂糖黍を倒しているんだよ。

20)　（「梨の話」（pearfilm）の映像を見て）

jiNga=Nkja　mittʃe=ga　ki-ttʃi
男-PL　三人=NOM　来る-SEQ
男三人が来て

mu:ru=ʃi:　kaʃi　ʃa-N-tu　<riNgo> ʔu:gutu　muro-ta-N.
皆-INST　手伝い　する-PST-CSL　リンゴ　たくさん　もらう-PST-IND
皆で手伝ったから、リンゴをたくさんもらった。

<koNdo>=wa　nakja　mittʃe　woi-tu-N
今度=TOP　3pl　三人　分け合う-CONT-IND
今度彼ら三人が分け合っている。

再帰代名詞（反照代名詞）は、主語など、その文のなかで先に現れた要素と同一指示であることを示す代名詞である。沖永良部語正名方言で du:「自分」が再帰代名詞である。もともと du:は、「体」という意味である。文法化して再帰代名詞にもなったが、次の用例で示すようにまだ「体」という意味でも用いられる。

17)　du:=nu　ʔiŋkusa-ttimu　ʃi-rari-N
体＝NOM　小さい-CONC　する-POT-NPST-IND
体が小さくてもできる。

次の用例は、du:の再帰代名詞としての使用の例である。

18)　du:=nu　ʃigutu=wa　du:=ʃi:　ʃi-ri
自分=GEN　仕事=TOP　自分=INST　する-IMP
自分の仕事は自分でしろ。

19)　du:　ʔommikaʃi-N
自分　殴る-IND
自分を殴る

徳永（2013）によると、沖永良部語国頭方言には、du:複数形として du:na:ta:「自分たち」があるとのことであるが、正名方言には、このような語形がない。du:の複数形として機能する語形は、du:に接辞-du がつき、du:du「自分たち」という形がある。接辞-du は、再掲代名詞と同源であると思われるが、ここで du:du を重複形とよばないのは、-du が違う人称代名詞にもつくためである。

接辞-du の意味は、代名詞について du:より強調した再帰代名詞になる。話題になる人の身内という意味でよく用いられる。

20)　ʔunu　ʃugutu=wa　wa=ga　wa:-du=ʃi:　ʃi-N
その　仕事=TOP　1sg=NOM　私-自分=INST する-IND

その仕事は、私が私自身でする。

21) ʔaNta=wa nakja-du=nu ja:=neti=du ʃugutu ʃu:-ru
3pl=TOP 3pl-自分=GEN 家=LOC=FOC 仕事 する-CONT-EMPH
彼らは、彼らの家で仕事をしているのだ。

一人称複数形 wakja と二人称複数形ʔukja には、同じ意味で-dune もつく。

22) wakja-dune=mu ʃimamuni na:hi tʃiko-ra-N-nja na-ra-N
1pl-自分=ADD 沖永良部語 もっと 使う-NEG-COND なる-NEG-IND
私たち自身も沖永良部語をもっと使わなければならない。

正名方言の疑問代名詞は、taru である。下の図でその文法的機能をしめす。

13. 疑問代名詞 taru の文法的機能

	助詞	単数形	複数形
主格	ga	ta:ga	tatta/taruta
属格	ga	ta:	tattaga
与格	ni	taNni/taruni	tattani
与格（相手）	gatʃi	taNgatʃi/tarugatʃi	tattagatʃi
共格	tu	taNtu/tarutu	tattatu
到達格	Ntane	taruNtane	tattaNtane
対格	-	taru	tatta

taru には、ta-という語根があるようである。属格で用いられるばあい、最小 2 モーラ制約の影響で調音化し、ta:になる。ta:は、主格助詞 ga がつく語幹としても機能するが、複数接辞 ta は、taru につくのが特徴的である。はだかの形 taru の-ru は、接辞として見るべきであろうか。

特記すべき点は、taru に重複形 taNdaru もあることである。これは、複数形として用いられるが、接辞による複数形 tatta とどのようにことなるかは、不明である。

1) taNdaru ki-ttʃu-ti =jo?
誰々 来る-CONT-SEQ=WHQ
誰々が来ていたか？

3.1.2 数量名詞

正名方言の数詞は、数量名詞語根と助数詞からなる。10 以上の数量名詞は、日本語の数量名詞が用いられる。疑問詞疑問文では、助数詞が疑問視語根のʔiku につく。次の用例のとおりである。

20) tʃu:=wa iku-tai wu-N =jo?
人=TOP 何-「人」をあらわす数字詞 いる-IND =WHQ
人は何人いる？

数詞は名詞句にもなるが、次の用例で示すように副詞句になることも多い。

21) <ʔantena>=wa ta:-tʃi ʔa:-nu ba: =na?

アンテナ=TOP　　2-「ものごと」をあらわす数字詞　ある-ATT　　わけ　　=YNQ
アンテナは二つあるわけか？

数詞が名詞句になる場合は、3 つの役割が有り得る：文法項になる名詞句、名詞句の修飾語、述語になる。

22) juttai=nu　　wunagu=nu　　wu-N　（修飾語）
4 人-GEN　　女=NOMいる-IND
4 人の女がいる

23) ʔanu　tai=nu　　ki-ttʃa-N　　（文法項）
あの　2 人=NOM　　来る-PST-IND
あの 2 人が来た

24) ki-ttʃa-ʃi=wa　　anu　tai　　ja-tta-mu　　（述語）
来る-PAST-NML=TOP　　あの　2 人　　COP-PST-IND
来たのはあの 2 人だった。

表 4 で示すように助数詞が全て数詞語根に規則どおりつくわけではない。人数の tʃui「1 人」、tai「2 人」、mitʃe:「三人」は、不規則な形式である。tii-tʃi（1-CLS.GENERAL）の数詞語根も不規則である。

14. 正名方言の数詞。

	個数等	人数	人数（敬語）	回数	日数
1	ti:tʃi	tʃui	tʃutokoro	tʃukkoi	tʃi:
2	ta:tʃi	tai	tatokoro	takkoi	ɸutʃika
3	mi:tʃi	mitʃe:	mitʃokoro	mikkoi	mikkja
4	ju:tʃi	juttai	–	jukkoi	jwa:
5	ʔitʃitʃi	ʔitʃitai	–	ʔitʃikoi	ʔitʃika
6	mu:tʃi	muttai	–	mukkoi	mja:
7	nanatʃi	nanatai	–	nanakoi	naNka
8	ja:tʃi	hatʃitai*	–	hakkoi*	jaɸa
9	kunutʃi	kju:tai*	–	kunukoi	kuNka
10	tu:	tuttai	–	tukkoi	twa:
疑問詞	ʔikutʃi	ʔikutai	–	ʔikukoi	ʔikka

3.1.4 指示表現

日本語記述文法研究会（2009：20）の定義によると、指示表現は、「単独の名詞として、あるいはほかの名詞や用言を修飾するなどして指示の働きを果たす形式である」とのことである。沖永良部語正名方言の指示表現は、日本語のコ系、ソ系、ア系に相当する 3 つの種類に分けられる。日本語のド系に相当する疑問詞もある。

15. 正名方言の指示表現

	指示表現			疑問詞
	コ系相当	ソ系相当	ア系相当	
もの・概念（これ）	ɸuri	ʔuri	ʔari	ʔuduru
名詞修飾（この）	ɸunu	ʔunu	ʔanu	ʔuduru
場所（ここ）	ɸuma	ʔma:	ʔama	ʔuda
属性（こんな）	hanjanu	ganjanu	ʔaganjanu	ʔikjanjanu
事態（こう）	haN	gaN	ʔagaN	ʔikja
方法（こうやって）	haNʃi	gaNʃi	ʔagaNʃi	ʔikjaʃi
方法・方向（こんなに・ここに）	hani	gani	ʔagani	ʔikja:ni
程度（このぐらい）	(hassa/hattʃa)	gassa/gattʃa	ʔagassa/ʔagattʃa	ʔikjassa
ものの大きさ（このぐらい）	-	gahhe (/gaççe/)	-	-

上の図は、正名方言の指示表現をしめしている。疑問詞のʔuduru がもの・概念をあらわす機能（どれ）もあり、名詞を修飾する機能（どの）もあるのが特徴的である。

25) ʔuduru ja:=nu ʔukja ja: =jo?
どの 家=NOM 2pl=GEN 家 =WHQ
どの家があなたがたの家か？

26) kwa:ʃi=wa ta:tʃi ʔa:-ʃiga ʔuduru=ga ʔma:sa-N =jo?
お菓子=TOP 2 つ ある-AC どれ=NOM おいしい-IND =WHQ
お菓子は 2 つあるけど、どれがおいしいか？

沖永良部語正名方言では、ソ系相当の指示表現の使用範囲がコ系に浸透しており、コ系相当をまったく用いない話者もいる

3.2 形式名詞

形式名詞は、連体修飾節に飾られている抽象的な意味をもつ名詞である。このような名詞は文法的な役割をはたし、文法化しつつあるが、動詞・第 2 形容詞・コピュラの連体形か属格の形をとらえた名詞にしか飾られないことからまだ名詞の特徴をたもっていることが分かる。

16. 沖永良部語正名方言の形式名詞の例

	用例
gutu「よう」	ʔari=wa <ʔomotʃa>=nu gutu=nu muN miN-dʒu-N 3sl=TOP おもちゃ=GEN よう=GEN 物 持つ-CONT-IND 彼はおもちょのようなものを持っている。
ʔaNbe「様子」	ʔari=wa <ʔe:go> ʃi-rari-nu ʔaNbe 3sl=TOP 英語 する-POT-ATT 様子 彼は英語ができるみたいだ。
kutu「こと」	tukunuʃima=gatʃi ʔi-dʒa-nu kutu ʔa:-mu 徳之島=ALL 行く-PST-ATT こと ある-IND 徳之島に行ったことある。
me:「ため」	ʃimamuni naroʃi-nu me:=nu ʃumutʃi 沖永良部語 教える-ATT ため=GEN 本

	沖永良部語を教えるための本
joːi「ように」	warabi=mu wakai-nu joːi jamatumuni ʃi-ra 子供=ADD わかる-ATT ように 日本語 する-INT 子供も分かるように日本語を使おう。
baː「わけ」	wana takkoi ʔi-dʒa-nu baː =joː 1sl:TOP 2回 行く-PST-ATT わけ =ASR 私は2回行ったわけだよ。
hadi「度に」	kami-nu hadi wata jami-N 食べる-ATT 度に 腹 痛む-IND 食べるたびにお腹が痛くなる。
hadʒi「はず」	hjuː=mu kiː-nu hadʒi =dja 今日=ADD 来る-ATT SUPP =ASR 今日も来るはずだよ。

3.4 疑問詞

疑問詞疑問文は、その命題の中に不明な情報が含まれていることをあらわす疑問文であり、不明な情報を疑問詞であらわす。疑問詞の一部については、前述した。上記以外の疑問詞は、次の図でしめす。

17. 正名方言の疑問詞

	日本語	沖永良部正名方言
もの・出来事	なに	nuː
時	いつ	ʔitʃi
原因・理由	なぜ、なんで、どうして	Nga, niga, ʔikjaʃi

上の図でしめしているように、原因・理由をあらわす疑問詞が3つあるが、話者の内省によれば、その違いが個人差にすぎないとのことである。

疑問詞に接辞-gara か-ka がつくと、不定代名詞として機能する。

30) nuːgara kami-buʃa-N
何か 食べる-DES-IND
何かを食べたい

31) ʔitʃika mata ki-N =doː
いつか また 来る-IND =ASR
いつかまた来るよ。

3.5 名詞形態論

3.5.1 名詞の形態論と有生性の階層

正名方言の主な形態論的な構造は、次の通りである。

（接頭辞-）語根（-複数）

正名方言の名詞は、基本的で接辞がついていない形で単数の意味でも複数の意味でもあらわれるが、有生の名詞には、複数をあらわす接尾辞がつきうる。複数の接尾辞は、3つある：-kja、-ta、-Nkja。いずれが用いられるかは、有生性の階層（animacy hierarchy）によって定められる。有生性の階層の基本になるのは、動作主になる可能性である（Payne 1997：

150）。たとえば、人間同士の会話では、動物がおこなう動作よりは、人間がおこなう動作のほうが会話の話題とされることが多い。沖永良部語でいうと、会話で動作主としてあらわれる頻度によって主語のマーキング（＝主語をあらわす助詞）、または、複数のマーキング（＝複数接辞）がつく頻度も高くなる。この頻度によって、マーキングの違いが生じ得る。

有生性による言語的形式への影響の例としては、人間と非人間の違いが通言語的にもっともよく見られる（Comrie 1981：1995）。Comrie によると、固有名と一部の親族名称がその他の人間をあらわす名詞よりも有生性の階層に高いようにあつかわれることも通言語的によく見られる現象である。新永（2014：189）が奄美語湯湾方言の格のマーキングと複数のマーキングへにおいて有生性の階層がどのぐらい見られるかを報告している。沖永良部語正名方言をここで考察する。

新永があつかう名詞は、一人称代名詞、二人称代名詞、三人称代名詞、人をあらわす疑問詞、人をあらわす指示表現、呼びかける際に用いる名詞、そのほかの有生物名詞、無生物名詞である。正名方言の語彙から新永があつかっている分類ごとに 1 つをとりあげ、次の図でしめす。

18. 正名方言における有生性の階層

	一人称 wanu (私)	二人称 ʔura (あなた)	三人称 naːni (彼)	人疑問詞 taru (誰)	指示詞（人間も） ʔari (彼・あれ)	呼びかけ名詞 miː (お姉さん)	有生物 ʔwaː (豚)	無生物 hama (鎌)
双数 複数	-tte -kja	-tte -kja	-tte -kja	- -ta	- -ta	- -ta	- -Nkja	- -
属格 主語	- ga	-/(ga) ga	ga ga	- ga	ga ga	ga ga	-nu -nu	-nu -nu

上の図ではっきり見られるのは、一人称、二人称、三人称のマーキングがほとんど同じであることである。疑問詞 taru と指示詞ʔari の双数形のないことでことなる。三人称 naːni のマーキングが三人称にも用いられる指示詞ʔari より有生性の高い一人称と二人称に似ている。その原因は、ʔari とことなり、naːni は、人間しかあらわさないことにあると考えられる。指示詞と呼びかけ名詞は、マーキングが同じである。呼びかけ名詞と有生物名詞には、はっきりした差異が出てきている。無生物名詞には、複数接辞がつかない。

一人称、二人称、三人称、人疑問詞、指示詞の 5 つの分類がその他の 3 つの分類とことなるのは、グループとして限られた語彙しか入っていないことである。たとえば、一人称、二人称、三人称、人疑問詞という分類ごとは、一単語しか入っていない。指示詞には、ɸuri、ʔuri、ʔari の 3 つの単語しかはいっていないが、二人称敬称代名詞のʔui と nata は、指示詞とまったく同じマーキングをしめす。

それに対し、呼びかけ名詞、有生物名詞、無生物名詞のそれぞれの分類に入る名詞が数え切れないぐらい多いが、パターンは、はっきりしている。呼びかけ名詞の分類には、人に呼びかける際に用いられる、あらゆる名詞が入る。たとえば、人の名前、肩書（ʃiNse「先生」、<kutʃoːsa>「区長さん」など）、呼びかける際に使う親族名称（ʔatʃa「お父さん」、ʔama「お母さん」、jaku「お兄さん」など）が呼びかけ名詞に入るが、ʔutu「弟・妹」、

<itoko>,「いとこ」、tʃu:「人」は、呼びかけるのには、用いられないため、ただの有生物に入る。

3.5.2 名詞につく接尾辞

名詞につく接尾辞は、4 つある。複数をあらわす-Nkja/-kja、小ささ・若さ・愛称をあらわす指小接尾辞-gama と-gwa、動物の子をあらわす-Nka/-njaka である。

複数接辞-Nkja には、特記すべき点が 1 つある。この接辞が名詞につくばあい、超重音節を避けるための調節がおこる。名詞が調音でおわるばあいは、調音が短音化し、名詞が母音連続でおわるばあいは、-Nkja が-kja としてつく。

tui「鶏」+　複数接辞　> tuikja 「鶏たち」
ʔwa:「豚」+　複数接辞　> ʔwaNkja「豚たち」

指小接尾辞-gama と-gwa は、同じような意味を持ち、使い分けの詳細については、今後の課題とする。

ɸana「花」+　指小接尾辞　> ɸana-gama・ɸana-gwa「小さい花」
tʃittu「お土産」+　指小接尾辞　> tʃittu-gama「小さいお土産」
warabi「子供」+　指小接尾辞　> warabi-gama「小さい子供」

動物名に-Nka/-njaka がつくと、その動物の子供をあらわす。-i-で終わる動物名には、-njaka、または-Nnjaka がつき、そのほかの動物名には、-Nka がつく。

ʔuma「馬」　+　接尾辞　> ʔumaNka 「子馬」
ʔuʃi「牛」　+　接尾辞　> ʔuʃinjaka「子牛」

-i-でない長母音で終わる動物名のばあい、超重音節を避けるために、調音が短音化する。

ʔmja:「猫」　+　接尾辞　> ʔmjaNka 「子猫」

tui「鶏」のばあい、*tuinjaka「ヒヨコ」が予想されるが、不規則的に tuNnjaka「ヒヨコ」になる。

3.5.3 複合名詞

名詞と名詞の複合は、何の調節もなくおこる。

ʃima 「島」　+ muni 「言葉」 < ʃimamuni 「島言葉」

日本語と同じ連濁もおこる。次の例では、kwa:がja:waiにつき、短音化する。

ja:wai　文字通り：「家割り」　+ kwa:「子 」< ja:waigwa 「次男」

3.5.4 格形式

沖永良部語正名方言には、句の中の統語論的、意味的、そして語用論的な役割をあらわす形態論が助詞の形で発達しているが、助詞がついていない、いわゆるはだかの形も格をあらわすことがある。

19. 正名方言の格形式

		用例
はだか格	対格	hissa kurubu ka-da-N 先ほど ミカン 食べる-PST-IND 先ほどミカンを食べた
	主格	wanu mu-tta: 私 持つ-INT 私が持とう
	時間格 時間的空間	ɸudu takkoi naɸa=gatʃi ʔi-dʒa-N 去年 2 回 沖縄=ALL 行く-PST-IND 去年 2 回 沖縄に 行った
ga 格	主格	ʔari=ga na:=ne ʔi-ttʃu-nu hadʒi 3sg=NOM 中=LOC 入る-CONT-ADN SUPP 「かれが中に入っているはずだ」
	属格	ʔaja=ga ʃumutʃi=wa ʔama=ne a-ŋ 姉=GEN 本=TOP あそこ=LOC ある-IND 「おねえさんのほんはあそこにある」
nu 格	主格	çi:=nu ɸa:=nu hari-ti ʃimo-ta-mu 木=GEN 葉=NOM 晴れる-GER しまう-PST-IND 「木の葉が枯れてしまった」
	属格	ʔuri=wa ʔanu tʃu:=nu ʃumutʃi =doja: それ＝TOP あの 人＝GEN 本 ＝ASR 「それはあの人の本だよ。」
ni 格	与格 方向	<ɸu:ʃa>=nu hani=nu ʔi:=ni muko-tu-mu 風車=GEN 羽=NOM 西=DAT 向かう-CONT-IND 風車の羽が西に向かっている。
	与格 あいて	ʔunu hana=wa tudʒi=ni kuri-ra その 花=TOP 妻=DAT くれる-INT 「その花は妻にやる」
	時間格	ʔari=wa <jodʒi>=ni=wa ki-ŋ =ga 3sg=TOP 4 時=TEMP=TOP 来る:NPST-IND ASR 「彼は 4 時には来るわ」
ne 格	所格	ʔatʃa=wa ja:=ne wu-ŋ 父=TOP 家=LOC いる-IND 「お父さんは家にいる」
	与格 比較の対象	ʔanu kwa:=wa ʔuja=ne ni-ttʃu-ŋ あの 子=TOP 親=LOC 似る-CONT-IND 「あの子は親に似ている」
	与格 くっつく所	tʃira=ne=wa nu:ka=nu tʃi-ttʃu-N 顔=LOC=TOP 何か=NOM つく-CONT-IND 顔には何かがついている。
gatʃi 格	向格 行先	nama=kara ʔuɸutʃikanu=gatʃi ʔiki-N 今=ABL 大津勘=ALL 行く-IND 「今から大津勘に行く」
	与格 相手	taro:=gatʃi=wa gai-tʃa-ʃiga 太郎=ALL=TOP 言う-PST-
ʃi:格	具格 道具	ʔunu <peŋ>=ʃi: ha-ttʃimu jukwa-N=nja? その ペン=INST 書く-CONC 良い-IND-YNQ 「そのペンで書いても良い？」
	具格 手段	çini=ʃi: ʔerabu=gatʃi ki-ttʃa-N 船=INST 沖永良部=ALL 来る-PST-IND

		「船で沖永良部に来た」
	具格 素材	mukaʃì=wa jaː=wa çiː=ʃìː tʃuku-rar-ita-N 昔=TOP 家=TOP 木=INST 作る-PASS-HABIT.PST-IND 「昔は家は木で作られていた」
neti 格	所格 場所	jaku=wa jamatu=neti hatara-tʃu-N 兄=TOP 日本本土=LOC 働く-CONT-IND 「兄は日本本土で働いている」
	時間格 時間状況	kinju=neti ʃi-ra-N-nja na-ra-dana ʔa-tta-ʃiga 昨日=LOC する-NEG-IND-COND なる-NEG-SEQ ある-PST-AC 昨日のうちにしなければならなかったけど
dʒi 格	所格 場所	ʔaro=dʒi ʔaʃib-a 外=LOC 遊ぶ-INT 外で遊ぼう
kara 格	奪格 出発点	ʔunu ʔiʃi=wa tinto=kara ʔuti-ti ki-ttʃa-N その 石=TOP 空=ABL 落ちる-SEQ 来る-PST-IND 「その石は空から落ちてきた」
	所格 経由点	<doa>=nu ʃaː=kara ʔani=nu jaː=gatʃi ʔi-ttʃi ʔakki-mu ドア=GEN 下=ABL アリ=SUB 家=ALL 入-SEQ 歩く-IND 「ドアの下からアリが家に入っている」
	時間格 はじまるとき	tui=wa naː timiti=kara na-ttʃu-ŋ 鳥=TOP もう 朝=ABL 鳴く-CONT-IND 「鳥はもう朝から鳴いている」
	具格 素材・原料	<biːru>=wa mugi=kara tʃukui-Ø ビール=TOP 麦=ABL 作る-IND 「ビールは麦から作る」
Ntane/tane 格	到達格 空間	tʃaːma dʒiNnja=Ntane ʔi-dʒi ki-N 少し 知名=LMT 行く-SEQ 来る:NPST-IND 「ちょっと知名まで行ってくる」
	到達格 時間	<dʒuːdʒi>=Ntane <beŋkjoː> ʃi-ra 10 時=LMT 勉強 する-INT 「10 時まで勉強しよう」
tu 格	与格 相手	taroː=ga dʒiroː=tu juːguri ʃa-N 太郎=NOM 次郎=COM けんか する:PAST-IND 「太郎が次郎とけんかした」
	共格	taroː=tu madʒini nu-da-mu 太郎=COM 一緒に 飲む-PST-IND 「太郎と一緒に飲んだ」
	与格 比較の対象	<ɸuku>=wa ʔatʃa=tu junu muŋ =ga 服=TOP 父=COM 同じ もの ASR 「服はお父さんと同じだわ」
jukkwa 格	比格	wana ʔjuː=nu miː=jukkwa hoː=du ʃikki =dja 1sg:TOP 魚=GEN 身=CMP 皮=FOC 好き =ASR 「私は魚の身より皮が好きだよ」

はだか格、ga 格、nu 格、ni 格、ne 格、gatʃi 格、ʃiː格、neti 格、dʒi 格、kara 格、Ntane/tane 格、tu 格、jukkwa 格の 13 の格形式がある。このセクションでは、各格形式とその使用に触れる。

3.5.3.1 はだか格

はだか格は、名詞に助詞がついていない語形である。これには、さまざまな文法的な意味がある。

次の用例は、対格としてのはだか格をしめす。日本語の「を」に相当する格助詞がなく、対格をしめす助詞が沖永良部語正名方言にない。

32) hissa kurubu ka-da-N
先ほど ミカン 食べる-PST-IND
先ほどミカンを食べた

動作主や状態の持ち主をあらわす主格でもはだか格があらわれる。

32) wanu mu-tta:
私 持つ-INT
私が持とう

時間をあらわす名詞 ɸudu「去年」、ɸutabe「今年」、hju:「今日」などにも助詞がつかず、はだかの形で用いられることがある。

33) ɸudu takkoi naɸa=gatʃi ʔi-dʒa-N
去年 2 回 沖縄=ALL 行く-PST-IND
去年 2 回 沖縄に 行った

3.5.3.2 ga 格

ga は主格か属格をあらわす。ga がつく名詞は、有情性の高い、人称代名詞、肩書き、親族呼称、固有名詞（人名）に限られている。次の用例は、主格にあらわれる-ga の用例である。

34) ʔari=ga na:=ne ʔi-ttʃu-nu hadʒi
3sg=NOM 中=LOC 入る-CONT-ATT SUPP
かれが中に入っているはずだ。

35) ʔaja=ga na:=ne ʔi-ttʃu-nu hadʒi
母=NOM 中=LOC 入る-CONT-ATT SUPP
お母さんが中に入っているはずだ。

36) <kutʃo:>=ga na:=ne ʔi-ttʃu-nu hadʒi
区長=NOM 中=LOC はいる-CONT-ATT SUPP
区長が中に入っているはずだ。

37) taro:=ga na:=ne ʔi-ttʃu-nu hadʒi
太郎=NOM 中=LOC 入る-CONT-ADN SUPP
太郎が中に入っているはずだ。。

次の用例は、属格の用例である。

38) ʔari=ga <hoŋ>=wa ʔama=ne a-N
3sg=GEN 本=TOP あそこ=LOC ある-IND
かれの本はあそこにある。

39) ʔaja=ga <hoŋ>=wa ʔama=ne a-N
姉=GEN 本=TOP あそこ=LOC ある-IND
おねえさんのほんはあそこにある。

40) <kutʃoː>=ga <hoŋ>=wa ʔama=ne a-N
区長=GEN 本=TOP あそこ=LOC ある-IND
区長の本はあそこにある。

41) taroː =ga <hoŋ>=wa ʔama=ne a-N
太郎=GEN 本=TOP あそこ=LOC ある-IND
太郎の本はあそこにある。

3.5.3.3 nu 格

正名方言の場合、nu は、上で詳しく述べたように、文法的には ga と同じ分布をしているが、ga に比較すれば、もっと有生性が低い名詞につく。taru「だれ」を除いて、疑問詞代名詞にも nu がつく。次は、nu が主格としてあらわれる用例である。

42) ʔutu=nu[1] naː=ne ʔi-ttʃu-nu hadʒi
弟/妹=NOM 中=LOC 入る-CONT-ATT SUPP
弟が中に入っているはず。

43) ʔama=ne <koːmiŋkaŋ>=nu ʔa-N
あそこ=LOC 公民館=NOM ある-IND
あそこに公民館がある。

44) ʔama=ne jaː=nu ʔa-N
あそこ=LOC 家=NOM ある-IND
あそこに家がある。

45) çiː=nu ɸaː=nu hari-ti ʃimo-ta-mu
木=GEN 葉=NOM 晴れる-SEQ しまう-PST-IND
木の葉が枯れてしまった。

46) tʃukkoi=ni juːtʃi=nu kuruma=nu tuː-ta-mu
一回=ADVL 四つ=GEN 車=NOM 通る-PST-IND
一回に四つの車が通った。

47) ʔama=ne nuː=nu ʔa-N =jo?
あそこ=LOC 何=NOM ある-IND WHQ
あそこに何がある？

48) <mijakodʒima>=nu ʔuda=nu jukkwa-N =jo?
宮古島=GEN どこ=NOM 良い-IND =WHQ
宮古島のどこが良い？

49) ʔuduru=nu jukkwa-N =jo?
どれ=NOM 良い-IND WHQ

[1] 3.5.1 章で前述したように、ʔutu「弟・妹」は、有情名詞ではあるが、呼称でないため、有情性が低いとされる。

どれが良い？

nu が属格としてあらわれる用例は、次のとおりである。

50) çi:=nu　ɸa:=nu　hari-ti　ʃimo-ta-mu
木=GEN　葉=NOM　枯れる-SEQ　しまう-PST-IND
「木の葉が枯れてしまった」

51) mittʃe:=nu　na:=neti　taNka=ga　tu-tta-ʃi=wa　matʃige　na-N
3 人=GEN　中=LOC　誰か=NOM　とる-PST-NML=TOP　間違い　ない-IND
3 人の中で誰かがとったのは間違いない。

52) tʃukkoi=ni　ju:tʃi=nu　kuruma=nu　tu:-ta-mu
一回=ADVL　四つ=GEN　車=NOM通る-PST-IND
一回に四つの車が通った。

3.5.3.4 ni 格

ni は、授受相手、使役相手、受身相手をあらわす場合、与格（DAT）としてグロスを入れることにする。次の用例のとおりである。

53) ʔunu　hana=wa　tudʒi=ni　kuri-ra
その　花=TOP　妻=DAT くれる-INT
その花は妻にあげる。

54) warabi=ni　<tegami>　hakk-as-a
子供=DAT　手紙　書く-CAUS-INT
子供に手紙を書かせよう。

55) ʔunu　<ʃorui>=wa　ʔutu=ni　hakk-aʃi-N
その　書類=TOP　弟・妹=DAT　書く-CAUS-IND
その書類は弟に書かせる。

56) niʃisaŋ=ni　so:-rar-a
西さん=DAT　連れる-PASS-INT
西さんに連れてもらおう。

57) ʔinu=ni　kam-a-tta-N
イヌ=DAT　噛む-PASS-PST-IND
イヌに噛まれた。

58) ami=ni　ɸu-ra-tta-N
雨=DAT 降る-PASS-PST-IND
雨に降られた。

59) ʔanu　tʃu:=ni　taʃiki-ra-tta-N
あの　人=DAT　助ける-PASS-PST-IND
あの人に助けられた。

60) wana:　ʔaja=ni　tanum-a-tti　<tegami>　hakki-N
私:TOP　姉=DAT　頼む-PASS-SEQ　手紙　書く-IND
私はおねえさんに頼まれて、手紙を書く。

時間も ni であらわされるが、その場合は、TEMP というグロスをつけることにする。

61) ʔjuː kwaːʃi-ga iki-nu tuki=ni jamajoʃija=nu
魚 つる-PUR 行く-ADN 時=TEMP やまよしや=NOM
wugi toː-tʃi ...
砂糖きび 倒す-SEQ
魚をつりに行くときに、やまよしや（屋号）の砂糖きびを倒して...

62) ʔari=wa <jodʒi>=ni=wa ki-ŋ =ga
3sl=TOP 4 時=TEMP=TOP 来る-IND ASR
彼は 4 時には来るわ。

-ni が選択の範囲をあらわすこともある。

63) juːtʃi=nu ʔutʃi=ni tiːtʃi ʔirab-i
4 つ=GEN うち=DAT 一つ 選ぶ-IMP
4 つのうちに 1 つを選べ。

ni は句を副詞句にする働きもある。

64) tʃukkoi=ni juːtʃi=nu kuruma=nu tuː-ta-mu
一回=ADVZ 4 つ=GEN 車=NOM 通る-PAS-IND
一回に 4 つの車が通った。

65) ʔura=wa ʔunu kwaːʃi dʒoːdʒi=ni tʃuku-ta-N =sa
2sl=TOP その お菓子 上手= ADVZ つくる-PST-IND =ASR
あなたはそのお菓子を上手に作ったわ。

3.5.3.5 ne 格

格助詞の ne がつく名詞は、人や物の存在するありかをあらわす。

66) ʔari=ga naː=ne ʔi-ttʃu-nu hadʒi
3sl=NOM 中=LOC 入る-CONT-ADN SUPP
彼が中に入っているはずだ。

67) ʔama=ne jaː=nu a-N
あそこ=LOC 家=NOM ある-IND
あそこに家がある。

68) ʔatʃa=wa jaː=ne wu-N
父=TOP 家=LOC いる-IND
お父さんは家にいる。

69) ʔatʃa=wa kuruma=ne nu-ttu-N
父=TOP 車=LOC 乗る-CONT-IND
お父さんは車に乗っている。

70) kubi=ne nubutu=nu ʔidʒi-tu-N
首=LOC にきび=NOM でる-CONT-IND
首ににきびがでている。

71) mi:=ne　mi:tʃiŋka=nu　diki-ta-N
目=LOC　ものもらい=NOM　できる-PST-IND
目にものもらいができた。

72) hatte=ne　ʔo:ha　ʔui-ti　ʔa-N
畑=LOC　野菜　植える=SEQ　ある-IND
畑に野菜が植えてある。

ne 格が比較の対象をあらわすばあいもある。

73) ʔanu　kwa:=wa　ʔuja=ne　ni-ttʃu-N
あの　子=TOP　親=DAT　似る-CONT-IND
あの子は親に似ている。

3.5.3.6 gatʃi 格

gatʃi は、移動動作の方向をあらわす。

74) ʔama=gatʃi　ʔiki-ʃi=wa　ʔagumaʃa-N-tu　ʔma:=gatʃi
あそこ=ALL　行く-NML=TOP　しんどい-IND-CSL　ここ=ALL

ɸu:-raʃi-ŋ
来る-CAUS-IND

あそこへ行くのはしんどいから、ここに来させる。

75) ʔuda=gatʃi　ʔik-i-mu　=ditʃi　gai-tʃu-ti　=jo?
どこ=ALL　行く-NPST-IND　QUOT　言う-CONT-GER　WHQ
どくへ行くと言っていた？

次の用例のように、gatʃi がくっつきをあらわすばあいもある。

76) mu:ru　hju:-ti　<kago>=gatʃi　ʔiri-tu-N　=dja
全部　拾う-SEQ　かご=ALL　入れる-CONT-IND　ASR
全部拾って、かごに入れているわ。

3.5.3.7 ʃi:格

琉球諸語において共通している特徴の一つは、「する」に相当する動詞の中止形が文法化して、道具や手段、材料や原料をあらわすことである。正名方言の場合、それは ʃi:mu「する」の中止形に由来する ʃi:である。ʃi:の用例は、次のとおりである。

次の用例は、道具をあらわす ʃi:の例である。

77) ʔunu　<peŋ>=ʃi:　ha-ttʃimu　jukwa-N=nja?
その　ペン=INST　書く-CONC　良い-IND=YNQ
そのペンで書いても良い？

78) gja:gja=wa　<haŋkatʃi>=ʃi:　ɸu-ttʃu-N　=dja
祖父=TOP　ハンカチ=INST　拭く-CONT-IND　=ASR
おじいさんはハンカチで拭いているわ。

次の用例では、ʃi:が手段をあらわす。

79) çini=ʃi: ʔirabu=gatʃi ki-ttʃa-N
船=INST 沖永良部=ALL 来る-PST-IND
船で沖永良部に来た。

次の用例では、ʃi:が材料をあらわす。

34) mukaʃi=wa ja:=wa çi:=ʃi: tʃuku-rar-ita-N
昔=TOP 家=TOP 木=INST 作る-PASS-HABIT.PST-IND
昔は家は木で作られていた。

3.5.3.8 kara 格

格助詞の kara がつく名詞は、移動動作の出発点、物事が出てきたところ、移動動作の手段、生産動作の材料、動作やできごとがはじまる時間をあらわす。

35) <dojo:bi> ʔutu=nu naɸa=kara mudu-ti ki-N
土曜日 弟・妹=NOM 沖縄=ABL 戻る-SEQ 来る-IND
土曜日弟が沖縄から戻ってくる。

36) ʔunu ʔiʃi=wa tiNto=kara ʔuti-ti ki-ttʃa-N
その 石=TOP そら=ABL 落ちる-GER 来る-PST-IND
その石は空から落ちてきた。

次の用例では、kara が原料をあらす。

37) <bi:ru>=wa mugi=kara tʃukui-Ø
ビール=TOP 麦=ABL 作る-IND
ビールは麦から作る。

kara がはじまる時間をあらわすばあいもある。

38) tui=wa na: timiti=kara na-ttʃu-N
鳥=TOP もう 朝=ABL 鳴く-CONT-IND
鳥はもう朝から鳴いている。

39) gaNʃi çe:sa=kara ʔui-tu-N=nja?
そんなに 早く=ABL 起きる-CONT-IND=YNQ
そんなに早くから起きているか？

名詞が移動動作の手段をあらわす場合、ʃi:も kara も用いられるが、kara の使用は、動作手段が動作主によって運転されない場合に限られている。

40) çini=ʃi: ʔirabu=gatʃi ki-ttʃa-N
船=INST 沖永良部=ALL 来る-PST-IND
船で沖永良部に来た。

41) çini=kara ʔerabu=gatʃi ki-ttʃa-N
船=ABL 沖永良部=ALL 来る-PST-IND
船で沖永良部に来た。

3.5.3.9 neti 格

neti は、働きや状態がなりたつ場所と時間状況をあらわす。

42) jaku=wa jamatu=neti hatara-tʃu-N
兄=TOP 日本本土=LOC 働く-CONT-IND
兄は日本本土で働いている。

43) kinju=neti ʃi-ra-N-nja na-ra-dana ʔa-tta-ʃiga
昨日=LOC する-NEG-IND-COND なる-NEG-SEQ ある-PST-AC
昨日のうちにしなければならなかったけど。

3.5.3.10 dʒi 格

dʒi 格は、働きや状態がなりたつ場所をあらわす。沖縄語諸方言にある Ndʒi 格と同じく、動詞ʔikimu「行く」の-ti 中止形ʔidʒi の文法化した形であると考えられる。當山（2015：55）によると、沖縄語平安座方言における「行く」の中止形由来の助詞が「はなし手のいる場所（発話の場所）と異なる空間で動作が行われるばあいに使われる」とのことであるが、沖永良部語正名方言のばあいもそうであるかが不明である。

44) ʔaro=dʒi ʔaʃib-a
外=LOC 遊ぶ-INT
外で遊ぼう。

3.5.3.11 Ntane

Ntane が名詞に付くばあい、動作の到達点、または終わる時間をあらわす。

45) tʃa:ma <tʃina>=Ntane ʔi-dʒi ki-N
少し 知名=LMT 行く-SEQ 来る-IND
ちょっと知名まで行ってくる。

46) <dʒu:dʒi>=Ntane <beŋkjo:> ʃi-ra
10 時=LMT 勉強 する-INT
10 時まで勉強しよう。

Ntane が連続母音でおわる名詞につくばあい、超重音節を避けるために N が脱落し、tane という形で名詞につく。

47) wodomai=tane ʔa-ttʃi ʔiki-N=nja?
和泊=LMT 歩く-SEQ 行く-IND-YSQ
和泊まで歩いていくのか？

3.5.3.12 tu 格

tu がつく名詞は、相互動作の相手、いっしょに動作をおこなう仲間をあらわす。

48) ʔari=wa taro:=tu mi:biki ʃa-N
3sl=TOP 太郎=COM 結婚 する:PAST-IND
彼女は太郎と結婚した。

49) taroː=ga　dʒiroː=tu　juːguri　ʃa-N
太郎=NOM　次郎=COM　けんか　する:PAST-IND
太郎が次郎とけんかした。

50) miːbiki=wa　ʔura=tu=wa　ʃi-rar-a-N
結婚=TOP　2sl=COM=TOP　する-POT-NEG-IND
結婚はあなたとはできない。

51) ʔagu=tu　ʔaʃibi-ga　ʔi-dʒi　ki-ttʃa-N
友達=COM　遊ぶ-PUR　行く-SEQ　くる-PAST-IND
友達と遊びに行ってきた。

次の用例では、tu が比較の対象をあらわしている。

52) <ɸuku>=wa　ʔatʃa=tu　junu　muŋ　=ga
服=TOP　父=COM　同じ　もの　= ASR
服はお父さんと同じだわ。

53) nama=nu　kamimuŋ=wa　mukaʃi=tu　tʃigoi-Ø
今=GEN　食べ物=TOP　昔=COM　違う-IND
今の食べ物は昔と違う。

3.5.3.13 jukkwa 格

jukkwa 格は、比較の基準となる名詞につく。

54) junnu=jukkwa　naɸa=du　tuːsa-ru
与論=COMP　沖縄=FOC　遠い-EMPH
与論より沖縄のほうが遠い。

4 動詞形態論

沖永良部語正名方言は、膠着言語（agglutinative language）である。動詞に語根があり、それに接辞がつく。内的な形態論的な構造をもっている語幹につく接辞もある。このセクションで正名方言の形態論をなるべく共時的な観点から考察する。

14. 動詞語根

	非過去第 1 終止形	語根	否定第 1 終止形（語根＋-(r)a(:)-+-mu）
通時的 r/w 語根			
1 音節 r/w 語根（とる）	tuimu	tu-	tu-ramu
長音+r/w 語根（しめる）	kuimu	kuː-	kuː-ramu
2 音節 r/w 語根（ねむる）	nibuimu	nibu-	nibu-ramu

3 音節 r/w 語根（あわてる）	ʔiʃugaimu	ʔiʃuga-	ʔiʃuga-ramu
k 語根			
1 音節 k 語根（きく）	kikimu	kik-	kik-amu
kk 語根（おく）	ʔukkimu	ʔukk-	ʔukk-amu
鼻音＋k 語根（うごく）	ʔuNkimu	ʔuNk-	ʔuNk-amu
2 音節 k 語根（たたく）	tatakimu	tatak-	tatak-amu
3 音節 k 語根（はたらく）	hatarakimu	hatarak-	hatarak-amu
s 語根			
ss 語根（ほす）	ɸuʃʃimu	ɸuss-	ɸuss-amu
2 音節 s 語根（ころす）	ɸuruʃimu	ɸurus-	ɸurus-amu
t 語根			
tt 語根（もつ）	muttimu	mutt-	mutt-amu
有声子音語根			
b 語根（とぶ）	tubimu	tub-	tub-amu
m 語根（のむ）	numimu	num-	num-amu
音便系を伸ばす m 語根（病む）	jamimu	jam-	jam-amu
g 語根（こぐ）	ɸugimu	ɸug-	ɸug-amu
n 語根（しぬ）	ʃinimu	ʃin-	**ʃinjamu**
母音語根			
1 音節母音語根（える）	jiːmu	ji-	ji-ramu
長母音語根（まける）	meːmu	meː-	meː-ramu
母音連続語根（おきる）	ʔuimu	ʔui-	ʔui-ramu
2 音節母音語根（うごく）	mugemu	muge-	muge-ramu
3 音節母音語幹（みだれる）	nidʒarimu	nidʒari-	nidʒari-ramu
接近音語根			
ゼロ母音接近音語根（はいる）	ʔiːmu	ʔj-	ʔj-aːmu
（走る）	ɸaimu	ɸaj-	ɸaj-amu
（いう）	gaimu	gaij-	gaij-amu (gajamu)
（生きる）	ʔikimu	ʔikj-	ʔikj-amu
不規則母音語根			
いらっしゃる（行く、来る）、おっしゃる	ʔmeːmu	ʔmoː-	ʔmoː-ramu
補充活用動詞			
（いく）	ʔikimu	ʔik-	ʔik-amu
r 語根動詞			
接近音語根の受身形・可能形（見られる）	mjaːrimu	mjaːr-	mjaːr-amu
その他の語根の受身形・可能形（とられる）	turarimu	turar-	turar-amu
不規則動詞			
（する）	ʃiːmu	(s-)	**ʃiramu**
（召し上がる）	ʔoiʃimu	(ʔois-)	**ʔoisiramu**
（来る）	kiːmu	(k-)	**ɸuːmu**
存在動詞			
（ある）	ʔaːmu	ʔa-	ʔa-rabamu*
（いる）	wuːmu	wu-	wu-ramu
長母音語根（いらっしゃる）	ʔmeːmu	ʔmeː	ʔmeː-ramu

*ʔaːmu「ある」の否定形は、naːmu であり、補充形式であるため、ここでʔaːmu の語根につく接辞として-rabamu という条件形の接辞をあげる。

Booij（2005：28）によると、語幹（stem）は、派生・屈折接辞がつきえる基幹的部分であり、内的な形態論的構造をもっている複合的な語幹もあれば、内的な形態論的構造をもっていない単純な語幹もある。単純な語幹のことを語根（root）とよぶ。語根に形態素をくわえると、語幹になることもできる。

沖永良部語正名方言における語根は、形態論的に単純である。連用形（あるいは、連用語幹）と非過去尾略形と t 接辞の音便形は、語根がある形態論的な過程をへた形式であるが、語根自体も接辞がつきえる語幹として機能する。

沖永良部語正名方言における通時的 r/w 語幹動詞は、1 つのカテゴリーになり、共時的に分析すれば、母音語根である。否定形などにあらわれる r は、否定接辞にあるという立場をとる。それは、受身・可能形接辞-(r)ar-が共時的に r 語根のような形態論的な振る舞いをしめすためである。受身・可能形接辞の連用形と非過去尾略形-(r)ari-には、r があらわれるのに対し、通時的 r/w 語幹動詞 tuimu「とる」の連用形と非過去尾略形 tui-には、r があらわれない。

k 語根動詞には、一拍語根動詞が kikimu「聞く」しかないが、ʔikimu「行く」も語幹としては、k 語幹の振る舞いをしめすが、活用に補充形式があるため、動詞の形態論的分類の面では、別のカテゴリーになる。その他の日本語の一拍 k 語根動詞に相当する動詞は、kk 語根になる点が特徴的である。正名・住吉・田皆の方言で語根の強化がおこっているが、その周辺の集落の方言では、語根の強化がおこっていないようである[2]。kikimu「聞く」とʔikimu「行く」という、きわめて使用頻度が高い動詞に同じ変化がおこっていないことで例外的である。

s 語根と t 語根では、一拍語根動詞がなく、ss 語根と tt 語根がある。一拍語根の最後の子音の強化がこれらのカテゴリーにもおこったようである。

有声子音語根では、唯一の n 語根動詞 ʃinimu「死ぬ」の語根の n がその前と後ろにある i に同化されたため、/ɲ/として実現されているが、a ではじまる接辞がつくばあいにも ʃinjamu（/ʃiɲamu/）のように、口蓋化した形であらわれる。u ではじまる接辞がつくばあいは、ʃinu-Ntane「死ぬまで」のように、口蓋化がおこらない。

通時的 e 母音語根のなかでは、共時的に分析すれば、語根が i でおわる動詞もあれば、e でおわる動詞もある。さらに、語根が調音 eːでおわる動詞もある。

接近音語根動詞は、語根が接近音 j でおわるが、日本語の i 語根に相当する動詞が多い。接近音語根に否定接辞-(r)a(ː)-のような、r ではじまる異形態素をもっている形態素がつくばあい、その接辞が r 無しでつくという点では、子音語根のような振る舞いをしめす。このカテゴリーには、子音＋j のみに構成されている、母音が入っていない語根が多い（例：miːmu「見る」語根 mj-、kiːmu「切る」語根 kj-、niːmu「似る」語根 nj-、ʔiːmu「入る」語根 ʔj-）。ɸaimu「走る」のような V＋j でおわる語根（ɸaj-）と 、ʔikimu「生きる」のような C＋j でおわる語根（ʔikj-）がきわめて少ない。このような語根に i ではじまる接辞がつくばあい、語根の j が i に同化し、ʔiːwa「入れば」やʔikiwa「生きれば」のように表層形式に j があ

[2] 正名方言のʔukkimu「置く」は、大津勘方言では、ʔukjumu になる。

らわれない。語根が単一の j に構成されている動詞 jiːmu「座る」のばあいのみ、jiːwa「座れば」のように、表層形式にも語根の j があらわれる。

不規則母音語根動詞は、語根の振る舞いが通時的 r/w 語根動詞と同じく、否定接辞-(r)a(ː)-のような、r ではじまる異形態素をもっている形態素がつくばあい、その接辞が r であらわれる（例：ʔmeːmu「いらっしゃる （行く・来る）・おっしゃる」語根ʔmoː-、否定形ʔmoːramu）。

不規則動詞には、語根を決定するのが困難であるものがある。ʃiːmu「する」と ʔoiʃimu「召し上がる・差し上げる」のばあいは、内的な形態論的構造をもっていない語根として認め得るものは、ʃiːmu には、s-であり、ʔoiʃimu には、ʔois-であるが、さまざまな形態素がことなる語幹につくため、不規則として認めざるを得ないようである。下で、つく形態素ごとに考察することにする。kiːmu「来る」がさらに不規則的な振る舞いをしめすため、これも下でつく形態素ごと考察することにする。

存在動詞は、形態論的に通時的 r/w 語根動詞とほぼ同じ振る舞いをしめす。通時的 r/w 語根動詞との相違点については、後述する。特徴的な点としては、存在動詞ʔmeːmu「いらっしゃる（いる）」（語根ʔmeː-）は、ʔmeːmu「いらっしゃる （行く・来る）・おっしゃる」（語根ʔmoː-）に由来するが、存在動詞ʔmeːmu が運動動詞ʔmeːmu から形態論的に分岐して別の動詞として成立したと考えられる。

ʔmeːmu は、沖縄語の平民敬語の運動動詞ʔimeːN と同源であると考えられる。その語源は、仲宗根（1987：224）によると、尊敬接頭辞イミ＋尊敬語動詞オワルにある。オワルという動詞は、「ある」、「居る」、「行く」、「来る」の敬語であり、活用は、ス段からラ行化しつつあったと考えられ、活用にすでにラ行的な形式もあれば、ス行的な語形をたもっている形式もあった。仲宗根がいう〈接続形〉がオワチへになるため、これが現代の-ti 中止形に相当する形式であると考えられる。沖永良部語のみならず、現代北琉球諸語でひろく見られる、ʔmeːmu 系移動動詞の過去形としてʔmoːtʃamu というような、過去接辞の異形態素-tʃa-がらわれる形式があり、その起源が「オワチへ」というようなサ行動詞の形式にあるであろう。さかのぼると、*ʔimiowatʃa か*ʔimiowatʃari のような形式からʔmoːtʃamu ができたと考えられる。

すなわち、ʔmeːmu という語形は、存在動詞の意味でも移動動詞という意味でもʔimi-owari-ori に由来するが、語尾-ri のかわりに-mu が入った。移動動詞の過去形ʔmoːtʃamu は、ʔimi-owatʃa に由来するのに対し、第 2 過去形とも言われる、形態素-ita-による反復習慣過去形ʔmeːtamu は、ʔimi-owari-otta に由来する。次のような変容を遂げたと考えられる。

ʔimi-owari-otta > ʔmoːi-uta-mu > ʔmoːjutamu > ʔmoitamu > ʔmeːtamu

この第 2 過去形が存在動詞ʔmeːmu と移動動詞ʔmeːmu の分岐過程に大きな役割をはたした。次の表のとおりである。

15. 存在動詞ʔmeːmu と移動動詞ʔmeːmu の分岐の過程は、Ⓐ、Ⓑ、Ⓒという 3 つの段階にわけることができる。

イミオワル 意味解釈：①行く、来る ②居る

Ⓐ ↙ ʔme:tamu イミオワリオッタ相当 意味解釈：①行きオッタ・来オッタ ②居た	Ⓐ ↓ ʔme:mu イミオワリオリ相当 意味解釈：①行キオル、来オル ②居オル	↘ Ⓐ ʔmo:tʃamu イミオワチャ相当 意味解釈：行った・来た
Ⓑ ↓ 過去の反復習慣も過去の存在も過去も状態的な意味に非常に近い（Bybee, Perkins, Pagliuica 1994 : 152）。第 2 過去形式は、過去の状態性をあらわすというとらえ方によって、ʔme:mu の存在動詞としての使用においては、唯一の過去形式になる。イミオワリオッテ相当の ʔme:ti が ʔme:mu の存在動詞としての使用の唯一の中止形になり、存在動詞が独立した活用をもつようになり、事実上移動動詞ʔme:mu と分岐する。	Ⓑ ↓ イミオワル相当が衰退し、イミオワリオリ相当ʔme:mu がその文法的な意味をもつようになる。シオリ相当形式としての反復習慣、または、一時的な状態という意味解釈が不可能になる。 意味解釈：①行く、来る ②居る	Ⓑ ↓ 状態的な意味でとらえにくくなるにつれ、そのような解釈の可能性をうしない、移動動詞の過去形という解釈以外の解釈が不可能になる。
Ⓒ ↓ 移動動詞と分岐し、活用の再分析がはじまる。存在動詞の非過去形が ʔme:mu であり、過去形がʔme:tamu であるため、語根としてʔme:-が再分析され、否定形がʔme:ramu、命令形がʔme:ri になり、完全に規則的な活用をもつようになる。		Ⓒ ↓ 移動動詞ʔme:mu の過去形は、ʔmo:ramu のままであり、命令形は、ʔmo:ri のままである。

沖縄語の形容詞の過去形の尊敬形と過去形の尊敬形の丁寧形を見ると、過去の状態をあらわすには、いわゆる第 2 過去形式が用いられることが分かる[3]。現在沖永良部語は、そうでないが、かつては、そうであるとすると、その〈状態〉という意味によって、ʔme:tamu の意味が「行く・来る」の過去の反復習慣と、あるありかにおける過去の存在という 2 つの状態的な意味としての解釈のみがのこり、ʔmo:tʃamu が過去の移動としての解釈のみがのこったと考えられる。それに伴い、存在という意味では、第 2 過去形が存在動詞の過去形として再分析され、もう 1 つの t 接辞である-ti 中止形も第 2 過去形の形態論的な特徴をもつようになり、存在動詞ʔme:mu の-ti 中止形がʔmo:tʃi よりʔme:ti になったと考えられる[4]。これで段階Ⓑ

[3] 沖縄語の suN の尊敬形 ʃimise:N の諸形式：シタ相当 ʃimiso:tʃaN、シオッタ相当 ʃimise:taN 、シテオル相当 so:mise:N、シテオッタ相当 so:mise:taN。wakasaN「若い」の尊敬形諸形式：オワカイ相当 wakasamise:N、オワカカッタ相当、wakasamise:taN。シテオッタ相当として*so:miso:tʃaN が非文法的であり、オワカカッタ相当として*wakasamiso:tʃaN が非文法的であることから過去の状態をあらわすには、かならず第 2 過去形が用いられることが分かる。

[4] ʔmo:tʃi「行って・来て」とʔme:ti「いて」という区別は、沖縄語中南部方言でも見られる。次の用例は、沖縄語南風原喜屋武方言における mo:tʃi「行かれて・来られて」と me:ti「おられて」の区別を立証するし、mo:raN が「おられない」という意味と「行かれない・来られない」という意味を両方もっていることも立証する。

ʃiNʃi:=ga madʒuN mo:tʃiN mo:raNtiN ʔika 「先生が一緒に行かれて行かれなくても行こう」

がおわり、段階©がはじまる。段階©では、正名方言で存在動詞ʔme:mu がさらに、ʔmo:より ʔme:-が語根として再分析されたため、否定接辞-ra-や条件形接辞-riwa や命令形接辞-ri などが ʔme:ramu「いらっしゃらない」、ʔme:riwa「いらっしゃれば」、ʔme:ri「いらっしゃい」という風にʔme:-につくようになった。沖縄語諸方言をはじめ、北琉球語群の多くの言語変種が段階Ⓑでとどまっているようである。

16. 語幹としての旧連体形

	非過去第 1 終止形	語根	旧連体形（語根＋-(r)u(:)）	禁止形（語根＋-na）
通時的 r/w 語根				
1 音節 r/w 語根（とる）	tuimu	tu-	tu-ru	turu-na/tuN-na
長音+r/w 語根（しめる）	kuimu	ku:-	ku:-ru	ku:ru-na
2 音節 r/w 語根（ねむる）	nibuimu	nibu-	nibu-ru	niburu-na/nibuN-na
3 音節 r/w 語根（あわてる）	ʔiʃugaimu	ʔiʃuga-	ʔiʃuga-ru	ʔiʃugaru-na/ ʔiʃugaN-na
k 語根				
1 音節 k 語根（きく）	kikimu	kik-	kik-u	kiku-na
kk 語根（おく）	ʔukkimu	ʔukk-	ʔukk-u	ʔukku-na
鼻音＋k 語根（うごく）	ʔuNkimu	ʔuNk-	ʔuNk-u	ʔuNku-na
2 音節 k 語根（たたく）	tatakimu	tatak-	tatak-u	tataku-na
3 音節 k 語根（はたらく）	hatarakimu	hatarak-	hatarak-u	hataraku-na
s 語根				
1 音節 s 語根（ほす）	ɸuʃʃimu	ɸuss-	ɸuss-u	ɸussu-na
2 音節 s 語根（ころす）	ɸuruʃimu	ɸurus-	ɸurus-u	ɸurusu-na
t 語根				
tt 語根（もつ）	muttimu	mutt-	mutt-u	muttu-na
有声子音語根				
b 語根（とぶ）	tubimu	tub-	tub-u	tubu-na
m 語根（のむ）	numimu	num-	num-u	numu-na
音便系を伸ばす m 語根（病む）	jamimu	jam-	jam-u	jamu-na
g 語根（こぐ）	ɸugimu	ɸug-	ɸug-u	ɸugu-na
n 語根（しぬ）	ʃinimu	ʃin-	ʃin-u	ʃinu-na
母音語根				
1 音節母音語根（える）	ji:mu	ji-	ji-ru	jiru-na/jiN-na
長母音語根（まける）	me:mu	me:-	me:-ru	me:runa
母音連続語根（おきる）	ʔuimu	ʔui-	ʔui-ru	ʔuiru-na
2 音節母音語根（うごく）	mugemu	muge-	muge-ru	mugeru-na/ mugeN-na

ʃiNʃi:=ga ja:=Nkai me:tiN mo:raNtiN「先生が家におられてもおられなくても…」
非過去形では、「行く・来る」と「いる」の尊敬語がʔme:N で同音である。用例は、南風原町喜屋武出身の A.K.氏（1954 生）に教えていただいたものである。

3 音節母音語幹（みだれる）	nidʒarimu	nidʒari-	nidʒari-ru	nidʒariru-na/ nidʒariN-na
接近音語根				
ゼロ母音接近音語根（はいる）	ʔi:mu	ʔj-	ʔj-u:	**ʔiru-na/ ʔiN-na**
（走る）	ɸaimu	ɸaj-	ɸaj-u	?*
（いう）	gaimu	gaij-	gaij-u	**gairu-na**
（生きる）	ʔikimu	ʔikj-	ʔikj-u	**ʔikiru-na/ ʔikiN-na**
不規則母音語根				
いらっしゃる（行く、来る）、おっしゃる	ʔme:mu	ʔmo:-	ʔmo:-ru	ʔmo:ru-na
補充活用動詞				
（いく）	ʔikimu	ʔik-	ʔik-u	ʔiku-na
r 語根				
接近音語根の受身形・可能形（見られる）	mja:rimu	mja:r-	mja:r-u	mja:ru-na
その他の語根の受身形・可能形（つれられる）	so:rarimu	so:rar-	so:rar-u	so:raru-na/ so:raN-na
不規則動詞				
（する）	ʃi:mu	(s-)	**ʃiru**	**ʃiru-na/ʃiN-na**
（召し上がる）	ʔoiʃimu	(ʔois-)	**ʔoisiru**	**ʔoisiru-na/ ʔoisiN-na**
（来る）	ki:mu	(k-)	**kuru**	**kuru-na/kuN-na**
存在動詞				
（ある）	ʔa:mu	ʔa-	ʔa-ru	×
（いる）	wu:mu	wu-	wu-ru	wuru-na/wuN-na
長母音語根（いらっしゃる）	ʔme:mu	ʔme:	ʔme:-ru	?

* ɸaimu「走る」という動詞は、消えていきつつある。話者も限られている語形のみ使用し、活用しなくなっているため、その禁止形を用いないとのことである。「走る」という意味で wuduimu のほうがよく用いられるようであり、禁止形は、wuduruna、または、wuduNna「走るな」である。wuduimu は、「走る」という意味をするが、日本語の「踊る」に相当する。

沖永良部語正名方言では、旧連体形もさまざまな接辞がつく語幹として機能する。現代正名方言では、尾略形＋-nu が名詞を修飾する形式として機能しているが、かつて旧連体形にその機能があったという痕跡がいくつか残っている。程度をあらわす形式名詞 suku が旧連体形につくことがその痕跡の 1 つである。

単独では、旧連体形が動作の非実現という意味でも用いられ、疑いをあらわす疑問助詞 kaja:がついた形で疑いをあらわす疑問をあらわすのにも用いられる。旧連体形は、語根に-(r)u(:)がついた形である。連体形の接辞がどのような形で現れるかは、動詞のカテゴリーによる。このセクションでは、連体形の形態論と旧連体形につく禁止形接辞-na のつきかたを考察する。

通時的 r/w 語根動詞の旧連体形は、語根＋ru である。禁止形は、旧連体形につくが、turuna「とるな」が-ru が n に同化した形 tuNna でよく用いられる。

k 語根動詞、s 語根動詞、t 語根動詞、有声子音語根では、旧連体形の接辞が-u としてあらわれ、禁止形接辞-na がそれにつく。旧連体形が日本語の連体形に相当すると考えられる

が、t 語根の旧連体形が muttu のように t が口蓋化していない形であらわれるのが特徴的である。tʃimimu「積む」、ta:tʃi「ふたつ」、tʃu:sa「強い」という単語では、日本語のツに相当する音素が口蓋化しているが、muttu「持つ」のばあいは、なぜそうでないだろうか。なお、奄美語名瀬方言では、「待つな」が matuna であり、与論語では、「打つな」がʔutuNna である。奄美群島で話されている北琉球語群のさまざまな言語変種では、旧連体形が*mato が mattu と matu に変化したものであり、金田（2012：124）がいう、八丈語と古代日本語東国方言のオ段連体形と同源であるだろうか。

通時的 e 母音語根動詞では、通時的 r/w 語根動詞と同様に旧連体形が語根+-ru である。-na 禁止形では、-ru-が-N-まで同化することもある。

接近音語根動詞の旧連体形は、母音が入っていない語根動詞のばあいには、旧連体形接辞が-u:という調音化している形でつくのに対し、そのほかの動詞には、-u という調音化していない形でつく。接近音語根動詞は、禁止形接辞-na がつく語幹が連体形と別である語幹につく。この語幹は、語根+-iru-に構成されている。-na がその語幹について-iruna になるが、それに-iNna のように同化がおこりえるかどうかは、その同化で超重音節になるかどうかによる。ʔiruna > ʔiNna のばあいは、両方の形が許されるが、gairuna > *gaiNna のばあいは、後者は、超重音節になるため、形式が成立できず、前者のみが用いられる。通時的に見れば、語根+-iru 語幹がʔi:mu「入る」とʔikimu「生きる」の旧連体形であるが、禁止形接辞-na がつく語幹としてしか機能しない。

不規則母音語根動詞のばあいは、通時的 r/w 語根動詞と同じく語根に-ru がつく。ʔme:mu「いらっしゃる （行く・来る）・おっしゃる」の語幹 ʔmo:-に -ru がつき、ʔmo:ru になるが、このカテゴリーの動詞は、尊敬語動詞であるため、-na 禁止形が用いにくいとされる。

可能形・受身形の接辞-(r)a(:)r-の r 語根につく旧連体形接辞は、-u である。沖永良部語正名方言では、禁止形をとらえることも可能である。-na 禁止形には、so:raruna「連ラレルナ」 > so:raNna のような同化は、可能であるが、mja:runa 「見ラレルナ」のばあいは、*mja:Nna が超重音節になるため、形式が成立できない。

不規則動詞では、ʃi:mu「する」とʔoiʃimu「召し上がる・差し上げる」が同じ活用をしめし、旧連体形は、ʃiru とʔoiʃiru になる。-na 禁止形には、-ru の同化がおこりえる。ki:mu「来る」の旧連体形は、kuru であり、-na 禁止形には、-ru の同化がおこりえる。

存在動詞は、通時的 r/w 語根動詞と同様、旧連体形は、語根+-ru からなる。無生物存在動詞ʔa:mu「ある」は、禁止形をとらえることができないが、有生物存在動詞 wu:mu「いる」は、禁止形をとらえるばあい、wuruna > wuNna のような同化がおこりえる。ʔme:mu「いらっしゃる（いる）」の旧連体形は、ʔme:ru であるが、尊敬語動詞であるため、-na 禁止形が用いにくい。

17. -t-接辞の音便形

	非過去第 2 終止形	語根	-ti 中止形（音便形）
通時的 r/w 語根			
1 音節 r/w 語根（とる）	tuimu	tu-	tutti
長音+r/w 語根（しめる）	kuimu	ku:-	ku:ti
2 音節 r/w 語根（ねむる）	nibuimu	nibu-	nibuti

3 音節 r/w 語根（あわてる）	ʔiʃugaimu	ʔiʃuga-	ʔiʃugatti
k 語根			
1 音節 k 語根（きく）	kikimu	kik-	kittʃi
kk 語根（おく）	ʔukkimu	ʔukk-	ʔuttʃi
鼻音＋k 語根（うごく）	ʔuNkimu	ʔuNk-	ʔuNtʃi
2 音節 k 語根（たたく）	tatakimu	tatak-	tatatʃi
3 音節 k 語根（はたらく）	hatarakimu	hatarak-	hataratʃi
s 語根			
1 音節 s 語根（ほす）	ɸuʃʃimu	ɸuss-	ɸuttʃi
2 音節 s 語根（ころす）	ɸuruʃimu	ɸurus-	ɸurutʃi
t 語根			
tt 語根（もつ）	muttimu	mutt-	muttʃi
有声子音語根			
b 語根（とぶ）	tubimu	tub-	tudi
m 語根（のむ）	numimu	num-	nudi
音便系を伸ばす m 語根（病む）	jamimu	jam-	jaːdi
g 語根（こぐ）	ɸugimu	ɸug-	ɸudʒi
n 語根（しぬ）	ʃinimu	ʃin-	ʃidʒi
母音語根			
1 音節母音語根（える）	jiːmu	ji-	jitti
長母音語根（まける）	meːmu	meː-	meːti
母音連続語根（おきる）	ʔuimu	ʔui-	ʔuiti
2 音節母音語根（うごく）	mugemu	muge-	mugeti
3 音節母音語幹（みだれる）	nidʒarimu	nidʒari-	nidʒariti
接近音語根			
ゼロ母音接近音語根（はいる）	ʔiːmu	ʔj-	ʔittʃi
（走る）	ɸaimu	ɸaj-	ɸattʃi
（いう）	gaimu	gaij-	gaitʃi
（生きる）	ʔikimu	ʔikj-	ʔikitʃi
不規則母音語根			
いらっしゃる（行く、来る）、おっしゃる	ʔmeːmu	ʔmoː-	ʔmoːtʃi
補充活用動詞			
（いく）	ʔikimu	ʔik-	ʔidʒi
r 語根			
接近音語根の受身形・可能形（見られる）	mjaːrimu	mjaːr-	mjatti
その他の語根の受身形・可能形（つれられる）	turarimu	turar-	turatti
不規則動詞			
（する）	ʃiːmu	(s-)	ʃiː
（召し上がる）	ʔoiʃimu	(ʔois-)	ʔoiʃi
（来る）	kiːmu	(k-)	kittʃi
存在動詞			
（ある）	ʔaːmu	ʔa-	ʔatti
（いる）	wuːmu	wu-	wutti
長母音語根（いらっしゃる）	ʔmeːmu	ʔmeː	ʔmeːti

中止形-ti や過去形-ta-などのような t ではじまる形態素が語根に音便をおこす。このセクションで-t-接辞の音便を動詞の種類ごとに考察する。かりまた(2010)の沖縄語安慶名方言にお

ける音便の通時的な説明が沖永良部語諸方言にもあてはまるが、沖永良部語正名方言では、1モーラ語根と muttimu「持つ」、ɸuʃʃimu「干す」のような二重子音語根のばあい、過去接辞の無声閉鎖音 t が tt になり、接辞の破擦音 tʃ が ttʃ になる。

通時的 r/w 語根のばあい、-t-接辞の-ti-が変化しないが、一拍語根と三拍語根のばあいは、tt になる。

k 語根のばあいは、tʃ になるが、1モーラ k 語根と kk 語根は、ttʃ になる。

s 語根のばあいも、tʃ になるが、ss 語根は、ttʃ になる。

t 語根のばあいも、tʃ になるが、tt 語根は、ttʃ になる。

b 語根と m 語根のばあいは、d になる。jamimu「病む」が t 接辞をとって ja:di「痛んで」になり、語根の母音が調音化する点で例外的である。jamimu「止む」が非過去形で同音語になるが、t 接辞をとるとき jadi「止んで」になり、語根の母音が調音化せず、その他の一拍 m 語根動詞にも音便形をともなう調音化がおこらない。

g 語根と n 語根のばあは、dʒ になる。

通時的 e 母音語幹のばあいは、t になるが、一拍語根のばあいは、tt になる。

通時的 i 母音語幹のばあいは、tʃ になる。

接近音語根のばあいは、tʃ になる。ゼロ母音接近音語根と1モーラ語根のばあいは、ttʃ になる。

不規則母音語幹は、連用形のような語幹+owari に由来する尊敬語動詞であるため、通時的には、r 語根であるとかんがえられるが、-t-接辞がつくばあい、その接辞が口蓋化した形 tʃ でつく。

r 語根は、可能形・受身形の接辞-(r)ar-である。-t-接辞がつくばあい、tt になり、これが r+t の結果であると思われる。つく語根に長母音が入っているばあい、超重音節を避けるために短音化する。

不規則動詞では、ʃi:mu「する」と ʔoiʃimu「召し上がる・差し上げる」-ti 中止形は、ʃi: と ʔoiʃi で似たような音便形をしめすが、ʃi:最小2モーラ制約で長母音化している。ki:mu の-ti 中止形は、kittʃi になり、接近音語根動詞と同じ音便形をしめす。

状態動詞は、-t-接辞の音便の面で通時的 r/w 語根と同じ音便形があり、一拍語根のばあいは、t が tt になり、長母音語根のばあいは、t としてあらわれる。

18. 沖永良部語正名方言の非過去尾略形・連用形

	語根	非過去形（尾略形+-mu）	シソウ形（連用形+-gi:sa）
1音節 r/w 語根（とる）	tu-	tui-mu	tui-gi:sa
長音+r/w 語根（しめる）	ku:-	kui-mu	kui-gi:sa
2音節 r/w 語根（ねむる）	nibu-	nibui-mu	nibui-gi:sa

3 音節 r/w 語根（あわてる）	ʔiʃuga-	ʔiʃugai-mu	ʔiʃugai-giːsa
1 音節 k 語根（きく）	kik-	kiki-mu	kiki-giːsa
kk 語根（おく）	ʔukk-	ʔukki-mu	ʔukki-giːsa
鼻音＋k 語根（うごく）	ʔuNk-	ʔuNki-mu	ʔuNki-giːsa
2 モーラ k 語根（たたく）	tatak-	tataki-mu	tataki-giːsa
3 モーラ k 語根（はたらく）	hatarak-	hataraki-mu	hataraki-giːsa
ss 語根（ほす）	ɸuss-	ɸuʃʃi-mu	ɸuʃʃi-giːsa
2 音節 s 語根（ころす）	ɸurus-	ɸuruʃi-mu	ɸuruʃi-giːsa
（もつ）	mutt-	mutti-mu	mutti-giːsa
b 語根（とぶ）	tub-	tubi-mu	tubi-giːsa
m 語根（のむ）	num-	numi-mu	numi-giːsa
音便系を伸ばす m 語根（病む）	jam-	jami-mu	jami-giːsa
g 語根（こぐ）	ɸug-	ɸugi-mu	ɸugi-giːsa
n 語根（しぬ）	ʃin-	ʃini-mu	ʃini-giːsa
1 音節母音語根（える）	ji-	jiː-mu	jiː-giːsa
長母音語根（まける）	meː-	meː-mu	meː-giːsa
母音連続語根（おきる）	ʔui-	ʔui-mu	ʔui-giːsa
2 音節母音語根（うごく）	muge-	muge-mu	muge-giːsa
3 音節母音語幹（みだれる）	nidʒari-	nidʒari-mu	nidʒari-giːsa
ゼロ母音接近音語根（はいる）	ʔj-	ʔjiː-mu	ʔjiː-giːsa
（走る）	ɸaj-	ɸaimu	ɸai-giːsa
（いう）	gaij-	gaimu	gai-giːsa
（生きる）	ʔikj-	ʔikjimu	ʔiki-giːsa
（いく）	ʔik-	ʔiki-mu	ʔiki-giːsa
接近音語根の受身形・可能形（見られる）	mjaːr-	mjaːri-mu	mjaːri-giːsa
その他の語根の受身形・可能形（とられる）	turar-	turari-mu	turari-giːsa
（する）	-	ʃiː-mu	ʃiː-giːsa
（召し上がる）	-	ʔoiʃi-mu	ʔoiʃi-giːsa
（来る）	-	kiː-mu	kiː-giːsa
（ある）	ʔa-	ʔaː-mu	ʔai-giːsa
（いる）	wu-	wuː-mu	wui-giːsa

沖永良部語正名方言では、運動動詞のばあいに連用形と非過去尾略形が同音形式であるため、共時的には、1 つの語幹として分析できる。沖永良部語に属するその他の諸方言の中では、非過去尾略形と連用形が同音になっていない方言もあるため、正名方言とその他の沖永良部語諸方言の比較を容易にするために、接辞ごとその接辞がつく語幹は、通時的に連用形か非過去尾略かを述べることにする。

連用形は、動詞のカテゴリーの多くのばあいに語根に i がついた形であるが、通時的 e 語根のばあいは、語根が連用形としても機能する。最小 2 モーラ制約により、通時的 e 語根の一拍語根動詞とゼロ母音接近音語根のばあいに連用形が調音化する。

連用形：

kikimu「聞く」語根：kik　+　i > kiki

ʔiːmu「入る」語根：ʔj　+　i > *ʔji > 調音化 > ʔjiː

jiːmu「得る」語根：ji- > 調音化 > jiː-

北琉球語群に属する言語の共通しているところの 1 つは、運動動詞非過去形が歴史的に連用形+オリに相当する形式であることである。次の音韻変化の過程は、4 までは、ほとんどの北琉球語群共通の変化であるが、ムード形態素-mu が-N になったところが多い。

1	2	3	4	5	6
連用形+オリ	狭母音化	ri/mu 入れ替え	i 接近音化	ju>i と超重音節を避ける調節	尾略形
聞きおり >	kikiuri >	kikiumu >	kik-ju-mu >	kiki-mu >	kiki-
会ゐおり >	ʔoːiuri >	ʔoːiumu >	ʔoː-ju-mu >	*ʔoːimu > ʔoi-mu >	ʔoi-

共時的には、4 からは、-ju-を 1 つの非過去をあらわす形態素としての分析が可能になるが、本論文では、-ju-に由来する-i-を何らかの意味をあらわす形態素よりは、語幹として認め、尾略形・連用形を接辞がつきうる語幹である立場をとる。

正名方言の連用形・非過去尾略形では、語根につく i が t 語根のばあいに muttimu 「持つ」と muttigiːsa「持ちそう」のように、口蓋化をおこさないことが特徴的である。共時的に i が t に口蓋化をおこさない。命令形も、mutt+i で口蓋化せず、mutti になる。

接近音語根動詞の gaimu「いう」の語根は、gaij-であるが、連用形・非過去尾略形の-i がつくと、gaij+i > *gaiː-で超重音節になるため、gai-になる。

不規則母音語幹の連用形・非過去尾略形が特徴的である。ʔmeːmu「いらっしゃる（行く・来る）・おっしゃる」の語根は、ʔmoːであるが、それに i がつき、次のように連用形・非過去尾略形ʔmeː-ができたと考えられる。

語根：ʔmoː+i > ʔmoːi > 超重音節を避ける調節 > ʔmoi > 母音融合 > ʔmeː

存在動詞ʔmeːmu「いらっしゃる（いる）」の連用形・非過去尾略形は、運動動詞ʔmeːmu の語源は、同じである。

注意すべき点としては、存在動詞ʔaːmu「ある」と wuːmu「いる」の非過去尾略形は、連用形+オリに相当する語形でなく、非過去形の-mu がついていない形で、連用形のʔai「あり」wui「おり」と同音ではない。

5 形容詞形態論

北琉球語群における形容詞の形態論に触れる研究としては、かりまた（2007）と（2014）、仲間（2007）などがある。

形容詞は、語彙的な意味として人やものの特性や状態をあらす。述語と連体修飾語として機能するが、副詞としても機能できる。テンス、肯定・否定は、形態論的なカテゴリーとしてもっているが、動詞とことなり、アスペクト、ヴォイス、命令、禁止、意志勧誘をあらわす形式をもたない。形容詞は、ムードとして直説法と質問法は、もっている。

沖永良部語正名方言の形容詞は、いわゆる第 1 形容詞と第 2 形容詞に分けることができ、形態論的にことなる。第 1 形容詞は、形容詞語幹+ -sa/-ʃa 連用形からなる。過去をあらわすのには、無生物存在動詞ʔa:mu「ある」の過去形ʔattamu が用いられる。第 2 形容詞のばあいは、テンスやみとめかたなどの活用は、はだかの形にコピュラをくみあわせる。

5.1 第 1 形容詞

形態論的な特徴をもとにして第 1 形容詞の分類が次の図のとおりである。

19. 第 1 形容詞の分類

	形容詞語幹	-sa/-ʃa 連用形	第 1 終止形
シク活用相当-ʃa 活用 midiraʃa「面白い」	midiraʃi-	midiraʃa	midiraʃamu

シク活用相当-sa 活用 jasa「容易い」	jaʃi-	jasa	jasamu
ク活用相当-sa 活用 ʔiNkusa「小さい」	ʔiNku-	ʔiNkusa	ʔiNkusamu
不規則活用 jukkwa「良い」	jukkwa-	×	jukkwamu

上の図でしめしているように、jukkwa「良い」は、-sa/-ʃa 連用形に相当する語幹がなく、形容詞語幹がその機能をする。jukkwa が薩摩方言のヨカ「良い」の借用語した形であると考えられる。

形容詞語根は、名詞と複合して、その名詞の特性をあらわすのに用いられる。

55) ʔama=nu ʔiNku-jaː=wa taː jaː=jo?
あそこの小さい家は誰の家か？

56) hjuː=wa jukkwa-ʔwaːtʃiki dero =jaː
今日は良い天気ですね。

形容詞語幹は、接辞がつきうる語幹としても機能する。形容詞の意味を強める接辞-taːma 形容詞語幹につく。次の用例でしめしているように、-taːma 形は、属格助詞 nu がつけば、名詞を修飾することができ、助詞がついていないばあいは、副詞として機能する。

57) gaNʃi jaʃitaːma=nu kutu
そんなに容易いこと。

58) jaɸarataːma muni gaij-aN-nja na-ra-N
柔らかく物を言わなければならない。

-sa/-ʃa 形は、形容詞語幹に-sa がついてできたと思われる。-ʃa になる形容詞は、日本語のシク活用に相当し、形容詞語幹-ʃi に-sa がついて融合したと考えられる。ʔattʃa 「暑い」のばあいも同じような融合がおこったと考えられる。

形容詞語幹：midiraʃi+sa > midiraʃa
形容詞語幹：ʔatʃi+sa > ʔattʃa

-sa/-ʃa 形が非過去終止形としても機能するし、副詞としても機能する。次の用例は、形容詞のʔmaːsa「おいしい」の-sa 連用形の結果副詞としての使用を立証する。

59) ʔura=ga tʃuku-ta-nu kwaːʃi=wa
あなたが作ったお菓子は、
ɸudu=jukkwa ʔmaːsa na-tta-N =jaː
去年よりおいしくなったな。

-sa/-ʃa 連用形の終止形としての使用は、かつて沖縄語でも見られた（Hagers：40 ）。次の用例は、ɸuʃʃa「欲しい」の-ʃa 連用形の終止形としての使用をしめす。

60)　wanu=mu　ɸuʃʃa =ja:
私も欲しいね。

-sa/-ʃa 連用形は、名詞と複合するばあいもある。次の用例では、ʔma:sa の-sa 連用形が名詞 muN「もの」と複合した形であらわれる。

61)　nu:gara　ʔma:sa-muN　kami-buʃa =ja:
何かおいしいものを食べたいね。

-sa/-ʃa 連用形がムードの接辞がつきうる語幹としても機能する。直説法の-mu/-N、強調の-ru、推量の-ra、表出の-ro:などが連用形につく。連体形接辞-nu も-sa/-ʃa 形につき、形容詞の連体形になる。語尾が-sa/-ʃa 形につくのは、沖永良部語でも沖縄語と同様、-sa/-ʃa 形に無生物存在動詞ʔa:mu「ある」がついて融合したためであると考えられるが、正名方言では、無生物存在動詞との融合が沖縄語ほど進行していない。第 1 形容詞の過去形のばあいは、-sa/-ʃa 形にʔa:mu の過去形ʔattamu が融合せずにつくことが多い。

62)　tʃu:=nu　wugibatte　ʔi-ttʃi　wugi　to:-tʃi
人のサトウキビ畑に入って、サトウキビを倒して
kam-ita-ʃiga　ʔma:sa ʔa-tta-N =doja:
食べていたけど、おいしかったよ。

丁寧形では、-sa/-ʃa 形にʔa:mu の丁寧形ʔajabuN が融合せずにつく。

63)　kinju=wa　hi:sa　ʔa-jabu-ta-N =ja:
昨日は寒かったですね。

第 1 形容詞の否定形は、非無生物存在動詞ʔa:mu の否定形 na:mu が-sa/-ʃa 形に後接した形である。

64)　hju:=wa　ʔaNmai　ʔiʃugaʃa na-N
今日はあまり忙しくない。

日本語のク活用に相当する形容詞のなかでは、形容詞語幹+-ku による連用形をもつ形容詞があるが、少ない。シク活用相当形容詞は、シク形をたもっている形容詞がない。-sa/-ʃa 形が-ku 形の役割を受け継いだと考えられる。-ku 形をたもっている形容詞のばあいは、否定形として-ku 形に無生物存在動詞ʔa:mu の否定形 na:mu が後接した形も-sa/-ʃa 形に na:mu が後接した形もちいられる。例：「強くない」：tʃu:ku na:mu、または、tʃu:sa na:mu。

ʔma:saku na:mu「おいしくない」のように、-sa/-ʃa 形に-ku がついた形に na:mu がついた形も聞かれるが、これは、日本語の形容詞の否定形クナイの影響でできた語形であると考えられる。

-sa/-ʃa 形に ʃi:mu「する」の継続形 ʃu:mu がつくと、一時的な状態、または、そのように思う、感じる、ふるまう、などの意味をあらわす。

65)　ʔikjaʃi　gaNʃi　ɸu:raʃa　ʃu-N =jo?
どうしてそんなにうれしいのか？

66) ʔaja=wa nama ʔutturuʃa ʔiʃugaʃa ʃu-N-tuni
お姉さんは今すごく忙しくしているから
taNm-a-ʃi=du jukkwa-ru
頼まないほうが良い。

5.2 第 2 形容詞

第 2 形容詞は、数が少ない。dʒo:dʒi「上手」、 jakke「厄介」、 de:dʒi「大変」のような漢語系ほとんどである。

第 2 形容詞の活用は、主にコピュラによるものであるが、名詞を修飾するばあい、接辞 na による連体形が用いられる。

67) jakke-na muN =dja
厄介な物だよ！

5.3 その他の形容詞と似ている語

形容詞ではないが、形容詞と似たような意味を持っている語がいくつかある。例えば、

ʔu:do は、「大きな」という意味で名詞と複合した形で用いられる。

68) ʔu:do ʔju: tu-tta-N =do:
大きな魚をとったよ。

maNdumu「多い」は、形は、動詞の継続形と似ており、maNdi「たくさん」と wu:mu「いる」の融合した形であると考えられるが、無生物をあらわすばあいにも用いられる。

69) ʔiʃi=nu gani maNduro:!
石がこんなに多いんだな！

6 コピュラ形態論

コピュラ jaN-は、名詞述語文と第 2 形容詞が述語になる文に必要な、テンスをあらわす接辞、接続接辞などを担う文法的な役割を果たしている。jaN-は、非過去では、第 1 終止形をもっていないし、単独では、用いられないし、非過去文においては、話し手の評価をあらわす終助詞 sa や、条件・接続接辞があらわれるばあいのみ使われる。

70) ʔuri=wa wa: ʔutu: ja-N=sa
彼は私の弟さ。

1. コピュラの活用

	非過去	過去
非過去 第 1 終止形	×	ja-tta-mu
非過去 第 2 終止形	ja-N-	ja-tta-N
連体形	ja-nu/ja:-nu	ja-tta-mu
強調形	ja-ru	ja-tta-ru
推量形	ja-ra	ja-tta-ra
シソウ形	jai-gi:sa	jai-gi:sa ʔa-tta-mu
中止形	ja-tti	-
否定 第 1 終止形	ʔana-mu	ʔana-dana ʔa-tta-mu
否定	ʔana-N	ʔana-dana ʔa-tta-N

第 2 終止形		
条件形	ja-riwa	-
丁寧形	ja-bu-N-/dero	jabu-ta-N

上の図でしめしているように、コピュラは、連体形をもつが、この連体形は、うらめ原因をあらわす形式名詞 muN を修飾するばあいのみ用いられる。

71) hjuː=wa <jasumi> ja-nu muN <ʃukudai>=nu ʔa-N
今日は休みなのに、宿題がある。

ja-nu、ja-ru、ja-ra という形式は、非過去尾略形が 1 モーラだけであるため、コピュラには、尾略形に最小 2 モーラ制約がない。

7 動詞・形容詞・コピュラにつく接辞

このセクションでは、動詞・形容詞・コピュラにつく、形態論的な接辞を考察する。

2. 正名方言の動詞の構造

語根	-(r)as- CAUS	-(r)ar- PASS	-(r)ar- POT	-tu- CONT	-jabu- POL	-ta- PST	尾折接辞
						-(r)a- NEG	
					-riwa COND		

7.1 尾略形につくムード語尾

7.1.1 -mu 終止形と -N/-Ø 終止形

沖永良部語正名方言の 1 つの特徴は、直説法をあらわす終止形の語尾が 2 つあることである。-mu 終止形を第 1 終止形と、-N/-Ø 終止形を第 2 終止形と呼ぶことにする。すべての動詞は、両方をとることができる。第 2 終止形は、形態素がつく語幹にもなるが、どちらを用いるかは、つく助詞、または接辞によって決まる。

第 1 終止形-mu につく： 終助詞 djoː、引用をあらわす助詞 di(tʃi)

第 2 終止形-N/-Ø につく：終助詞 doː、dojaː、ga、sa、疑問助詞 nja、jo、sa、 kajaː、gara, 条件形接辞-tara, -kja, -gaʃara, -tu(ni)

jaːや dja などのように、両方につく助詞もある。

助詞がつかないばあいは、第 1 終止形と第 2 終止形に意味的な違いがないが、話者の内省によると、前者には、やや丁寧なニュアンスがある。

終止形の語尾-mu と-N/-Ø とがつく語幹を尾略形とよぶことにする。この尾略形には、その他にも強調形の語尾-ru や連体形の語尾-nu や逆説の接続接辞-ʃiga がつく。尾略形には、最小 2 モーラ制約があるが、-N/-Ø がつくばあい、この制約が超重音節（super heavy syllable）を許さない音素配列論的制約に違反する。超重音節を避けるために、調音が短音化する。

	第 1 終止形	第 2 終止形
あける	ʔeː-mu	ʔe-N
見る	miː-mu	mi-N
見ない	mjaː-mu	mja-N
した	ʃaː-mu	ʃa-N

尾略形が調音でない 2 モーラ以上であるばあい、モーラ数の調節がおこらない。

	第 1 終止形	第 2 終止形
入れる	ʔiri-mu	ʔiri-N（入れる）
見た	mittʃa-mu	mittʃa-N（見た）
しない	ʃira-mu	ʃira-N（しない）

第 2 終止形として-N をとるか-Ø をとるかも超重音節を許さない音素配列論的制約による。母音連続 ai、ui、oi でおわる非過去の尾略形には、超重音節にならないように、-N でなく-Ø がつく。

1. 正名方言の通時的 r/w 語根動詞の終止形

	第 1 終止形	第 2 終止形
会う	ʔoi-mu	ʔoi-Ø
閉じる	kui-mu	kui-Ø
耕す	kjai-mu	kjai-Ø
笑う	waroi-mu	waroi-Ø
眠る	nibui-mu	nibui-Ø

正名・住吉・田皆という 3 つの隣り合っている集落の方言では、上のような-Ø 語形の非過去の尾略形が母音連続 ai、ui、oi でおわる動詞に使用されている。上述したように、通時的には、北琉球語群の中に運動動詞の非過去形が連用形+有生物存在動詞オリからできたと考えられる。共時的には、正名・住吉・田皆の方言で運動動詞の非過去形が語根と非過去をあらわす形態素-i-と直説法をあらわす語尾からできていることがうかがえる。その 3 つの集落

以外には、この形態素が-ju-であり[5]、正名・住吉・田皆の方言の-i-のほうが激しい変化を遂げたと思われる。正名から約 2.5 キロ離れている大津勘の方言においては、非過去をあらわす形態素が-ju-として保たれ、超重音節を避ける調節がおこらないため、第 2 終止形は、-N のみであり、-Ø がない。

2. 大津勘方言の通時的 r/w 語根動詞の終止形

	第 1 終止形	第 2 終止形
会う	ʔoːju-mu	ʔoːju-N
閉じる	kuːju-mu	kuːju-N
耕す	kjaːju-mu	kjaːju-N
眠る	nibuju-mu	nibuju-N

通時的に-N と-Ø は、ことなる形式に由来するという仮説がある。沖永良部語に地理的に隣接する北琉球語群の言語変種には、その違いの起源になる語形がのこっている可能性がある。奄美群島で話されている北琉球語群の変種には、動詞・第 1 形容詞が 2 つの終止形をもっている。①連用形＋有生物存在動詞オリに由来するが、語尾が古典日本語にもあった、話し手の推量・意志をあらわす-mu に由来する。②連用形＋有生物存在動詞オリに由来し、語尾の-ri を保つが、-ri が-i に変化したところ（与論島麦屋、奄美大島湯湾）もあれば、そのまま-ri であるところ（徳之島井之川、奄美大島名瀬）もある[6]。①と②の違いは、地域差があるようであるが、ムードにある。②は、まつもと（1996）が「メノマエ性」という用語で記述しているが、工藤他（2007：53）は、それを直接的エヴィデンシャリティーとして記述している。現在沖永良部語正名方言には、-mu、-N、-Ø にムード的な違いがないが、沖永良部島のすぐ北にある徳之島とすぐ南にある与論島に語尾によるムード的な違いがあるため、かつて沖永良部島にもそのような違いがあったと充分考えられ、現在の形式の多様性の起源がそれにあたるであろう。

3. 与論語と徳之島語における終止形の諸形式：

		-mu 系	-ri 系	連用形
与論麦屋 ：	笑う	wareN	warei	
	書く	hakjuN	hakjui	
徳之島井之川：	笑う	warojuN	warojuri	waroi
	書く	kakjuN	kakjuri	kaki

上の図に沖永良部に隣接している与論島と徳之島の終止形の形式がしめされている。与論島と徳之島は、両方-mu 由来の終止形と-ri 由来の終止形があるが、徳之島語においては、連用形が終止形としても機能する。Hagers（1997：38）の報告によると、かつて沖縄語においても連用形、あるいは、連用形と同音の形式（以下は「連用形」とよぶことにする）が終止形として用いられたとのことである。

[5] 正名・住吉・田皆地域でおこった/ju/から/i/への音韻変化は、他の単語でも見られる。例えば、大津勘の kjurasa「きれい」は、正名・住吉・田皆地域で kirasa になる。

[6] 与論島麦屋：工藤他（2007：55）、奄美大島湯湾：新永（2014：73-74）、徳之島井之川：内間（1985：331）、奄美大島名瀬：寺師（1985：140）

現在沖永良部語諸方言には、-ri 系の形式がなくても、かつてあったという痕跡がある。その痕跡が肯否疑問助詞-nja と-na の使い分けにあると考えられる。沖永良部語正名方言の-nja と-na の使い分けとほぼ同じ使い分けは、奄美大島であまねく見られる。次の図がしめしているように、-nja がつく語は、-ri 系の終止形をとらえることができる語のみである。

4. 北琉球語群のさまざまな言語変種における疑問助詞-nja と-na の使い分け

	名詞 （弟か）	動詞非過去形 （降るか）	動詞過去形 （降ったか）	動詞否定形 （降らないか）
沖永良部島正名	ʔutuː=na?	ɸuiN=nja	ɸutti=na	ɸuradi=na*
奄美大島名瀬	ʔututu=na?	ɸurjuN=nja	ɸutɨ=na ɸutaN=nja	ɸuradʒi=na ɸuraN=na
奄美大島湯湾	ʔututuː=na?	ɸujuN=nja	ɸutɨ=na	?

*70 代後半以下の話者は、ɸuraN=nja のように否定形の第 2 終止形に nja も用いるが、70 後半以上の話者は、この形式が間違っている形式とすることから、割と最近できた形式であると考えてよかろう。

奄美語名瀬方言と湯湾方言には、-mu 系と-ri 系が両方ある。Niinaga（2014：459）は、-nja を-na の異形態素として分析し、次のように-na が-ri 系の語尾-i につけば、共時的におこる音韻同化の結果であるとのことである。

-i + na > 口蓋化　/i-nja/ > 鼻音化　>　/-n=nja/

通時的におこった音韻変化であるとすれば、沖永良部語における-nja と-na の使い分けの説明にもなるし、沖永良部語にも-ri 系があったという証拠にもなる。なお、沖永良部語国頭方言に次の語形が確認できている（徳永 2014：10）。用例の音声表記は、本論文で使用するものにあわせた。

1)　<wadomari>=Ntabe　ʔatʃ-u-i=naː?
　　和泊まで　歩くのか？

このʔatʃ-u-i=naːという形式は、-ri 系に由来する-i 終止形に na がつき、-N=nja まで同化していない形のようである。国頭方言にこの-i 終止形の痕跡が確認できていることからすると、沖永良部語においても-i 終止形の使用がつい最近まで普通であったと言えよう。

見た目では、-N でおわる形式が正名の-N による終止形に相当しているようであるが、なぜ正名方言の第 2 終止形に-Øによる形式も存在するかは、これで説明できない。-Øによる終止形の語源が-ri 系にあるか、それとも連用形にあるかについて、4 つの仮説があり、このセクションで考察する。

仮説 A では、正名方言の-N 語形が与論島と徳之島の-N 語形と同源である。つまり、正名方言の-mu 終止形と-N/-Ø 終止形は、両方語源が-mu 系にあるということになる。分岐した後、1 つが衰退せずに両方の形式がたもたれたのは、つく助詞と接辞がことなるためであ

る。-Ø 語形ができたのは、正名方言に/ju/が/i/に変化した過程に超重音節が生じないように単に/N/が脱落した。

5. 仮説 A

笑う	終止形 1：warojumu	→	waroimu
	終止形 2：	↘warojuN →	*waroiN → waroi-Ø
書く	終止形 1：hakkjumu	→	hakkimu
	終止形 2：	↘hakkjuN →	hakkiN

仮説 A では、-N と-Ø が同源であるため、形態論的な分布も同じであることによって説明できている。しかし、与論島と徳之島に子音 i でおわる形式があるのに、沖永良部では、それが跡形もなくなるということになる。

仮説 B では、正名方言の-mu による終止形は、与論島と徳之島の-N による終止形と同源であり、正名方言の-N/-Ø による終止形は、与論島と徳之島の-ri 系の終止形と同源である。kui-Ø「閉じる」のような -Ø による語形は、与論島の ku:jui のような-ri 系の終止形と同様に-i でおわることで似ている。仮説 B による音韻変化の過程は、次のとおりである。

6. 仮説 B

笑う	終止形 1：warojumu	→	waroimu
	終止形 2：warojuri → warojui	→	waroi
書く	終止形 1：hakkjumu	→	hakkimu
	終止形 2：hakkjuri → hakkjur → hakkjuN → hakkiN		

この仮説によれば、-N 語形が音韻変化の過程の中で-r でおわる語形を経てから-N になったということになる。仮説 B では、-N 語形と-Ø 語形の形態論的な分布が同じであることは、説明できているが、問題が 2 つある。1 つ目は、-N 語形と-Ø 語形が分岐したのは、きわめて早い段階であったとすれば、なぜ正名・住吉・田皆の狭い地域以外では、waroi-Ø のような語形も warojui のような語形も存在せず、第 2 終止形は、-N 語形しか存在しないだろうか。2 つ目は、沖永良部語の/N/が北琉球語群に属する他地域の-ri と相当する例がないため、/ri/→/r/→/N/という音韻変化が疑わしい。Martin（1970：129）と内間（1984：308-309）によると、奄美大島南部の諸鈍と古仁屋に-r でおわる終止形が存在するとのことであるが、その形式が-ri 系より強調形の-ru に相当するようである。

仮説 C では、-Ø 形式の語源が-ri 系より連用形にある。-N と-Ø が語源がことなるが、形態論的な分布が 1 つになった。正名方言の-N は、与論島や徳之島などの-N 同源であり、-mu 系が由来であるが、-N と-mu の形態論的な分布がことなるため、併存しつづけている。上に述べたように、徳之島では、連用形が終止形としても機能する。徳之島の資料と Hagers（1997：38）の報告を考慮に入れると、連用形が終止形としても用いられるのは、かつて北琉球語群で広く見られたようである。そのため、沖永良部語もそうであったと考えられる。正名で/ju/が/i/に変化した時代、連用形がまだ終止形として用いられ、音韻制約のために成立できなかった*waroiN などのような形式の‘形態論的な穴を満たした’。ai、ui、oi でおわる形式以外の連用形の終止形としての使用が衰退したということになる。

7. 仮説 C

笑う	終止形 1：warojumu→			waroimu	
	終止形 2：	↘warojuN	→	*waroiN	waroi
	終止形 3：waroi		→	waroi	↱
書く	終止形 1：hakkjumu→			hakkimu	
	終止形 2：	↘hakkjuN	→	hakkiN	
	終止形 3：hakki		→	×	

現在正名方言の-Ø による終止形が連用形と同音であることからすると、仮説 C は、考えられる説である。しかし、連用形が終止形として機能する現象がかつてあまねく見られたとしても、現在は、徳之島にしか見られないことと、-ri 系の形式の使用が現在もあまねく見られることを考慮に入れると、-Ø による終止形の語源が-ri 系にあるという説のほうが優位でなかろうか。

仮説 D は、仮説 C と似ているが、仮説 D では、-Ø の語源が-ri 系にある。-Ø は、-ri 系に由来する。正名・住吉・田皆で/ju/から/i/への音韻変化がおこったころは、-mu 系の-mu と-N が-ri 系である warojui と hakkjui のような形式と相補分布にあったということになる。/ju/が/i/に変化したとき、超重音節を許さない制約が*waroiN という形式の成立を妨害し、warojui から変化した waroi が warojuN の形態論的な分布を受け継いだ。-ri 系由来の形式が-N 形式と 1 つになって、第 2 終止形として 1 つの分布になったため、ai、ui、oi でおわる形式以外の-ri 系由来の形式が衰退した。

1. 仮説 D

笑う	終止形 1：warojumu	➔		waroimu	
	終止形 2：	↘warojuN	➔	*waroiN	waroi
	-ri 系　：warojuri	→ warojui	→	waroi[7]	↱
書く	終止形 1：hakkjumu	➔		hakkimu	
	終止形 2：	↘hakkjuN	➔	hakkiN	
	-ri 系　：hakkjuri	→ hakkjui	→	×	

仮説 D は、音韻変化と語源の面でシンプルである。沖永良部の周辺に-ri 系が存在するため、沖永良部で正名・住吉・田皆という限られた地域で音韻制約によって成立できなかった形式*waroiN の形態論的な欠陥を補うために-ri 系由来形式が断片的にのこっていると考えられる。しかも、徳永（2014）が報告している ʔatʃ-u-i=na:「歩くのか」が現在も国頭で使用されているため、正名で/ju/から/i/への変化がおこった当時、warojui のような形式が衰退しつつあっても、まだ使用されていたとも考えられる。

[7] 超重音節をゆるさない制約があるため、warojui から waroi への変化過程で*waroii という超重音節が入っている語形を経ず、waroi へと変化したと考えられる。

7.1.2 強調形-ru

-ru は、動詞・第 1 形容詞・コピュラの尾略形につき、強調形とよぶことにする。疑いの疑問文として疑問詞と共起する。疑問文以外の使用では、フォーカス助詞 du が用いられるばあいしかあらわれない。

72) nu: kami=ru?!
いったい何をたべようか？

73) ʔa:ni=du tu:sa-ru
赤嶺のほうが遠い。

74) wana <gakuse:>=du ja-ru
私は学生にすぎない。

7.1.3 推量形-ra

尾略形+-ra は、本来は、推量をあらわす形式であるが、疑いのフォーカス助詞 ga と共起するばあいは、疑いをあらわし、ga がないばあいには、よく終助詞 ja:がつき、確認要求の疑問の形式として用いられる。確認要求の疑問形としての使用が高年層のみで見られ、衰退しつつあると言ってよかろう。

その他にフォーカス助詞 ga と共起するばあい、埋め込み質問としても使用される。

75) ʔuda=gatʃi=ga ʔiki-ra waka-ra-mu
どこに行くか分からない。

76) jukkwa-ra=ja:?
いいだろう？

77) gaN=ga ja-ra=ja:?
そうだろうか？

それに因果関係の不確定を提示する原因・理由節として使用されるため、infinite の使用もある。

78) mi:=nu=ga warusa-ra nu:=mu mja:r-a-N
目が悪いせいか、何も見えない。

7.2 語根につくムード語尾

7.2.3 表出形-(r)o:

語根+-(r)o:は、表出をあらわす形式である。母音語根のばあいは、-ro:としてあらわれ、子音語根のばあいは、-o:としてあらわれる。断定形と違って、客観叙述ではなく、話し手の評価感情の表出であることをあらわす。

79) gani jukkwa-tta-ro:!
そんなによかったんだな！

客観叙述ではなく、話し手の評価感情の表出として話し手の予想外であることをあらわすに用いられる。次の用例は、話し手が友達の英語実力に驚いていう。

80) gani nuNsa dʒoːdʒi=ni hanas-ar-oː
こんなにすごく上手に話せるんだな！

なお、-(r)oː表出形は、過去形にもあらわれる。過去形であっても発話時における話し手の感情である。次の用例は、話し手が久しぶりに年配の知り合いに会ったときにいう決まり文句である。

81) gani jukkwa ɸugam-jabu-ta-roː
こんなによくお目にかかったんですね！

上の 2 つの用例でしめしたように、指示副詞 gani「そんなに・こんなに」と共起することが多い。

その他に修辞疑問をあらわす形式としても使用される。

82) Nga kitanasa-roː!
なんできたないのか？

-(r)oːは、コピュラにつかない。

7.2.4 意志勧誘形-(r)a(ː)

動詞語根+-(r)a(ː)は、話し手の意志か、聞き手への誘いかけをあらわす。子音語根のばあい、-a(ː)としてあらわれ、母音語根のばあいは、-ra(ː)としてあらわれる。a が伸びるかどうかは、語根が何拍かによる。

83) madʒini num-aː
一緒に飲もう。

意志勧誘の-(r)a(ː)には、連体形-nu がつき、-nu muN という主語の意志をあらわす構造である。

84) <terebi>=jattimu mj-aː-nu muN
テレビでも見よう。

長母音でおわる意志勧誘形に疑問助詞 i がつくばあい、超重音節を避けるために短母音化する。

85) nuNgisaN=nja? wa=ga sadati ʔi-ttʃì mj-a=i?
怖いか？私が先に入ってみようか？

自然の推移と主体がその運動の実現をめざして行動をおこしていることをあらわすために意志勧誘形が引用助詞-di(tʃì)によって埋め込まれるばあいは、意志勧誘形が-(r)aN という、-N がついた異形態素であらわれるため、通時的に意志勧誘形が-N でおわったと考えられる。与論語で意志勧誘形が現在も-N でおわる（菊、高橋 2005：738）。

.命令形-(r)a(ː)nu

動詞語根+-(r)a(:)nu は、命令をあらわすのに用いられている。話者の内省によると、-(r)a(:)nu による命令形は、後述する-(r)i(:)による命令形と比べて柔らかい、相手に強制しないような響きがある。

86) uda:da ʔj-a:nu
どうぞ入れ。

7.2.5 命令形-(r)i(:)

命令形は、動詞語根+-(r)i(:)である。通時的 r/w 語根には、-ri がつき、子音語根には、-i がつくが、受身接辞の r 語根につくばあいは、-ri-という語幹につく。接近音語幹には、最小 2 モーラ制約で母音が調音化し、-i:がつく。

買う hoimu > ho:ri 「買え」
飛ぶ tubimu > tubi 「飛べ」
見る mi:mu > mi: 「見ろ」
連れられる so:rarimu > so:rariri「連れてもらえ（疑似日本語訳：連れられろ）」

7.3 旧連体形につくムード語尾

7.3.1 旧連体形事態：非実現

動詞旧連体形が単独で用いられるばあいは、非実現をあらわす。ʔabune と共起することが多い。

87) ʔabune ʔinu=nu kusu kumu =ja:
あわやイヌの糞を踏んでいたね。

88) ʔura=ga gai-tʃi jukkwa-ta-mu =djo:. ʔabune waʃiriru
あなたが言ってよかったな！あわや忘れていた。

7.3.2 禁止-na

禁止の接辞-na は、動詞旧連体形につく。接近音語根動詞につくばあいは、旧連体形に-iru-というモーフォームがついた語幹に-na がつく。

ʔikimu「行く」 > ʔikuna「行くな」
ji:mu「座る」 > jiruna/jiNna「座るな」

7.4 音便をおこすムード語尾

-tu は、動詞語根との音尾をおこす命令形の接辞である。-(r)i(:)とことなり、「～て来い」という意味合いで用いられている。-ti 中止形に ɸu:「来い」がついた形に由来するだろう。

89) he:sa saki ho:-tu!
早く酒を買って来い！

7.5 条件づけをあらわす接辞

沖永良部語正名方言において、広い意味での因果関係が表現されるつきそい・あわせ文のつきそい文の述語になる形式は、さまざまである。つきそい文の出来事は、いいおわり文に

さしだされる出来事の実現の根拠としてはたらくのだが、「根拠」というのは、原因、条件、理由、動機、目的、予定、前提、仮定、契機とさまざまである。このセクションでは、いいおわり文にさしだされる出来事の実現のための原因や条件などをつきそい文にさしだすとき、つきそい文の述語としてあらわれる形式の形態論的特徴をあきらかにする。

1.原因、理由、条件、契機などをあらわす形式

numiNtu/numiNtuni （のむから、のむので）
nudantu/nudantuni（のんだから、のんだので）
numiwa/numja （のめば）
nuduriwa/nudurja（のんでいれば）
numuto（のむと）
nuduruto （のんでいると）
numiNtara（のむなら、のんだら）
nudaNtara（のんだなら、のんだら）
numaNtara （のまないなら、のまなかったら）
nuduNtara（のんでいるなら、のんでいたら）
nudutaNtara（のんでいたなら、のんでいたら）
numiNkja （のむなら、のんだら）
nudaNkja（のんだなら、のんだら）
nuduNkja（のんでいるなら、のんでいたら）
nudutaNkja（のんでいたなら、のんでいたら）
numiNtukja （のむなら、のんだら）
nudaNtukja（のんだなら、のんだら）
nuduNtukja（のんでいるなら、のんでいたら）
nudutaNtukja（のんでいたなら、のんでいたら）
numaNnja （のまなければ）
nudatu （のんだら）

2.ゆずり状況やうらめ原因などをあらわす形式

nudimu （のんでも）
numabamu （のむにしろ）
numinu muN（のむのに）
nudaNte（のんでも、のんだとしても）

図 1.沖永良部語正名方言の条件形の一覧

	肯定	否定
条件	numiwa (numja) numuto numiNtara numiNtukja numiNgaʃara numiNkja	numaNnja numaNto numaNtara numaNtukja numaNgaʃara numaNkja
原因	numiNtu (ni)	numaNtu (ni)
契機	nudatu	X
うらめ	nudimu numabamu numinu muN nudaNte	numadanamu X numanu muN X

numiNtu/numiNtuni（のむから、のむので）は、原因と理由をあらわす。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべてこの-tu(ni)原因形をとる。89）では、-tu(ni)が動詞の原形につき、90）では、-tu(ni)が動詞の否定形につき、91）では、-tu(ni)が動詞の過去形につき、92）では、-tu (ni)が動詞の継続形につく。

89) <oraNda>nu jiNga=nu <tʃo:sa> ʃi:ga kiNtuni hatte=gatʃi=wa ʔikaramu
オランダの男が調査しに来るから、畑には行けない。

90) <ʔoranda>=nu jiNga=wa ɸuNtu hatte=gatʃi ʔikariNkoi nattaN
オランダの男は来ないから、畑に行けるようになった。

91) saki nudaNtu kuruma=wa nuraN =do:
酒を飲んだから、車は乗らないよ。

92) ma:=wa kuruma=nu tu:tuNtu ʔo:ʃaN =do:
ここは、車が通っているから、あぶないよ。

numiwa（のめば）は、条件と契機をあらわすことができる。検定教科書文法のいわゆる已然形に接尾辞の-ba がつき、日本語のノメバに相当する。音声的なバリアントとして-iwa 条件形の音声的なバリアントとして-ja 条件形がある。次のとおりである。

買えば	ho:riwa	→	ho:rja
飲めば	numiwa	→	numja

次の用例では、-iwa 条件形が条件をあらわす。5）は、動詞の用例であり、6）では、-iwa 条件形が契機性をあらわす。

93) kusui numiwa noi =do=ja:
薬を飲めば、治るよね。

94) natʃi nariwa hi:bi ʔattʃamu =djo
夏になったら、毎日暑いよ。

アスペクトをあらわす形式も-iwa 条件形をとるが、過去形は、-iwa 条件形をとらない。7）では、継続形が-iwa 条件形をとる用例である。

95) <ni:saN>=ga nama ʃugutu ʃu:riwa <deNwa> kikaraN =do:
お兄さんが今仕事をしていれば、電話聞こえないよ。

つきそい文の述語が否定形をとっているとき、-iwa 条件形のバリアントとして-nja 条件形がある。次のとおりである。

しない　ʃiramu(第一叙述形)・ʃiraN(第二叙述形)＋-nja　→　ʃiraNnja
見ない　mja:mu (第一叙述形)・mjaN(第二叙述形)＋-nja　→　mjaNnja

次は、-nja 条件形の用例である。

96) ʔmja:=nu wuraNnja ɸa:tu=nu tudi ki:mu

猫がいなければ、鳥が飛んでくる。

-nja 条件形に naramu（ならない・だめ）をつけると、日本語のシナケレバナラナイに相当する義務をあらわす表現になる。

97) naːtʃa=mu hatarakaNnja naraN =gi=joː
明日も働かなければならないのだよ。

numuto（のむと）も、条件と契機をあらわすことができる。-to という接尾辞がいわゆる旧連体形につく。旧連体形というのは、日本語の連体形に相当するものである。動詞 numimu（のむ）の旧連体形は、numu-であり、現代沖永良部語正名方言においては、日本語のノムとことなり独自の形式としては存在しないが、接尾辞が修飾する語幹としては機能する。アスペクトをあらわす形式も-to 条件形をとるが、過去形は、-to 条件形をとらない。98）は、動詞の原形が-to 条件形をとる用例であり、99）は、動詞の否定形が-to 条件形をとる用例である。

98) saki numatʃi mjuːto ʔunu tʃuː=nu kimugukuru=nu wakai
酒を飲ませてみると、その人の心が分かる。

99) joːʃanu muN jantu ʔuri kamaNto=wa
ひもじいもんだから、それを食べないと、
<koNdo> tʃuː=nu wugibatte idʒi wugi kamiN =gi=joː
今度人の砂糖きび畑に行って砂糖きびを食べるわけよ。

numiNtara、numiNtukja、numiNkja（のむなら、のんだら）は、みな条件と契機をあらわすことができ、-tara、-tukja、-kja は、動詞、形容詞、コピュラの第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべてこの 3 つの条件形をとる。図 2 のとおりである。

-tara と-kja は、歴史的にどういう風にできたかは、不明であるが、-tukja は、連体形＋tuki=wa（時は）からできたとも考えられる。

ʔidʒanu tuki=wa（行った時は）→　ʔidʒantukja（行ったら）

連体形＋tuki=wa は、契機性をあらわすことから、-tukja も元は、契機性をあわし、-tara、-kja や、-iwa 条件形などのような、条件と契機を両方あわす形式との類推で-tukja の意味が条件まで広がったと考えられる。

-tara、-tukja、-kja には、意味的な違いがないようである。話者の内省によると、今まで集めている用例では、3 つとも置き換えても意味が変わらないとのことである。しかし、70 代後半の話者は、-kja を正名のことばでないと考えているようであるが、60 代と 70 代の話者は、-kja も使うことがあるため、ここであつかうことにする。

次は、動詞につく-tara、-tukja、-kja の用例である。

100)　ʔura=ga ʔikiNtara wanu=mu ʔikiN
お前が行ったらおれも行く。

101)　jaʃiki hoitukja ja:=nu hata ho:ri
宅地を買うなら、家の側を買え。

102)　haroikja waga <so:dʒi> ʃiN =do:
払ったら、私が掃除するよ。

次は、-tara、-tukja が否定形につく用例である。

103)　mumigutu naNtara gutʃi ɸukkuna
問題ないなら、文句をいうな。

104)　ʔari=ga ʃiraNtukja, ʔura=ga ʃiri =jo:
あいつがやらなければ、お前がやれよ。

-tara、-tukja、-kja は、動詞の過去形につけば、契機性をあらわす。次の用例のとおりである。

105)　ʔidʒaNkja taru=mu wuradana ʔattaN
行ったら、誰もいなかった。

106)　ʔagu=nu <ʔo:imi>di gaitʃaNtara <hai> gaitʃaN =gi=jo:
友達が「オーイミ」と言ったら、「はい」言ったわけよ

107)　gaN ʃaNtukja <sugu> ʔiʃi nagiratti hana=nu ɸukuriti, na:…
そうやったら、すぐ石をなぐられて、鼻が膨れて、もう…

numiNgaʃara（のむなら）は、条件をあらわし、-gaʃara 動詞の第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべて-gaʃara 条件形をとる。図 2 のとおりである。

-gaʃara は、連用形＋ga ʃa:ra という疑問形と似ているため、由来がそれであるかもしれないが、疑問をあらわす形式から条件をあらわすようになったというのは、考えがたい。

-gaʃara 条件形の使用は、話者の多くに「廃れている言い方」とされ、用例が集めにくい。次は、少ない用例の中の 1 つである。

108)　ʃigutu taNmiNgaʃara ʔagu=gatʃi taNmi
仕事を頼むなら、友達に頼め。

nudatu は、契機をあらわすことができる。過去をあらわす-ta-という形態素に直接-tu がつく。図 2 のとおりである。

この形式は、語源的に理由・原因をあらわす-tu と関係があると思われる。沖縄北部今帰仁方言では、-tu が動詞の叙述法をあらわす-N という形につくばあいは、理由・原因をあらわし、過去をあらわす形態素-ta-につくばあいは、理由・原因もあらわすし、契機性もあらわすため、沖永良部語正名方言でも、元は 1 つの形式であったということは、充分考えられる。

次は、-tu 契機形の使用の用例である。

109) waga nibututatu ʔari=ni ʔuisatti =jo:
私が眠っていたら、彼におこされて…

図 2.動詞の形態論的なタイプと原因、理由、条件、契機などをあらわす形式

	みる	おきる	える	まける	かう	おく	とぶ
叙実法 1	mi:mu	ʔuimu	ji:mu	me:mu	hoimu	ʔukkimu	tubimu
叙実法 2	miN	ʔui	jiN	meN	hoi	ʔukkiN	tubiN
-tu(ni)原因形	miNtu(ni)	ʔuitu(ni)	jiNtu(ni)	meNtu(ni)	hoitu(ni)	ʔukkiNtu(ni)	tubiNtu(ni)
-iwa 条件形	miwa (mi:wa)	ʔuiriwa (ʔuirja)	jiriwa (jirja)	me:riwa (me:rja)	ho:riwa (ho:rja)	ʔukkiwa (ʔukkja)	tubiwa (tubja)
-nja 条件形(否定)	mjaNnja	ʔuiraNnja	jiraNnja	me:raNnja	ho:raNnja	ʔukkaNnja	tubaNnja
-to 条件形	mju:to	ʔuiruto	jiruto	me:ruto	ho:ruto	ʔukkuto	tubuto
-tara 条件形	miNtara	ʔuitara	jiNtara	meNtara	hoitara	ʔukkiNtara	tubiNtara
-tukja 条件形	miNtukja	ʔuitukja	jiNtukja	meNtukja	hoitukja	ʔukkiNtukja	tubiNtukja
-kja 条件形	miNkja	ʔuikja	jiNkja	meNkja	hoikja	ʔukkiNkja	tubiNkja
-gaʃara 条件形	miNgaʃara	ʔuigaʃara	jiNgaʃara	meNgaʃara	hoigaʃara	ʔukkiNgaʃara	tubiNgaʃara
-tu 契機形	mittʃatu	ʔuitatu	jittatu	me:tatu	ho:tatu	ʔuttʃatu	tudatu

	もつ	しぬ	する	くる	いる	ある	わかい	である
叙実法 1	muttimu	ʃinimu	ʃi:mu	ki:mu	wu:mu	ʔa:mu	wakasamu	X
叙実法 2	muttiN	ʃiniN	ʃiN	kiN	wuN	ʔaN	wakasaN	jaN-[8]
-tu(ni)原因形	muttiNtu (ni)	ʃiniNtu (ni)	ʃiNtu(ni)	kiNtu(ni)	wuNtu(ni)	ʔaNtu(ni)	wakasaNt u(ni)	jaNtu(ni)
-iwa 条件形	muttiwa	ʃiniwa (ʃinja)	ʃiriwa (ʃirja)	kuriwa (kurja)	wuriwa (wurja)	ʔariwa (ʔarja)	wakasariw a (wakasarj a)	jariwa (jarja)
-nja 条件形(否定)	muttaNn ja	ʃinjaNn ja	ʃiraNn ja	ɸuNnj a	wuraN nja	naNnj a	wakasa naNnja	ʔanaN nja
-to 条件形	muttuto	ʃinuto	ʃiruto	kuruto	wuruto	ʔaruto	X	X

[8] コピュラの第一叙述形は、jaN であるが、接続詞か終助詞 sa がつくときだけあらわれる。

-tara 条件形	muttiNtara	ʃiniNtara	ʃiNtara	kiNtara	wuNtara	ʔaNtara	wakasaNtara	jaNtara
-tukja 条件形	muttiNtukja	ʃiniNtukja	ʃiNtukja	kiNtukja	wuNtukja	ʔaNtukja	wakasaNtukja	jaNtukja
-kja 条件形	muttiNkja	ʃiniNkja	ʃiNkja	kiNkja	wuNkja	ʔaNkja	wakasaNkja	jaNkja
-gaʃara 条件形	muttiNgaʃara	ʃiniNgaʃara	ʃiNgaʃara	kiNgaʃara	wuNgaʃara	ʔaNgaʃara	wakasaNgaʃara	X
-tu 契機形	muttʃatu	ʃidʒatu	ʃa:tu	kittʃatu	X	X	X	X

nudimu（のんでも）は、動詞、形容詞、コピュラのテ中止形に助詞 mu（も）がついた形で、ゆずり状況的なつきそい文の述語になる。次は、その用例である。

110) wunagu=wa ʔikja:sa hataratʃimu <kju:rjo:>=wa ʔagaramu
女はいくら働いても、給料はあがらない。

-timu 条件形に jukkwamu（よい）をくわえて、許可をあらわす形式がつくられる。

111) nibutimu jukkwaN =do:
眠ってもいいよ。

沖永良部語正名方言においては、否定形式には、テ中止形がなく、-dana 中止形がもちいられる。-dana 中止形に助詞 mu がくわさって、ゆずり状況的なつきそい文の否定述語になる numadanamu（のまなくても）になる。次は、その用例である。

112) <kaNdʒi> jumaradanamu ʃigutu ʃirariN
漢字が読めなくても仕事できる。

-timu 条件形＋jukkwamu（よい）と同じく-danamu 条件形＋jukkwamu（よい）は、許可をあらわす形式として使用される。

113) ʃiradanamu jukkwamu
しなくてもよい

numabamu（のんでも）も、ゆずり状況的なつきそい文の述語になることがある。検定教科書文法のいわゆる未然形に接尾辞の-ba がつき、日本語のノマバに相当する。

-abamu 条件形は、-timu 条件形とかさなる部分が多いが、正反対、あるいは類似の意味のことがらを重ねて述べ、「どのようなことをしても・何があっても」というニュアンスでもちいられる傾向がみられる。

114) ʔakkabamu wudurabamu jukkwantu tʃa:ma=wa <ʔundo:> ʃi: <jase>-ri
あるいても走ってもいいから、少しは運動して痩せろ。

numinu muN（のむのに）は、うらめ原因をあらわすつきそい文の述語になる。muN は、名詞発生の接辞であるため、動詞、形容詞、コピュラの連体形にくみあわすことができる。次は、その用例である。

115) ʔuri=ga=du jukkwanu muN, Nga tʃigoiʃi ho:ti=jo?
これのほうがよいのに、どうして違うのを買ったのか？

116) <koNdo>=wa wakja kwa:=nu <butai>=gatʃi ʔidʒinu muN gja:gja=wa fu:mu =di
今度は、うちの子が舞台に出るのに、おじいさんは来ないそうだ。

117) ʃima=nu tʃu: janu muN, ʃima=nu muni=wa <zeNzeN> wakaraN =ja:
島の人なのに、島の言葉は全然分からないね。

nudaNte（のんでも、のんだとしても）は、ゆずり状況的なつきそい文の述語になる。動詞の過去形に-te がついた形である。次は、その用例である。

118) ʔuri=ʃi <keNʃu:> ʃaNte=wa nu:=mu tʃuburu=ni ʔjaN
それで研修しても何も頭に入らない。

図 3 動詞の形態論的なタイプとゆずり状況やうらめ原因などをあらわす形式

	みる	おきる	える	まける	かう	おく	とぶ
叙実法 1	mi:mu	ʔuimu	ji:mu	me:mu	hoimu	ʔukkimu	tubimu
-timu 形	mittʃimu	ʔuitimu	jittimu	me:timu	ho:timu	ʔuttʃimu	tudimu
-adanamu 形	mja:danamu	ʔuiradanamu	jiradanamu	me:radanamu	ho:radanamu	ʔukkadanamu	tubadanamu
-abamu 形	mja:bamu	ʔuirabamu	jirabamu	me:rabamu	ho:rabamu	ʔukkabamu	tubabamu
連体形＋muN 形	mi:nu muN	ʔuinu muN	ji:nu muN	me:nu muN	hoinu muN	ʔukkinu muN	tubinu muN
-tante 形	mittʃaNte	ʔuitante	jittaNte	me:taNte	ho:taNte	ʔuttʃaNte	tudaNte

	もつ	しぬ	する	くる	いる	ある	わかい	である
叙実法 1	muttimu	ʃinimu	ʃi:mu	ki:mu	wu:mu	ʔa:mu	wakasamu	X
-timu 形	muttʃimu	ʃidʒimu	ʃi:mu	kittʃimu	wuttimu	ʔattimu	wakasattimu	jattimu
-adanamu 形	muttadamamu	ʃinjadanamu	ʃiradanamu	ɸu:danamu	wuradanamu	na:danamu	wakasa na:danamu	ʔanadanamu
-abamu 形	muttabamu	ʃinjabamu	ʃirabamu	ɸu:bamu	wurabamu	ʔarabamu	wakasa ʔarabamu	jarabamu
連体形＋muN 形	muttinu muN	ʃininu muN	ʃi:nu muN	ki:nu muN	wu:nu muN	ʔa:nu muN	wakasanu muN	janu muN
-tante 形	muttʃaNte	ʃidʒaNte	ʃaNte	kittʃaNte	wuttaNte	ʔattaNte	wakasattaNte	jattaNte

7.6 様態節に関係ある接辞

7.6.1 -gatʃana

動詞の連用形+-gatʃana は、日本語の連用形+ナガラに相当し、主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態、または、状況をあらわす。

90) <terebi> mi:-gatʃana <beNkjo:> ʃi-ra
テレビを見ながら、勉強しよう。

7.6.2 -genja

連用形+-genja は、連用形+-gatʃana と同様に、日本語の連用形+ナガラに相当し、主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態、または、状況をあらわす。-genja をよその言い方とする話者もいるが、現在は、正名方言話者も用いるようになっている。

91)　<terebi> miː-genja <beNkjoː> ʃì-ra
テレビを見ながら勉強しよう。

7.6.3 -suku

-suku は、動詞旧連体形につき、程度、または、限定をあらわす従属節の述語になる動詞にあらわれる。修飾節の述語に可能形をとらえている動詞があらわれることが多く、その可能性の程度・限度を限定する。suku は、元は、機能名詞として連体形に修飾されたと考えれるが、旧連体形が連体形としての生産性を失っても、組み合わせとして文法化したようである。

92)　kam-aru-suku kam-i
食べられるだけ食べろ。

7.6.4 -dake

-dake は、旧連体形につき、程度、または、限定をあらわす従属節の術語になる動詞にあらわれる。-riwa...-dake の形で、日本語の「すれば～するほど」と同じように従属節の事態の程度と比例して主節の程度がかわることをあらわす用法でよく用いられる。

93)　harasa-riwa　harasaru-dake ʔmaːsa-N
辛ければ辛いほどおいしい。

7.7 時間節と関係ある接辞

7.7.1 -ni

連用形+ni は、従属節と主節の事態の成立がほとんど同時であることをあらわす。過去形には、尾略形に-ini としてつく。

94)　taroː=ga　jaː=gatʃi　ʔiki-ni=wa
太郎の家に行くときは
jukkwa-N-koi　gai-tʃi tabori
よろしく言ってください。

95)　warabi ja-tta-ini=wa kui-tu-ta-N
子供だったころは太っていた。

96)　wakasa-ini <kuroː> ʃì-ra-ʃi=du jukkwa-ru
若いときは苦労しないほうがいい。

7.7.2 -Ntane

-Ntane は、動詞の旧連体形につき、2 つの事態を結びつける。この形式は、従属節の事態を時間的な期限として設定し、主節においてその前におきる事態を述べる。

97)　taroː=ga　kuru-Ntane　ma-ttaː
太郎が来るまで待とう。

格助詞-Ntane に由来することから、旧連体形がかつて名詞としての用法があったと考えられる。

7.7.3 -tiNgenja

-tiNgenja は、-ti 中止形に日本語のナガラに対応する-genja と似ている形態素が組み合わされた形式である。動詞の-ti 中止形由来であるため、動詞の語根との音便をおこす。2 つの事態のあいだの順序をあらわす。

98) <kiʃa> nu-ttiNgenja <dʒido:doa>=di ʔi-ʃi
汽車に乗ってから自動ドアというのを
ʔatena:dana, <ʔiʃʃo:keNmei> <doa> ʔe:-raN =di
知らなくて、一生懸命ドアを開けようと
ʃu:-ta-ʃiga
していたけど…

-ti 中止形が調音でおわる ʃi:mu「する」、ʃi:のばあい、超重音節にならないように、*ʃi:Ngenja でなく、ʃiNgenja になる。

99) <sotsugjo:> -ʃiNgenja jamatu=gatʃi ʔi-dʒa-mu
卒業してから日本本土に行った。

7.8 目的節接辞-ga

-ga が連用形につき、日本語の連用形+ニに対応し、主節の移動動作の目的をあらわす。

100) wa=ga saki hoi-ga ʔiki-N
私が酒を買いに行く。

7.9 等位節・並列節と関係ある接辞

7.9.1 -i

肯定形の尾略形+-i は、その節であらわされている事態のみならず、ほかの事態も成立することをしめす。尾略形+-i の複数がつなぐこともできる。

用例

101) <to:dai>=mu ʔidʒi-ta-i, dʒiN=mu ʔa-i,
東大も出たし、お金もあるし、
<ʔamerika>muni=mu dʒo:dʒi ja-i, kimugirasa=mu ʔa-i,
英語も上手だし、心も優しいし、
ʔikjanjanu ʃigutu=mu ʃi-rari-nu hadʒi
どんな 仕事も できるはずだ。

102) mu-ttʃi ki-ttʃimu jukkwa-i ho:-timu jukkwa-i...
持ってきてもいいし、買ってもいいし…

7.9.2 -di

-di は、否定形の尾略形につき、用法は、上に述べた肯定形の尾略形+-i と同じく、その節であらわされている事態のみならず、ほかの事態も成立することをしめす。見た目では、日

本語西日本諸方言で見られる否定形の中止形であるンデ形式と同源のようであるが、否定形の尾略形+-di は、日本語の未然形+ズと同源である[9]。

103) jamatumuni=mu ʃikattu ʃi-rar-a-di,
日本語もちゃんとできないし、
dʒiN=mu na:-di, ʔikja ʃi-ru?!
お金もないし、どうしよう？！

7.9.3 -dana

-dana は、否定形の尾略形につく。付帯状況をあらわすばあいにも使い、原因・理由をあらわす用法もある。

104) wanu=mu waka-ra-dana,
私も分からなくて
ʔari=mu waka-ra-dana ʔa-tta-N-tu
彼もわからなかったから
<dʒo:ho:buNpu>=nu warusa-N
情報分布が悪い。

-dana には、接続的な用法以外にも用法がさまざまある。無生存在動詞ʔa:mu「ある」の過去形 ʔattamu が-dana につくと、否定形の過去形になる。

-dana は、条件形接辞-tara がつく語幹としても機能する。

105) na:-dana-tara wa=ga hoi-mu
ないのなら、私が買う。

否定形にとりたて助詞がつくばあいに-dana 中止形に助詞がつき、テンスが無生物存在動詞ʔa:mu「ある」に担われる。

106) ʔunni=nu tuki=wa na: na:-dana=ga ʔa-tta-ra
その当時はもうなかったか
waka-ra-ʃiga
分からないけど

7.9.4 -ti 中止形

-ti は、日本語テ中止形に相当し、語根との音便をおこすことについて、上にすでに言及した。肯定形のみにつき、否定形のばあいは、-di や-dana などが中止形として機能する。

-ti 中止形には、複文のさまざまな用法をもつ。その中には、並列、前触れ、継起、理由・原因、付帯状況などがある。

107) ʔari=wa jamatu=gatʃi ʔi-dʒi （並列）
彼は日本本土に行って、

[9] 日本語の/dzu/には、沖永良部語諸方言の多くのものは、/dʒi/が対応するのであるが、正名・住吉地区では、有声破擦音/dʒ/が有声閉鎖音/d/になる傾向がある。例：「水」大津勘 midʒi　正名 midi、「尻尾」大津勘 dʒu:　正名 du:、「トンボ（あきず）」大津勘ʔe:dʒa　正名ʔe:da。

wana naɸa=gatʃì ʔidʒa-N
私は沖縄に行った。

108) <terebi> hoː-ti <njuːsu> mi-ttʃa-N （前触れ）
テレビを買ってニュースを見た。

109) ʔaro=gatʃì ʔidʒi-ti ʔami=nu fu-tta-N-tu mudu-ta-N（継起）
外に出て、雨が降ったから、戻った。

110) gaN gaij-a-tti kaNge-ta-N （理由・原因）
そういわれて考えた。

119) taNnja=gatʃi=wa ʔattʃì ʔidʒa-mu （付帯状況）
田皆には、歩いて行った。

-ti 中止形は、複合述語を構成する働きもある。-ti 中止形+有生存在動詞 wuːmu「いる」が融合して-tumu 継続形になったが、とりたて助詞が入るばあい、分析的な形式としての起源が見えてくる。

111) hatara-tʃi=wa wuː-mu
働いてはいる

そのほかのアスペクト的な述語形式には、結果形として用いられる-ti 中止形+無生存在動詞ʔaːmu「ある」がある。

意志・意図をあらわす-ti miːmu「～てみる」や -ti ʔukkimu「～ておく」などと、授受動詞と結びついている -ti kurimu「～てくれる」や-ti muroimu「～てもらう」などのような-ti 中止形による複合述語もある。

7.9.5 第 1 形容詞の-nu 中止形

-nu は、第 2 形容詞の-sa/-ʃa につき、並列と理由・原因をあらわす。

112) ʃìgutu=mu samatʃasa-nu
仕事も面倒くさくて
<gakkoː>=mu midiraʃa na-N-tu =joː
学校も面白くないからね。

113) haNmaraʃa-nu mimi=nu jaː-du-ta-N
うるさくて耳が痛かった。

7.9.6 -taja

-taja は、語根との音便をおこす。日本語の～タリに相当し、複数の事態を並べ、その事態が全体の一部になり、ほかにも事態があることを暗示する働きがある。

114) kinju=wa jaː=neti ʃumutʃì ju-daja
昨日は家で本を読んだり
<terebi> mi-ttʃaja ʃa-N

テレビを見たりした。

7.9.7 -gane

-gane は、否定形の第 2 終止形につき、付帯状況をあらわす。使用変異が上に述べた-dana とある程度重なっているが、-gane は、原因・理由をあらわさない。

115) ʔatʃa taʃiki-ra-N-gane mudu-ta-mu =djo:
お父さんを助けないで、戻ったな。

従属節と主節に差し出されるやり方が等しいことをあらわすのにも-gane が用いられる。

116) wa=ga hissa=mu gai-tʃa-N-gane
私が先ほども言ったように
ganjanu ʃigutu=wa du:=ʃi ʃi:-ʃi=du jukkwa-ru
そういう仕事は自分でやったほうがよい。

-gane のもう 1 つの使用は、無生存在動詞と共起するばあい、日本語の「～ようだ」と似ているように話し手が観察して事態をとらえていることをあらわす。このようなばあいは、肯定形の第 2 中止形にもつく。比喩的な用法もある。

117) ʔari=mu ʃimamuni=nu <beNkjo:>-ʃu-N-gane a-N
彼女も島言葉の勉強をしているようだ。

7.10 連体形接辞-nu

-nu が尾略形につき、連体形になる。連体形の形で名詞を修飾する。

118) ʔunu ʃimamuni <beNkjo:>-ʃu:-nu tʃu:=wa
その島言葉を勉強している人は
ʔuda=nu tʃu: =jo?
どこの人か？

形式名詞もほぼすべて-nu 連体形につく。

119) mutʃikaʃa-nu ʃigutu=wa ʃi:buʃa na-N
難しい仕事はしたくない。

7.11 準名詞接辞-ʃi

尾略形+-ʃi は、いわゆる準名詞形であり、動詞・形容詞・コピュラを名詞化させるための、主な方法である。有生物、無生物、できごとを制約なくあらわすことができる。

120) nama ʃu:-ʃi=wa ho:matʃi =na? （できごと）
今やっているのは、川祭りなのか？

121) ɸunu kwa:ʃi tʃuku-ta-ʃi=wa taru =jo? （有生物）
このお菓子を作ったのは誰か？

122) 'ho:' =di ʔi:-ʃi=wa jamatumuni=ʃi <kawa> =ga （無生物）
ホーというのは日本語で川だよ。

123)　ʔitʃibaN dʒo:dʒi ja-ʃi=wa ʔari =do:　（有生物）
一番上手なのは、彼だよ。

7.12 テンス・アスペクトと関係がある接辞

7.12.1 過去形-ta-

-ta-は、-ti と同じように、語根との音便をおこす過去形をあらわす接辞であるため、上にも述べたように、異形態素が多い。

124)　<terebi> mi-ttʃa-N
テレビを見た。

125)　mutʃikaʃa-tta-N
難しかった。

7.12.2 継続形 -tu-

-tu-は、継続形の接辞であり、語根との音便をおこす。-ti 中止形に有生物存在動詞 wu:mu「いる」が融合した形式である。

126)　nama <bideo> tu-ttu-N
今ビデオをとっている。

とりたて助詞が用いられるばあいは、元の分析的な形式があらわれる。

127)　tu-tti=wa wu-N=do:
とってはいるよ。

7.12.3 過去の反復習慣形-ita-

語根+-ita-の主な用法は、過去の反復か習慣をあらわすことである。

128)　wa-kja　ʔatʃa=wa　horo=kara　mudu-ta-nu　tuki
私たちの父は畑からもどったとき
ʔitʃi:mu　<ʃo:tʃu:>　num-ita-mu
いつも焼酎を飲んでいた。

非実現という用法もある。次の用例の日本語訳は、疑似日本語訳である。

129)　ʔura=ga　wanu=mu　ʔabi-riwa　madʒini　num-ita-mu
あなたが私も読んだら、一緒に飲んでいた。

過去の反復習慣をあらわす-ita-は、連用形+オッタに由来し、シオッタ相当形式という名称でもよばれるが、共時的には、語根+-ita-という風に分析できる。[10]

---

[10] 同じ北琉球語群に属する沖縄語首里方言におけるシオッタ相当形式は、共時的に-i-に相当する形態素と-ta-に相当する形態素が連結しているという風に分析が可能である。沖永良部語正名方言では、非過去の尾略形が語根+-i-が連結している形であるとしても、-ita-が別の形態素になる分析しかできない。次の動詞 mugemu「動く」を考察することにする。
mugemu「動く」尾略形：muge- シオッタ相当形式：muge:tamu

tuimu「とる」語根：tu-　+　-ita-　+　-mu >　tuitamu
ji:mu「得る」語根：ji-　+　-ita-　+　-mu >　ji:tamu
mugemu「動く」語根：muge-　+　-ita-　+　-mu >　muge:tamu

長母音 a:、u:、o:でおわる動詞語根につくばあいは、超重音節を避けるための調節がおこる。

kjaimu「耕す」語根：kja:　+　-ita-　+　-mu > *kja:itamu > kjaitamu
kuimu「閉める」語根：ku:　+　-ita-　+　-mu > *ku:itamu > kuitamu
hoimu「買う」語根：ho:　+　-ita-　+　-mu > *ho:itamu > hoitamu

接近音語根と受身接辞・可能形接辞の r 語根につくばあいも、-ita-が直接語根つく。

turarimu「とられる」語根：turar-　+　-ita-　+　-mu　>　turaritamu

/ju/から/i/への音韻変化で-juta-が-ita-になった。超重音節を許さない制約の影響で調音でおわる語根と母音連続でおわる語根において-ita-形式が成立できなくなっている。

ʔuimu「おきる」語根：ʔui-　+　-ita-　+　-mu >　*ʔuiitamu
me:mu「負ける」語根：me:-　+　-ita-　+　-mu >　*me:itamu

かわりに過去の反復習慣をあらわすには、-tumu 継続形の過去形の-tutamu が用いられる[11]。

130)　warabi ja-tta-ini　ʔitʃi=mu　<rokudʒi>=ni　ʔui-tu-ta-mu
子供のころいつも 6 時におきていた。

非実現の用法のばあいも、-tutamu が用いられる。

131)　ʔura=ga　ʔuiʃ-iwa　ʔui-tu-ta-nu　muN
あなたがおこせば、おきていたのに。

132)　ʔura=ga　gaij-a-N-nja　kusu　ku-du-ta-mu =djo:
あなたが言わなければ糞を踏んでいたな。

7.12.4 重複形

動詞の連用形が 2 つ連結し、連用形+連用形のように重複形になる。重複形は、反復をあらわすのに用いられるが、動詞の一部しか重複形をとらえず、生産性が低い形式である。

133)　<deNki>=nu　hi:dʒu　ki:-ki:　ʃu:-mu =djo:
電気がしょっちゅう消えているな。

尾略形 muge-に-i-が入っているとすれば、muge-+-ita-mu　>　muge:tamu に-i-が 2 つ連結しているということになるため、通時的には、どうであれ、共時的には、-ita-を 1 つの形態素であるという分析のほうが有力である。

[11] 大津勘方言では、過去の反復習慣をあらわす形態素が変化せず、-juta-であるため、同じ超重音節の制約が働いているとしても、j で音節の境になるため、形式が音素配列論的に成立できる。例：ʔuijutamu「おきオッタ」 ku:jutamu「閉めオッタ」

134)　ʔura=wa　nu:　mi:-mi:　ʃu-N=jo?
あなたは何を見ているのか？

7.13 否定形-(r)a(:)-

否定形の接辞-(r)a(:)-は、語根につく。母音語根につくばあいは、-ra-としてあらわれ、子音語根につくばあいは、-a-としてあらわれるが、ゼロ母音接近音語根のばあいは、-a:-としてあらわれる。-(r)a(:)-には、-mu、-N、-ru などのようなムードをあらわす形態素や、連体接辞-nu や、接続詞として機能する-ʃiga「けれども」などのような形態素がつかなければ語形としてなりたたない。-di や-dana のような否定接辞にしかつかない副動詞接辞もある。

mugemu 「動く」語根：muge-　+　-ra-　+　-mu > mugeramu
ʔukkimu「置く」語根：ʔukk-　+　-a-　+　-mu > ʔukkamu
ji:mu「座る」語根：　j-　+　-a:-　+　-mu > ja:mu

不規則動詞 ʃi:mu「する」とʔoiʃimu「召し上がる・差し上げる」の否定形 ʃiramu「しない」ʔoiʃiramu「召し上がらない・差し上げない」には、形態素-ra-は、表面化されるが、ki:mu「来る」の否定形 ɸu:mu「来ない」は、語形としてさまざまな音韻変化をとらえたため、共時的に形態素に分類しづらい。

ʔa:mu「ある」の否定形は、補充形式の na:mu「ない」である。na:mu は、ほかの否定形と同じ形態論的な特徴をもっている。

上にも述べたように、沖永良部語正名方言の特徴的な点は、否定形の過去形が否定中止形と無生物存在動詞ʔa:mu「ある」の過去形ʔattamu からなった分析的な形式である[12]。

ja:dana ʔattamu「座らなかった」
ɸu:dana ʔattamu「来なかった」
na:dana ʔattamu「なかった」

7.13 可能表現

7.13.1 可能形 -(r)a(:)r-

語幹+-(r)a(:)r-は、可能形であるが、形式としては、受身形と同音である。形態論的な特徴は、上に述べた否定接辞-(r)a(:)-とほぼ同じであるが、不規則動詞 ki:mu「来る」につくばあいのみ、否定形の尾略形 ɸu:-につき、ɸu:rarimu「来ることができる」になる。

渋谷（2000：64）が述べている可能形の種類（心情可能、能力可能、内的条件可能、外的条件可能）は、すべて語幹+-(r)a(:)r-であらわせ、同じ北琉球語群に属する与論語（林 2014）や沖縄語名護幸喜方言などように、条件可能のみに用いられる制限は、ない（かりまた 2014）。

[12] 沖永良部語の否定形の過去形が現在も分析的な形式であることは、特徴的ではあるが、平山（1998：35）によると、日本語広島方言の「～ざった」が否定中止形のズ+アッタに由来するとのことであり、沖縄語伊是名方言でも、否定中止形が-na であり、否定形の過去形として-na:taN があるため、これも否定中止形+無生物存在動詞の過去形からできたものであると考えられる（伊是名島方言辞典編集委員会 2004：176-181）。

135)　<rabureta:>=wa　hadʒikaʃa-nu　hakk-ar-a-N　（心情可能）
ラブレターは恥ずかしくて書けない。

136)　<ʔe:go>=ʃi:　<roNbuN>　hakk-ar-a-N　（能力可能）
英語で論文、書けない。

137)　ti:=nu ja:-di peN mutt-ar-a-dana <tegami> hakk-ar-a-N　（内的条件可能）
手が痛くてペンが持てなくて手紙書けない。

138)　sumi na-N-koi na-tta-N-tu <saigo>=Ntane hakk-ar-a-N　（外的条件可能）
墨がなくなったから、最後まで書けない。

沖縄語の可能形は、-ti 中止形や-ta-過去形などのような t ではじまる接辞には、正名方言の-ita-に相当する、いわゆる第 2 過去形のような形態論のみ持っているが、沖永良部語正名方言の-(r)a(:)r-による可能形には、-ta-による過去形も-ita-による過去形も用いることができるようであるが、その使用の詳細は、今後の課題にする。

7.13.2 能力可能-jus-

連用形+-jus-は、能力可能をあらわす。否定形で用いられるが、肯定形では、その使用がほとんど肯否疑問に限られており、衰退しつつあるようである。

139)　wana　tukunuʃima=nu　muni　kiki-jus-a-ʃiga
私は、徳之島の言葉が聞けないが、
juNnu=nu　muni=wa　kik-ari-N =dja
与論の言葉は、聞けるよ。

-jus-による形式が衰退しつつあるせいか、過去形は、自然談話にも出ないし、面接調査で話者に聞いても、-jus-可能形には、過去形が存在しないという答えしか出なかった。

7.14 ヴォイスをあらわす形態論

7.14.1 使役形-(r)a(:)s-

使役接辞-(r)a(:)s-は、上に述べた否定接辞-(r)a(:)-とほぼ同じように動詞の語根につくが、不規則動詞 ki:mu「来る」につくばあいのみ、否定形の尾略形 ɸu:-につき、ɸu:raʃimu「来させる」という使役形になる。形態論的な分類としては、-(r)a(:)s-は、s 語根動詞と同じ特徴をしめす。

140)　jo:jo=ni kam-a-tʃa-mu
赤ん坊に食べさせた。

ʃi:mu「する」の使役形は、-(r)a(:)s-による形式ではなく、ʃimimu という母音語根動詞である。

141)　ʔunu　ʃigutu=wa　ʔutu=ni　ʃimi-ra
その仕事は弟にさせよう。

日本語とことなり、使役接辞-(r)a(:)s-が 2 つ連結し、二重使役になることができる。當山（2013：112）によると、沖縄語首里方言にも二重使役構造があるが、それは、2 つのことなる接辞が連結した形である。用例の日本語訳は、疑似日本語訳である。

142) wa=ga taru-di ʔutu=kara jo:jo=ni
私が頼んで、妹から赤ん坊に
<miruku> num-as-a-tʃa-mu
ミルクを飲マサセサセタ

7.14.2 受身形-(r)a(:)r-

受身形の接辞-(r)a(:)r-が同音の可能形接辞と同様に、否定接辞-(r)a(:)-とほぼ同じように動詞の語根につく。

143) ʔunu kwa:ʃi=wa kamu-to ʔama=ni waʃimik-ari-N =do:
そのお菓子は、食べると、お母さんに怒られるよ。

日本語とことなり、沖永良部語正名方言では、受身形が命令形と禁止形と意志勧誘形をとらえることも可能である。詳細は、今後の課題にするが、意味は、日本語の「してもらう」に近いようである。次の用例の日本語訳が疑似日本語訳である。

144) ʔari=ga=du ʔunu maNgura ju: ʔatea-N-tuni
彼のほうがその辺をよく知っているから
ʔari=ni so:-ti ʔikar-i
彼に連れて行カレロ。

145) ʔari=wa naroi-dʒo:ʃa na-N-tuni naros-aru-na
彼は、教えるのが上手じゃないから、教エラレルナ。

146) saNʃiru=wa ʔanu ʃiNse=ni naros-ar-a
三味線は、あの先生に教エラレヨウ。

次のような用例もある。依頼表現では、受身形がもちいられるばあいがある。間接目的語の動作主体は一人称であるが明示されない。日本語訳が疑似日本語訳である。

147) ɸugam-a-tti tabori
お目にカカラレテください。

148) tarum-a-tti tabori
頼マレテください。

7.15 待遇表現接辞

語根+-jo(:)ri は、話し手より目上の人に対する命令・依頼をあらわす。ゼロ母音接近音語根につくばあいは、-jo:ri としてあらわれる。s 語根動詞につくばあいは、s+j が ʃ になる。受身接辞と可能形接辞の r 語根につくばあい、沖永良部語正名方言では、r と j の連続が音韻配列論的にゆるされていないため、語根の r が消える。不規則動詞 ʃi:mu「する」につくばあいは、ʃo:ri になる。

丁寧形接辞-ja(:)bu-は、聞き手が目上であるばあいに用いられる。尊敬語命令形-jo(:)ri と同じように動詞につく。ゼロ母音接近音語根につくばあいは、-ja:bu-というようにあらわれ、s 語根動詞につくばあいは、s+j が ʃ になる。

不規則母音語根の動詞は、語根がʔme:mu「いらっしゃる・おっしゃる」と jaʃime:mu「お休みになる」の語根は、ʔmo:-と jaʃimo:-であるが、-jabu-がつくと、ʔme:jabuN「いらっしゃいます（行く・来る）・おっしゃいます」と jaʃime:jabuN「お休みになります」になり、不規則的なつき方をしめす。

不規則動詞 ʃi:mu「する」は、ʃa:buN「します」になり、ʔoiʃimu「召し上がる・差し上げる」は、 ʔoiʃabuN「召し上がります・差し上げます」になる。不規則動詞 ki:mu「来る」は、kja:buN「来ます」になる。

7.16 その他

連用形+-kwa ʃi:mu は、日本語の連用形+スギルと同じように過度の状態をあらわす。最近は、日本語の影響で連用形に ʃigimu「すぎる」がついた形式も用いられるようになっている。

149) kinju numi-kwa ʃa-N
昨日、飲みすぎた。

連用形+-kata は、日本語の連用形+カタと同じく、方法をあらわす。

150) gai-kata=nu warusa-N
言い方が悪い。

連用形+ -buʃa は、日本語の連用形+～タイに相当し、主体が自分の行為の実現に対する欲求、または、希望をあらわす動詞から派生した形容詞である。

151) wanu=mu ʔiki-buʃa-N
私も行きたい。

第三者の欲求を述べるときは、引用助詞 di(tʃi)による引用文か、連体形+ gutu ʔa:mu「ようだ」のような間接的な表現が用いられる。また、-ʃa 連用形に ʃi:mu がつき、日本語の連用形+タガルのような第三者の欲求や希望をあらわす構造が用いられる。

152) ʔari=wa madʒini ʔiki-buʃa ʃu:-ʃiga ʔikja =jo?
彼は一緒に行きたがっているけど、どう？

-buʃa は、「ほしい」という意味をする ɸuʃʃa が連用形につき、連濁で ɸ が b になった形である。奄美群島で北琉球語群に属するほかの言語と、沖縄語伊平屋・伊是名方言では、日本語の~タイと同源である接辞が用いられているが、沖永良部語において-buʃa が用いられることがその周辺では、特徴的である。

連用形+-gi:sa は、出来事がおこる可能性が高いという話し手の判断をあらわす。

153) ʔiʃi=nu ʔuti-gi:sa-N =do:
石が落ちそうだよ。

形容詞のばあいは、知覚したことから判断した様子をあらわす。

154)　ʔanu <hakudʒiN>=wa <ʔeːgo> dʒoːdʒi jai-giːsa-N
あの白人は英語上手そうだ。

連用形+-jasa は、動詞から派生した形容詞であり、ある動作がたやすくできること、または、そのようなことがおこりうることをあらわし、日本語の連用形+～ヤスイに相当する。

tʃîkoimu 「使う」 > tʃîkoijasamu「使いやすい」

連用形+-gurisa は、動詞から派生した形容詞であり、上に述べた連用形+-jasa の反対をあらわし、ある動作をすることが物理的に、または、心理的にすることが難しいということをあらわす。日本語の連用形+～ニクイに相当する。

gaimu「いう」　> gaigurisamu「言いにくい」

連用形+-guri naːmu は、ある事態の必要性がないということをあらわし、客観的不必要と主観的な判断を両方あらわすことがある。

155)　ʃuwa ʃiː-guri na-N =doː
心配しなくていい。

8 章 単文

8.1 疑問文

日本語記述文法研究会（2003）によれば、疑問の定義は、次のとおりである。

> 疑問は、その命題に対して話し手の判断がなりたたないことをあらわす。疑問の中心的な機能は、質問である。典型的な質問には、①話し手に不明な情報があるため判断がなりたたず、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消をめざすという 2 つの基本的性質がある。質問の 2 つの基本性質のうち、①を欠くのが確認要求の疑問文であり、②を欠くのが疑いの疑問文である。確認要求の疑問文や、疑いの疑問文のほかにも、質問を行う時点での話し手の見込みや、状況や文脈との関係、あるいは情報の得られ方などから疑問文にはさまざまな大部が存在する。

一番典型的な疑問文は、①と②という特徴を両方もち、聞き手から情報を引き出すことを目的とする。

上に述べた 2 つの性質の中の 1 つが欠けている疑問文もある。たとえば、確認要求の疑問文は、話し手の判断がなりたっていないという性質が欠けており、疑いの疑問文は、聞き手に問いかけるという性質が欠けている。

疑問文が疑問助詞によってマークされる点は、北琉球語群に属している言語変種の中で広く見られる特徴である。沖永良部の東側の諸方言（Van der Lubbe & Tokunaga 2015: 362）とことなり、沖永良部語正名方言でも、疑問が終止形として機能する語形につく終助詞によってマークされる。話し相手が言ったことがそのまま繰り返される問い返し疑問と、nu:?「何？」ʔitʃi?「いつ？」などのように 1 つの疑問詞による疑問文だけに助詞がつかいないこともある。

日本語記述文法研究会（2003：23）によると、「疑問文は、話し手にとって何が不明なのかという観点から、真偽疑問文（＝肯否疑問文、yes-no question/polar question）、選択疑問文（alternative question）、補充疑問分（疑問詞疑問文、wh-question/content question）の 3 つのタイプにわけられる。

確認要求や疑いは、疑問たらしめる 2 つの性質の中の 1 つが欠けているが、疑問文には、属する。修辞疑問（rhetorical question）は、特徴①がないが、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消をめざすということの中では、「聞き手に問いかける」というところのみあるため、ここで記述することにする。

1. 沖永良部語正名方言のさまざまの疑問文の’疑問らしさ’

	条件①	条件②
肯否疑問	○	○
選択肢疑問	○	○
疑問詞疑問	○	○
確認要求の疑問	×	○
疑いの疑問	○	△
修辞疑問	×	×
意志疑問	○	○

8.1.1 肯否疑問

肯否疑問文は、上に述べた疑問文の定義があてはまり、典型的な疑問文である。沖永良部語正名方言は、沖縄語首里方言（Shimoji 2012：360）と与論語東区方言（菊＆高橋　2005：782-783）と同じように肯否疑問と疑問詞疑問文のマーキングがことなる。動詞・第 1 形容詞の第二終止形につく助詞の nja か na によってマークされる。動詞述語文、または、いわゆる第 1 形容詞が述語になる形容詞述語文が過去でない肯定文であれば、述語が第 2 終止形をとらえ、-nja がつく。

156)　A:　ʔura=mu　ʔik-i-N=nja?
あなたも行くか？

B: ʔik-i-N =do:
行くよ

157) A: ʔunu kwa:ʃi=wa ʔma:sa-N=nja?
そのお菓子はおいしいか？
B: ʔiN, ʔma:sa-N
うん、おいしい

158) A: ʔari=ga gai-tʃu-ʃi waka-i-Ø=nja
彼が言っていること分かるか？
B: ʔai, waka-ra-N
いや、分からない

名詞か、いわゆる第 2 形容詞が述語になる肯否疑問文のばあい、na がつく。

159) A: ʔukja kwa-Nkja=mu ʃimamuni dʒo:dʒi=na?
あなた方の子どもたちも島言葉が上手か？
B: ʔai, wakja kwa-Nkja=wa ʃimamuni <zeNzeN> tʃikoi-jus-a-N =do:
いや、私たちの子どもは島の言葉がぜんぜん使えないよ。

160) A: ʔanu tʃu:=wa ʃima=nu tʃu:=na?
あの人は島の人か？
B: ʔana-N
違う（＝ではない）。

コピュラの丁寧形 dero にも-nja ではなく-na がつく。

161) A: ʔadʒiɸu=nu niʃisan=wa horodʒi dero=na?
畦布の西さんは親戚ですか？
B: ʔiN, horodʒi =doja:
うん、親戚だよ。

否定肯否疑問文のばあい、動詞・第 1 形容詞・コピュラの否定形に nja がつくことがゆるされるかに関しては、話者の意見が一致していない。70 代半ばの話者からは、否定形に nja がついた形を用いるのを好まないようである。それよりは、否定中止形の-adi[13]に肯否疑問助詞 na をつけたほうが正しいという意識がある。70 代前半と 60 代の話者には、否定形＋nja の使用には、違和感がないようである。

162) A: kam-adi=na? ↔ kam-a-N=nja?
食べないか？
B: kam-i-N =do:
食べるよ

163) A: jo:ʃa na:di=na:? ↔ jo:ʃa na-N=nja?
お腹は空いていないのか？（＝ひもじくないのか？）

[13] 沖永良部語正名方言の否定中止形の-adi は、日本語の否定中止形のズに相当すると考えられる。

B: jo:ʃa-N =do:
お腹空いているよ（＝ひもじいよ）

164) A: kam-i-ʃi=wa na:di=na? ↔ kam-i-ʃi=wa na-N=nja?
食べるのは、ないか？
B: na-N =dja:
ないわ

過去の場合は、叙述法では、動詞・形容詞・コピュラが-ta-過去形をとらえるが、過去のことが肯否疑問の対象になるばあいは、-ti 中止形に na がつく。北琉球語群の変種のなかでは、久米島町謝名堂方言（Van der Lubbe 2012）と国頭村奥方言にも同じ現象がみられる。北琉球語群の変種の中では、与論語（菊 2007：43-44）喜界語小野津方言（白田 2013：267）奄美語名瀬方言（上村・須山 1997：446）において日本語のテ中止形に相当する形式が過去をあらわすことが確認できているため、現在沖永良部語のばあいに中止形とされる-ti がかつて単独でも過去をあらわしていたと考えられる。

165) a. × miʃu ho:-ta-n=nja?
b. miʃu ho:-ti=na?
味噌を買ったか？

166) A: ʔura=wa <aniki>=tu madʒini ʔik-adana ʔa-tti=na?
あなたは兄貴と一緒に行かなかったか？
B: ʔai, madʒini ʔi-dʒa-N =do:
いいえ、一緒に行ったよ。

167) A: kinju=nu <tʃo:sa>=wa mutʃikaʃa-tti=na?
昨日の調査は難しかったか？
B: ʔai, jasa ʔa-tta-ʃiga
いいえ、容易かったけど。

168) A: ɸuneda ki-ttʃu-ta-nu tʃu:=wa jamatu=nu tʃu: ja-tti=na?
この間来ていた人は、大和の人だったか？
B: ʔiN, gaN =do:
うん、そうだよ。

肯否疑問文では、１つの構成素がフォーカス（焦点化）されることもある。フォーカスされる構成素にフォーカス助詞 du がつく。du に飾られる構成素が疑問の対象になる。

次の用例では、話し手が誰かが車で畑に行くということを分かっているが、行くのは、聞き手かどうかを問う。

169) A: ʔura=ga=du kuruma=ʃi horo=gatʃi ʔik-i-N=nja?
あなたが車で畑に行くのか？
B: ʔiN
うん。

次の用例では、話し手は、聞き手が畑に行くということを知っているが、車で行くかどうかを問う。

170) A: ʔura=wa kuruma=ʃi=du horo=gatʃi ʔik-i-N=nja?
あなたは車で畑に行くのか？
B: ʔiN
うん。

次の用例では、話し手は、聞き手が車でどこかへ行くということが分かっているが、行くのが畑かどうかを問う。

171) A: ʔura=wa kuruma=ʃi horo=gatʃi=du ʔik-i-N=nja?
あなたは車で畑に行くのか？
B: ʔiN
うん。

du で他の品詞・構成素をもフォーカス化させることができる。次の用例では、A が歩いている B を見て、どこから来たかを問うたところで B が島の反対側にある国頭に行ってきたと答える。そこで A が車で行かず、歩いてきたかを聞いて、フォーカスを「歩いて」という副詞節におく。

172) A: ʔuda=kara ki-ttʃi=jo?
どこから来た？
B: kuNgjani=gatʃi ʔi-dʒi ki-ttʃa-ʃiga,
国頭に行ってきたけど、
dari-ta-N =dja
疲れたよ。
A: ʔa-ttʃi=du kuNgjani=gatʃi ʔi-dʒi ki-ttʃi=na?
歩いて国頭に行ってきたのか？
B: ʔai, kuruma=ʃi=du ʔi-dʒi ki-ttʃa-N =doja:
いや、車で行ってきたよ。

動詞述語文では、その動詞によって表現される運動がフォーカスの対象になるばあいは、du が動詞の終止形につかず、動詞がいわゆる連用形になって名詞化し、その連用形に du がつき、日本語の「する」に相当する ʃi:mu がテンスを担うことになる。

動詞に du がつくのは、取り立てるような重いフォーカスを受けるときだけである。次の用例の I では、A は、B が芋を調理することは分かっているが、どのような調理法かが分からなくて、炒めるか他の調理法を使うかを問うが、II では、A は、B が芋を調理することは分かっているが､芋を煮るのではなく炒めるという調理法を使うかを問う。II で話し手が求める回答は、yes か no だけではなく、なぜそうするかという説明も求めるようである。

173) I. A: ʔumu=wa ʔikk-i-N=nja?
芋は炒めるのか？
B: ʔiN, ʔikk-i-N =do:
うん、炒めるよ
II. A: wa:ʃi=wa ʃi-ra-N-gane ʔumu ʔikki=du ʃi-N=nja?

煮るんじゃなくて芋を炒めるのか？
B: ʔiN, ʔikk-i-N =do:
うん、炒めるよ

次の用例では、A は、B が立ち上がって何かをしようとしており、残るのではなく、本当に戻るかどうかを問う。

174) A: mudui=du ʃi-N=nja?
戻るのか？
B: ʔiN, mudu-i-Ø =do:
うん、戻るよ

継続相をあらわすシテオル相当形式である-tumu 形が述語になる動詞述語文でフォーカスの対象になるばあい、-tumu 形の分析的な形式としての起源が見えてくる。-ti 中止形に du がつき、有生物の存在動詞 wu:mu がテンスを担う。

次の用例では、A さんは B さんが芋を調理していることを知っているが、他の調理法ではなく、炒めるという調理法を使っているかどうかを問う。

175) A: ʔumu ʔi-ttʃi=du wu-N=nja?
芋を炒めているのか？
B: ʔiN ʔi-ttʃu-N =do:
うん、炒めているよ。
176) A: ʔama=wa nama nibuti=du wu-N=nja?
お母さんは今眠っているか？
B: ʔai, na: ʔui-ta-N =do:
いや、もうおきたよ

いわゆる第 1 形容詞が述語になる形容詞述語文においても du によるフォーカスがおこる。第 1 形容詞は、-sa/ -ʃa 連用形と無生物の存在動詞ʔa:mu からできたものであり、融合形の-samu/-ʃamu で終わることもあるが、沖永良部語正名方言の第 1 形容詞は、沖縄語首里方言（Shimoji 2012：365）とことなり、必ずしも融合するわけではない。述語がフォーカスの対象になるばあい、融合せず、-sa/-ʃa 連用形に du がつき、ʔa:mu がテンスを担うことになる。

次の用例では、A は、母のお菓子が他の味ではなく、苦いかを問う。

177) A: wakja ʔama=ga kwa:ʃi=wa nigjasa=du ʔa-N=nja?
うちの母のお菓子は苦いのか？
B: ʔai, nigjasa na-N =do:
いいえ、苦くないよ。

次の用例では、A は、去年の仕事が暇ではなく、忙しかったかを問う。

178) A: ɸudu ʃigutu=wa ʔiʃugaʃa=du ʔa-tti=na?
去年仕事は忙しかったのか？
B: ʔiN, ʔiʃugaʃa ʔa-tta-N =do:

うん、忙しかったよ。

次の用例では、A さんは、B さんに第三者である「あの人」がオランダの人かどうかを問う。

179) A: ʔanu tʃu:=wa <ʔoraNda>=nu tʃu: =na?
あの人はオランダの人なのか？
B: ʔiN, gaN =jo:
うん、そうだよ。

名詞述語文の肯否疑問文において述語になる名詞がフォーカスされるばあい、過去形でしか du があらわれない。次の用例のとおりである。次の用例では、A さんは、B さんに第三者である「あの人」が昔区長であったかどうかを問う。

180) A: ʔanu tʃu:=wa mukaʃi <kutʃo:>=du ja-tti=na?
あの人は昔区長だったのか？
B: ʔanaN. <tʃo:tʃo:>=du ja-tta-ru
いいえ。町長だったんだよ。

肯否疑問マーカーna が機能名詞 ba:につくばあいは、形式としては、肯否疑問であるが、話し手が聞き手に yes/no という回答を求めるのではなく、その出来事の訳を問う。

次の用例は、B が A の家にアンテナが 2 つもあることに驚いてその訳を知りたくて問いかける。

181) A: wakja ja:=ne <ʔaNtena> ta:tʃi ʔa:-ʃiga...
うちの家にアンテナ 2 つあるけど...
B: he:, ta:tʃi ʔa:-nu ba: =na?
へー、2 つあるわけなの？
A: <gaikoku>=nu <sakka:> mi:-nu me: <hitsujo:> =dja
外国のサッカーを見るために必要なんだよ。

次の用例では、A が民謡勉強会に参加した B に夜 10 時に道で会った上での会話である。A は、B が参加した民謡勉強会が 6 時に始まることを知っており、10 時まで続いたことに驚いて問いかける。

182) A: nagadu ʔuto-tu-ta-nu ba: =na?
長く歌っていたのか？
B: hju:=wa tʃirage ʔikja-tu-ta-N-tuni
今日はすごく盛り上がっていたから、
nama=ntane ʔuto-tu-ta-N =dja
今まで歌っていたよ。

次の用例では、A が B がテレビを買ってお金がないことに驚き、普段テレビは、さほど高くないはずなのにお金がない訳を知りたくて問いかける。

183) A: numi-ga ʔik-a-dja?

飲みに行かないか？

B: mi:sa-nu <terebi> ho:-ti dʒiN=nu na:-mu =djo
新しいテレビを買ってお金がないな。

A: <terebi>=wa gaNʃi ta:sa-nu ba:=na?
テレビはそんなに高いのか？

B: <soni:>=du ja-tta-ru
Sony だったんだよ。

8.1.2 選択肢疑問文

選択肢疑問文は、複数の可能性のうちどれが正しいかが話し手にとって不明であるため、聞き手にそれを選択肢として提示する疑問文である。肯否疑問と同じく nja か na によってマークされるが、ʔiN「はい」、ʔai「いいえ」は、回答にならず、選択肢の 1 つを選んで回答しなければならない。選択肢疑問文においては、2 つ以上の選択肢がとりたてられ、助詞 du によるフォーカス化がおこる。

次の用例では、A が B に 2 つの物の中でどちらを使うかを問う。

184) A: ʔuri=du tʃiko-i-Ø =nja? ʔari=du tʃiko-i-Ø =nja?
それを使うのか？あれを使うのか？

B: ɸuri=du tʃiko-i-Ø =do:
これを使うんだよ。

次の用例では、A が B に徳之島か与論島のどちらへ行くかを問う？

185) A: tukunuʃima=gatʃi=du ʔik-i-N=nja?
徳之島に行くのか？

junnu=gatʃi=du ʔik-i-N=nja?
与論に行くのか？

B: junnu=gatʃi=du ʔik-i-ru
与論に行くんだ。

動詞述語文において動作が選択肢疑問のフォーカスになっても、du が用いられない。次の用例では、A が B に行くか行かないかを問う。

186) A: ʔik-i-N=nja? ʔik-adi=na?
行くのか？行かないのか？

B: ʔik-a-N=dja
行かないよ。

第 1 形容詞が述語になる文のばあい、述語が選択肢のフォーカスになれば、du が用いられることもあるが、du の使用が義務的ではない。次の用例では、A が B に大きいか小さいかを問う。

187) A: ʔubisa-N=nja? ʔiNkusa-N=nja?
大きいか？それとも小さいか？

B: ʔubisa-N =do:
大きいよ。

名詞述語文が選択肢疑問になるばあいは、現在の文なら du があらわれないが、過去の文なら du があらわれる。

次の 2 つの用例は、名詞述語文の選択肢疑問であるが、話題になるのは、過去のことであり、コピュラの過去形が用いられるため、du があらわれる。

188) A: ʔukja gjaːgja=wa jamatu=nu tʃuː=du ja-tti=na?
あなたたちのおじいさんは日本本土の人だったのか？
naɸa=nu tʃuː=du ja-tti=na?
沖縄の人だったのか？
B: naɸa=nu tʃuː=du ja-tta-ʃiga,
沖縄の人だったんだけど、
ʔmaː=nu ʃima=nu muni=mu dʒoːdʒi ja-tta-N
ここの島の言葉も上手だった。

次の用例は、話題になるのは、過去のことでないため、du があらわれない。弟の A が兄の B に問う。

189) A: ɸuri=wa waː muN =na? jaku=ga muN =na?
これは私のものなのか？お兄さんのものなのか？
B: ʔura=ga muN ʔanadi=na?
あなたのものじゃないか？

8.1.3 疑問詞疑問文

疑問詞疑問文は、その命題の中に話し手にとって不明な情報が含まれていることをあらわし、その不明な情報を疑問詞であらわす。疑問詞疑問文を終助詞 jo によってマークされる。動詞・第 1 形容詞の第 2 終止形に疑問詞質問助詞 jo がつく。

190) A: nuː ʃu-N=jo?
何をしているか？
B: <tʃoːdo> ʔiʃaja=gatʃi ʔik-i-nu niː ja-tta-ʃiga
ちょうど病院に行くところだったけど…

191) A: kwaːʃi=wa taːtʃi ʔaː-ʃiga ʔuduru=ga ʔmaːsa-N=jo?
お菓子は 2 つあるが、どちらがおいしい？
B: ʔuri=du ʔmaːsa-ru =jaː
こちらのほうがおいしいね。

第 2 形容詞には、コピュラなしで jo が直接述語につく。

192) A: taru=ga dʒoːdʒi=jo?
だれが上手か？
B: dʒiroː=ga=du dʒoːdʒi =doː
次郎が上手だよ。

名詞述語文が疑問詞質問文になる場合に jo が直接述語になる名詞につく。

193) A: kuNgjanimuni=wa ʔikjanjanu muni =jo?

国頭の言葉はどのような言葉か？

B: kuNgjanimuni=wa ʔmaː=nu muni=tu
国頭の言葉はここの言葉と
agarisagari>=nu tʃìgo-ti
上がり下がりが違って
midiraʃa-nu muni =doː
面白い言葉だよ。

過去のばあいは、動詞・第 1 形容詞・コピュラの-ti 中止形に jo がつく。

194) A: warabi ja-tta-ini=wa nuː=nu ʃigutu=nu
子どもだったころは何の仕事が
ʔitʃìbaN samatʃasa ʔa-tti=jo?
一番面倒くさかったのか？

B: ʔubi-tu-ra-N
覚えていない。

正名方言の疑問詞は、nuː（なに）、taru（だれ）、ʔuda(ː)（どこ）、ʔikjassa（いくら）、Nga/niga（なぜ）、ʔikja(ː)（どう）、ʔitʃi（いつ）、ʔikutai（何人）、ʔuduru（どれ・どの）、ʔikjanjanu（どのような）などがある。

nuːは、日本語の「何」にあたり、もっとも基本的な機能は、物をあらわす名詞をあらわす疑問詞である。次の用例では、妻の A が夫の B に何を飲んでいるかを問う。

195) A: nuː nu-du-N=jo?
何を飲んでいるのか？

B: midi=du nu-du-N =doː. saki ʔana-N =doː
水を飲んでいるんだよ。酒じゃないよ。

nuːが出来事をあらわすばあいもある。次の用例では、A が B に家にいなくて何があったかを問い、nuː「なに」が出来事をあらわしている。

196) A: kinju ʔukja jaː=gatʃì ʔi-dʒa-tu
昨日、あなた方の家に行ったら
taru=mu wu-radana ʔa-tta-ʃiga
誰もいなかったけど
nuː=nu ʔa-tti=jo?
何があったのか？

B: dʒikkjo=gatʃì ʔi-dʒu-ta-N
瀬利覚に行っていた。

nuːが構成要素になることもある。たとえば、nuːjaːは、時刻をあらわす疑問詞である。

197) A: taroː=wa nuːjaː=beː ki-N=jo?
太郎は何時ごろ来る？

B: dʒuːdʒi=beː kiː=mu =di
10 時ごろに来るそうだ。

複数の要素から何を選ぶかをたずねるのには、ʔuduru を用いる。

198) A: ʔirabumuni=tu naɸamuni ʔuduru=ga mutʃìkaʃa-N=jo?
沖永良部語と沖縄語、どちらが難しいか？
B: ʔirabumuni=ga=du mutʃìkaʃa-ru
沖永良部語のほうが難しい。

名詞の前につくばあい、ʔuduru が日本語の「どの」の意味になる。

199) A: ʔuduru ʃima=nu muni=nu ʔitʃìbaN mutʃìkaʃa-N=jo?
どの島の言葉が一番難しいのか？
B: masana=nu muni =dja
正名の言葉だよ。

taru「だれ」は、人のことをたずねるのに用いる。

200) A: ʔa:ni=gatʃì=wa taru=tu ʔik-i-N=jo?
赤嶺には誰と行くのか？
B: ʔaja=tu=du ʔaguʃì ʔik-i-N =doja:
おねえさんと一緒に行くよ。

ʔitʃì「いつ」は、時をたずねるのに用いる。

201) A: <ʔerabu>=gatʃì=wa ʔitʃì ki-ttʃì=jo?
沖永良部にはいつ来たのか？
B: kinju=du ki-ttʃa-ru
昨日来たんだ。

場所をたずねるには、ʔuda「どこ」を用いる。

202) A: ʔuda=kara ʔmo:-tʃì=jo?
どこからいらっしゃいましたか？
B: horo=kara=du ki-ttʃa-N =dja
畑から来たんだよ。

理由や原因をたずねるには、ʔikjaʃì「どうして」や Nga「なぜ」、または、 niga「なぜ」を用いる。

203) A: Nga ʃima=gatʃì mudui-buʃa na-N=jo?
なぜ島に戻りたくないのか？
B: <tokai>=neti kuraʃi-buʃa-N-tu=du
都会で暮らしたいから
mudui-buʃa na-N =dja
戻りたくないんだよ。

手段をたずねるばあいにもʔikjaʃì「どうやって」を用いる。

204) A: naʃemuni=wa ʔikjaʃì ʔubi-jabu-ti=jo?
奄美語はどうやって覚えましたか？

B: wa=ga naʃe=ne wu-tta-nu tuki=wa
私が奄美大島にいたときは、
naʃe=mu muːru <hoːgeN>=du ja-tta-N-tuni
奄美大島も全部方言だったから
tada ʔagu=tu hanaʃi ʃiːgatʃana ʔubi-ta-N
ただ友達と話しながら覚えた。

様態をたずねるのには、ʔikja(ː)「どう」を用いる。

205) A: <keːroːkai>=wa ʔikjaː ja-tti=jo?
敬老会はどうだったのか？
B: midiraʃa ʔa-tta-N =dojaː
面白かったよ。

疑問詞が重複形をとらえるばあいもある。これは、複数をあらわすと考えられるが、調査が不十分であるため、今後の課題にしたい。

206) A: matʃi=gatʃi=wa taN-daru=ga ʔi-dʒi=jo?
祭りには誰々が行ったか？
B: waka-ra-N. wanu=mu ʔik-a-dana ʔa-tta-N
分からない。私も行かなかった。

207) A: mjaːgi=wa <u>nuː-nuː</u> muro-ti=jo?
お土産は何々をもらったのか？
B: <okinawasoba>=tu <tʃiNsukoː>=tu <ʔoraNda>=nu
沖縄そばとちんすこうとオランダの
kwaːʃi muro-ta-N =dja
お菓子をもらったよ。

疑問詞があらわす、欠けている情報がいくつかの選択肢をあらわすばあいは、疑問詞、または、疑問詞に飾られた句にフォーカス助詞 du がつく。たとえば、次の用例では、A は、ビデオをとったのは、敬老会に手伝った人であることが知っており、その限られた人数の中で誰であったかを問うため、疑問詞に飾られた句に du がつく

208) A: <keːroːkai>=nu <bideo> muroi-buʃa-ʃiga,
敬老会のビデオを見たいけど、
<u>taː=ga=du</u> tu-tti=jo?
誰がとった？
B: taroː=ga=du tu-tta-N =dja
太郎がとったよ。

次の用例では、A が B に多くある飲み物の中から 1 つを選ばせようとして問いかける。

209) A: <biːru>, <ʃoːtʃuː>, <nihoNʃu>, <uisukiː>=nu ʔaː-ʃiga
ビール、焼酎、日本酒、ウィスキーがあるけど、
<u>nuː=du</u> num-i-N=jo?
何を飲むか？

B:　wana:　<bi:ru>
私はビール。

次の用例では、A が B に太郎と次郎という 2 人からなる選択肢から誰のほうが上手かと問う。

210)　A:　taro:=tu　dʒiro:,　taru=du　dʒo:dʒi =jo:?
太郎と次郎、誰のほうが上手か？
B:　dʒiro:=ga=du　ho:ri　dʒo:dʒi =dja
次郎のほうがずっと上手だよ。

8.1.4 確認要求の疑問

確認要求の疑問では、話し手に何らかの判断が成立しているということを前提として、聞き手にその判断を問いかけ、確認を求めるという機能を持っているものである（日本語記述文法研究会 2003：38）。沖永良部語正名方言では、確認要求の疑問文をあらわす主要な形式は、sa と-raja:と do:とʔanadina である。

sa は、動詞・形容詞の第 2 終止形につく。話し手の意志、意見、評価を伝える終助詞 sa と似ているが、確認要求のマーカーsa は、名詞述語文と第 2 形容詞が述語になる文において直接述語につくのに対し、評価を伝える終助詞 sa は、コピュラにつく。

211)　ʔanu tʃu:=wa　ʔutu =sa?
あの人は弟だろう？

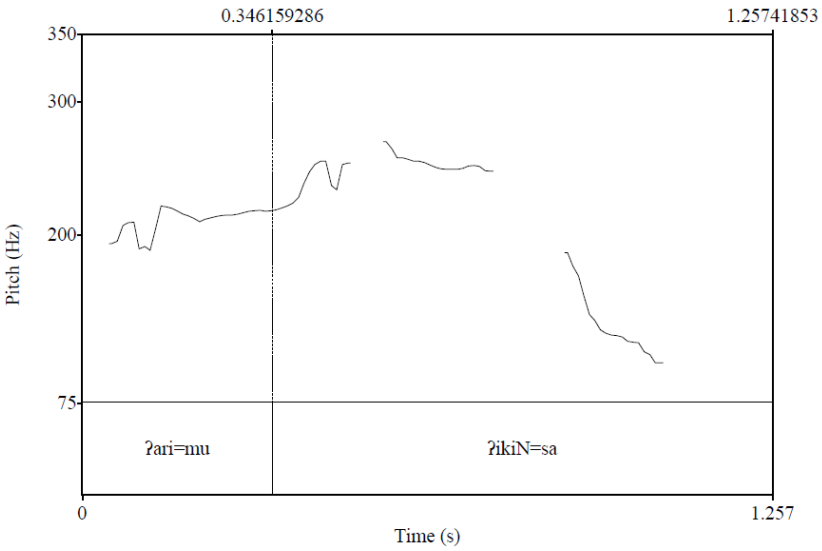
212)　ʔanu　tʃu:=wa　ʔutu:　ja-N=sa
あの人は弟さ。

213)　ʔari=mu　dʒo:dʒi =sa?
彼も上手だろう?

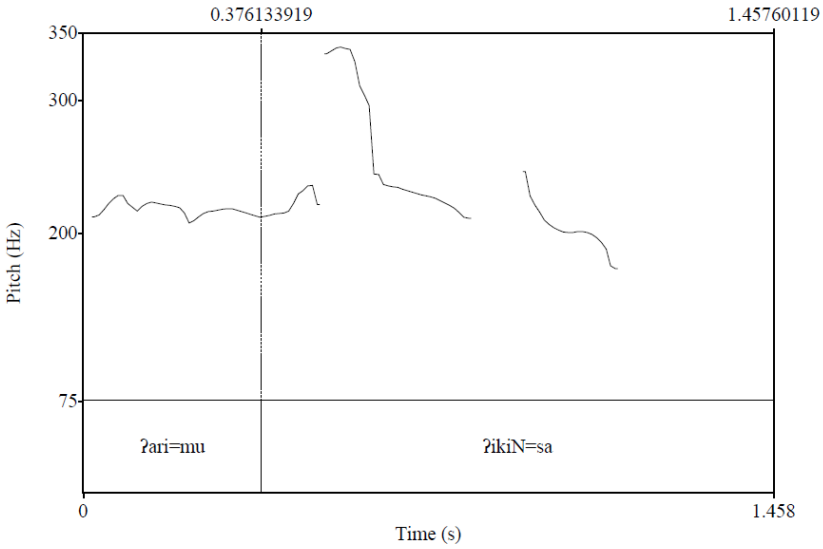
214)　ʔari=mu　dʒo:dʒi　ja-N=sa
彼も上手さ。

疑問助詞 sa による文は、イントネーションも終助詞 sa による文とことなる。次の図のとおりである。

2.　話し手の評価をあらわす終助詞による文のイントネーション



3. 疑問助詞 sa による文のイントネーション



上の図でしめしているように、疑問助詞の sa がつくばあいは、ʔikiN の語頭に山があり、それから音調がさがり、sa のところでまた少しあがってからさがる。

sa による疑問文は、yes/no で答えることができる肯否疑問であるが、話し手は、聞き手が肯定的に答えると予想し問いかける。ニュアンス的に日本語の「だろう？」と似ている。八重山語石垣方言に非常に似ている sa のもちい方がある（宮良信詳 1995：62）。

次の用例では、A は、B が明日も家にいるだろうと考えているため、sa による確認要求の疑問文で B に問いかける。A には、何らかの根拠があって B が家にいるだろうと思った上での問いかけである。A は、B が家にいるかどうか分からないばあいは、sa の使用が不自然であり、肯否質問助詞 nja の質問が正しいとされる。

215) A: ʔui=wa na:tʃa=mu ja:=ne ʔmeN=sa?
あなた様は明日も家にいらっしゃるでしょう？
B: ʔiN, wu-N =do:

うん、いるよ。

次の用例では、A は、B にとって A の提案でよいだろうと思っているが、確認として問いかける。

216) A: ʔuri=ʃi jukkwa-N=sa?
それでいいだろう？
B: jukkwa-N =doː
いいよ

過去のことをたずねるばあいは、-ti 中止形ではなく、-ta-過去形の第 2 終止形につく。次の用例では、A さんは、B さんが元気にしていたことを予想し、その確認を求めて問いかける。話者の内省によると、聞き手が元気そうにない場合には、次のような sa の使用が失礼に当たるそうである。

217) A: dukusa ʃuː-jabu-ta-N=sa?
元気にしていたでしょうか？
B: ʔiN, dukusa ʔa-tta-N =doː
うん、元気だったよ。

否定形の場合も直接第 2 終止形につく。次の用例では、A は、B が大丈夫であることを予想し、その確認を求めて問いかける。話者によれば、聞き手が大丈夫そうにないばあいには、sa を使うことに違和感がある。

218) A: ʔikjaː=mu na-N=sa?
大丈夫だろう？（どうもないだろう？）
B: ʔiN, ʔikjaː=mu na-N
うん、大丈夫だ。

次の用例では、B は、A と一緒に行く「友達」がカノジョであろうと思い、本当にそうかどうかの確認をとる。

219) A: ʔagu=tu madʒini <guamu>=gatʃi
友達と一緒にグアムへ
ʔik-i-N-koi na-tta-mu =djo
行くことになったよ。
B: ʔagu =di ʔiː-ʃi=wa <kanodʒo> =sa?
友達というのは彼女だろう？
A: gaN =dja
そうだよ。

次の用例では、A が B に意見を聞き、B がその意見を述べると、A は、B が自分と同じ意見をもっていることがわかる。そのうえで A が B に gaN=sa?「そうだろう？」で確認する。

220) A: ʃiNse=ga ha-ttʃa-nu ʃumutʃi
先生が書いた本

ju-di　　mi-ttʃi=na?
読んでみたか？
B:　ju-di　　mi-ttʃa-ʃiga
読んでみたけど
A:　ʔikja　ʔumui=jo?
どう思う？
B:　ʔaNmai　　<naijo:>　　na:-mu　　ʔana-dja?
あまり内容がないのではないか？
A:　gaN=sa?　　<naijo:>　　na-N=sa?
そうだろう？内容がないだろう？
wanu=mu　　gaN　ʔumu-ta-N=gi=jo:
私もそう思ったのだよ。

次の用例では、B が以前にその翌日にも時間あるから調査しても良いということを A に話したことがあって、A が確認として改めて B に問う。以前に話したことがないばあいには、sa による問いが押しつけがましいとされ、nja/na による聞き方のほうがふさわしい。

221)　A:　jukkwa-rja　　na:tʃa=mu　　ʃimamuni
良かったら、明日も島言葉を
naro-tʃi　　muroi-buʃa　　ʔa-jabu-ʃiga
教えてもらいたいですが、
na:tʃa　<dʒikaN>　　ʔa-jabu-N =sa?
明日、時間ありますか？
B:　ʔiN,　jukkwa-N =doja:
うん、いいよ。

次の用例では、A は、B が冬瓜を盗んだと思い、とがめるように確認をとる。犯人が B であるという根拠がなければ、このような言い方は、しない。

222)　A:　wa=ga　ho:-ta-nu　　ʃubui　tu-tta-ʃi=wa　　ʔura =sa?
私が買った冬瓜をとったのは、あなただろう？
B:　ʔana-N,　　ʔana-N!
違う、違う！

次の用例では、A が B の弟が日本本土にいることは、知っているが、どこか分からず、鹿児島にいるかを問うたところで B が否定的に回答する。そこで A が少々混乱して B に弟がいるのが日本本土かを確認したところで B がその弟が神戸にいるという。

223)　A:　ʔukja　　ʔutu=wa　　jamatu=ne...
あなたたちの弟は、日本本土に…
<kagoʃima>=ne=du　　wu-N=nja?
鹿児島にいるのか？
B:　ʔai...
いや…
A:　ʔe?　　jamatu =sa?
え？日本本土だろう？
B:　ʔiN,　<ko:be>

うん、神戸。

確認要求に用いられる接辞-raは、フォーカス助詞gaと共起するばあいに疑いをあらわすために用いられるが、確認要求に用いるばあいは、フォーカス助詞gaがあらわれないし、終助詞ja:がかならずつく。-raja:による確認要求の疑問は、聞き手が当然認めるものであると考えられることを確認する言い方である。

動詞・第1形容詞につく接辞-raは、かつては、推量をあらわせる形態素であったと考えられる。かりまた・島袋（2007：6）では、沖縄語諸方言の-ra形を「推量の形」とよぶ。かりまた・島袋は、日本語の「だろう」を述語にもつ文が「おしはかり」から「念おし」（＝確認要求）へと移行することが、沖縄語安慶名方言と今帰仁村謝名方言でも-raが用いられる「念押したずね形」と-ra形をとらえるkuse:推量形[14]に相関関係があることと似ていることを指摘している。沖永良部語正名方言には、kuse:推量形が存在しないが、-raja:確認要求形と疑いをあらわす-ga…-ra構造で同じ-ra形が用いられることから、-ra形の本来の意味が推量であったと充分考えられる。

話者の内省によれば、-raja:の使用は、saとほとんど同じであるが、saよりも話し手の考えを押し付けようとする機能が強く感じられるため、-raja:は、-saよりぞんざいな言い方とされて使用されにくくなってきているため、saのほうが使用される。80代以下の話者の中では、-raja:の使用がほとんど衰退しており、聞いたこともない話者もいる。

次の用例は、Aは、Bが当然パン食べると予想し、その確認をとるために問う。

224) A: ʔura=wa <paN> kam-i-ra =ja:?
あなたはパンを食べるだろう？
B: ʔiN, kam-i-N =do:
うん、食べるよ。

次の用例は、AがBには当然時間があると思って問いかける。時間があるという根拠がなければ、このようなばあいには、-raja:が用いられない。

225) A: na:tʃa <dʒikaN> ʔa:-ra =ja:?
明日時間あるよね？
B: ʔiN
うん。

次の用例は、夫婦同士の会話である。夫のAが当然食べてよいと思って妻のBに問いかける。このようなばあいには、聞き手が目下でないと、-raja:を用いにくい。

226) A: ʔama, wanu=mu ka-di ʃim-i-ra =ja:?
お母さん（妻のこと）、俺も食べていいよな？
B: ʔuda:da kami =jo:

[14] 今帰仁村謝名方言のkuse:推量形においては、推量のフォーカスとなる構成素がフォーカス助詞kuse:によってマークされ、述語が-ra形をとらえる、「おしはかり」をあらわす構造である。例：kinu:=kuse: nuda:ra「昨日飲んだんだろう(飲んだのは昨日だろう)」（用例は、かりまた・島袋2007から）

どうぞ食べてよ。

上にも述べたが、述語が-ra をとらえた文において ga がフォーカス助詞として用いられるばあいは、確認要求というより疑いという意味になるが、-raja:による確認要求の疑問文にフォーカス化がおこるばあいは、フォーカス助詞として du が用いられる。次の用例では、息子の A が大切にしてきた日本酒がなくなったことに気づき、父親の B の顔が赤いのを見た上での会話である。

227) A: ʔatʃa=ga=du wa: saki nu-da-ra =ja:?!
お父さんがおれの酒を飲んだだろう？！
B: ʔabe! ʔura saki=du ja-tti=na?
あらまー！お前の酒だったのか？

終助詞 do:は、基本的に話し手の推量をあらわすが、対話的な用法の 1 つとして話し手の推量を聞き手に確認する用法でも用いられる。do:は、動詞と第 1 形容詞の第 2 終止形につくが、名詞述語文と第 2 形容詞が述語になる文においては、直接名詞か第 2 形容詞につく。

228) ʔari=wa ɸuneda=mu ki-ttʃu-ta-N=do:?
彼は此間も来ていただろう？

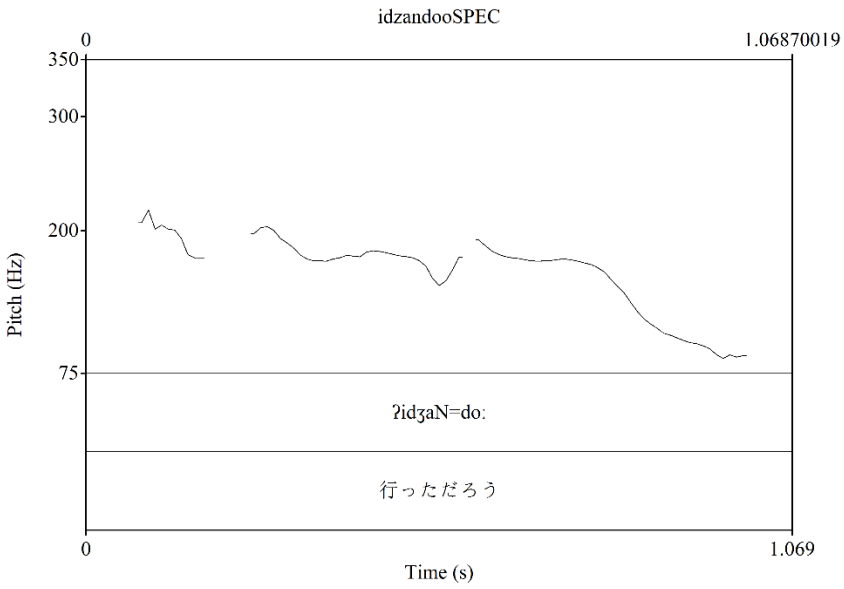
229) hju:=wa ʔuɸutʃikanu=neti ʃi:mu jukkwa-N=do:?
今日は大津勘でやってもいいだろう？

230) ʔaNta kwaNkja=mu wudui=nu dʒo:dʒi=do:?
彼らの子どもたちも踊りが上手だろう？

確認要求でも用いられる do:は、終助詞 do:とことなるのは、イントネーションである。前者は、下降イントネーションで発音されるが、後者は、平坦なイントネーションで発音される。次の図でしめすように、推量助詞 do:のばあいは、mu とʔikiN の語頭に高い山がある。

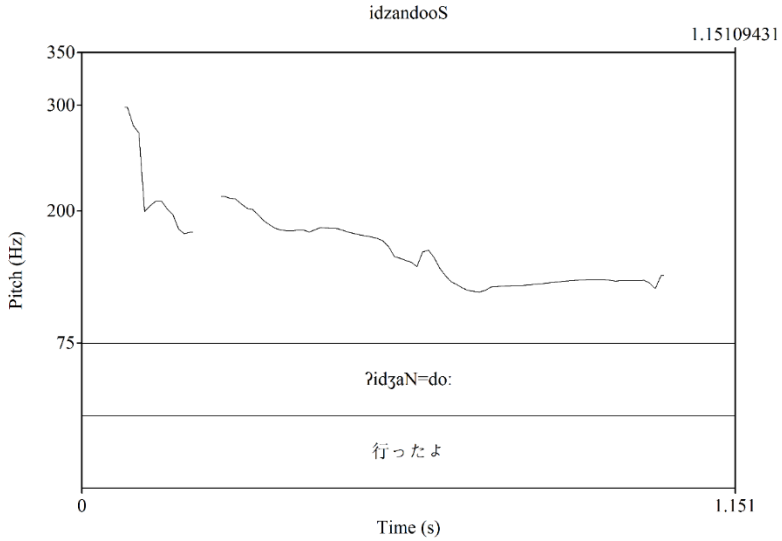
231) ʔari=mu ʔidʒa-N =do:?
彼も行くだろう？

4. 推量助詞 do:による文のイントネーション



232)　ʔari=mu ʔidʒa-N =do:
　　彼も行くよ。

5.　終助詞 do:による文のイントネーション



do:が後述した sa と-raja:と決定的にことなるのは、話し手の認識の不確かさである。それは、do:の確認要求の用法が、話し手が既知の事柄をもとにして未知のことについて見当をつける推量をあらわす do:の基本的な用法から、派生したためである。

次の用例では、A が太郎のおじいさんの話をして、そのおじいさんがしばらく体調をくずしていたことを知っている B がおじいさんがまた元気になったかを聞いて、A がそれを肯定する。B は、おじいさんがまた元気になったため、今も仕事に行っていると推量し、それを A に確認する。

233)　A:　taro:=ga　　gja:ga=ga
　　太郎のおじいさんが
　　<ke:ro:kai>=neti　　hanaʃi　ʃa-N

敬老会で話しをした。

B: gaN=na? mata <geNki>=ni na-tti=na?
そうか？また元気になったの？

A: ʔiN
うん。

B: nama=mu ʃigutu ʔi-dʒu-N=do?
今も仕事に行っているだろう？

A: ʔiN. <daigeNki>=do:
うん。大元気だよ。

do:の確認用法に属するもう 1 つの用法として次の用例にあらわれるような「聞き手への配慮」がある。A は、B が妻の父親が区長をしているのを知らないと推量し、do:による疑問文でその確認をとる。このようなばあいに、sa か-raja:を用いれば、話し手の判断が成り立っており、認識が確かであるというニュアンスが入るため、話し手の判断を聞き手に押し付けるような強い言い方になる。do:を用いれば、話し手の認識が不確かであることで、聞き手に対する'押し付けがましさ'がなくなる。

234) A: tudʒi=nu ʔuja=nu ja:=gatʃi ʔi-dʒi...
妻の親の家に行って…

B: gaN=na? ʔuja nama dukusa ʃi: ʔme-N=nja?
そうなの？親、今元気にしていらっしゃるか？

A: ʔiN. nama <kutʃo:> ʃu-N =dja
うん。今区長をやっている。

B: ʔe:? ʔatʃa =na?
え？お父さん？

A: ʔiN. ʔatena-N=do:?
うん。知らないだろう？

B: ʔatena-N
知らない。

もう 1 つの確認要求の疑問として用いられる形式は、日本語の「ではないか」に相当するʔanadina である。これは、コピュラの否定形ʔanamu「でない」の-di 否定中止形-di に肯否疑問助詞 na がついた形である。確認要求の使用においてʔanadi と na がʔanadja のように融合することが多い。

ʔanadina は、テンスとアスペクトに関係なく、動詞・第 1 形容詞の第 1 終止形につくが、名詞か第 2 形容詞が述語になる文のばあいは、非過去形では、その述語になる名詞か第 2 形容詞に直接つくが、過去形では、コピュラの過去形の第 1 終止形 jattamu につく。

235) mudu-ra-mu ʔana-di=na?
もどらないんじゃいないか？

236) mudu-tu-mu ʔana-di=na?
もどっているんじゃないか？

237) mutʃikaʃa-mu ʔana-di=na?
難しいんじゃないか？

238) mutʃikaʃa ʔa-tta-mu ʔana-di=na?
難しかったんじゃないか？

239) dʒoːdʒi ʔana-di=na?
上手じゃないか？

240) dʒoːdʒi ja-tta-mu ʔana-di=na
上手だったんじゃない

241) naɸatʃu ʔana-di=na
沖縄の人じゃないか？

242) naɸatʃu ja-tta-mu ʔana-di=na
沖縄の人だったんじゃないか？

ʔanadina の用法は、大きく 2 つにわけることができる。①話し手と聞き手が両者知っていることや一般的な知識、伝聞に基づく知識を話の話題にしたり、または、聞き手が忘れていることを思い出させたりする用法と、②話し手が聞き手の知っているはずのことを聞き手に気づかせる用法がある。

次の用例は、用法①の用例であり、A が B がこの間沖永良部に来ていたことを知って、それを話の話題としてあげようとしている。

243) A: ʔura=wa ɸuneda=mu ʃima=gatʃi
あなたがこの間も島に
ki-ttʃu-ta-mu ʔana-dja?
来ていたんじゃないか？
B: gaN, gaN
そう、そう。
A: <jomehaN>=ga ʔuja ʔoi-ga=du ki-ttʃi=na?
お嫁さんの両親に会いに来たのか？

次の用例も用法①をしめすが、A が B に道を聞いて、B が公民館を目印にして説明しようとしているが、A も公民館の場所が分かるかどうかを確認する。

244) A: taroː=ga jaː=gatʃi ɸuː =di gaij-a-tta-ʃiga,
太郎の家に来いと言われたけど、
taroː=ga jaː=wa ʔuda =jo?
太郎の家はどこなのか？

B: ʔuri=wa =joː, ʔama=ne <koːmiNkaN>=nu
それわね、あそこに公民館が
ʔaː-mu ʔana-di=na?

あるんじゃないか？

A: ʔi:

うん。

B: ʔunu <sugu> ʔuʃu =dja

そのすぐ後ろだよ。

次の用例は、用法②をしめす。A が B に怒って、車を洗うように何回も言ったことが B も知っているはずなのを B に気づかせようとしている。

245) A: ʔura Nga <kuruma> ʔaro-ra-no:?!

あなたなぜ車を洗わないのか?

ʔikukoi=mu ʔaro-ri =di gai-tʃa-mu ʔana-dja?!

何回も洗えと言ったじゃないか？！

B: haNmaraʃa!

うるさい！

8.1.5 疑いの疑問文

疑いの疑問文は、話し手にとっては、不明な情報があるだけをあらわすものであり、聞き手に問いかける機能をもたない（日本語記述文法研究会 2003：35）。疑いの疑問文には、独話的な用法と対話的な用法がある。疑いの疑問文は、本来的には、聞き手へ問いかける機能をもたないため、独話的な用法が基本であり、対話的な用法が派生的である。宮崎 et al.（2002）によると、独話的な用法は、「［疑いの疑問文の］基本的性質から、〈疑い〉の文は聞き手に対する伝達性を含まず、聞き手が存在しない状況や心内発話のような独話的な環境で使われるのが一般的であると考えられる」とのことである。このような用法としては、〈判断不明〉、〈思考過程〉、〈疑念〉の 3 つがある。

〈判断不明〉というのは、その命題が本当か否かや、選択、または、補充すべき値に対して、話し手がまったく見当がつかないということをあらわすものである。〈思考過程〉というのは、判断を形成することができないという点は、〈判断不明〉と似ているが、話し手が判断形成へ向けてありうる可能性を検討して努力していることをあらわす疑いの文である。〈疑念〉というのは、話し手がその命題が成り立つことを否定的に思うこと、あるいは不信に思うことをあらわすものである。

上に述べたように、疑いの疑問は、疑問の機能を成り立たせる 2 つの特徴のうち、その命題の判断が成り立たないという特徴のみをもつ。つまり、疑いの疑問の特徴は、聞き手に対して問いかける機能をもたず、判断が成り立たないまま文として発話することであるため、独話的な機能が基本である。しかし、独話や心内発話という環境のみで用いられるわけではなく、対話的な機能もある。対話的な用法としては、疑いの疑問文の独話的な性質を利用して、聞き手に応答を強制しない、聞き手が答えを知っているかどうか分からない状況に用いられる質問である。そのような機能については、下に疑いの疑問のさまざまな形式を記述しているところで改めて言及する。

沖永良部語正名方言の疑いの疑問文をあらわすマーカーが 4 つある。

① kaja:
② 疑問詞+…-ru

③ ga+…-ra
④ gara

kaja:の由来は、疑問のマーカーka に終助詞の ja:がついたものであると考えられる。ka だけでは、疑問文にならないが、同じ北琉球語群に属している沖縄島国頭村奥の方言では、疑いの疑問のマーカーとして存在するため[15]、かつて沖永良部語にも疑問のマーカーka があったとは、充分考えられるが、日本語の疑問文のマーカーka が借用されたとも考えられる。次の用例で示すように現在沖永良部語正名方言で kaja:には、さらに ja:を後接することができるということから共時的には、kaja:が 1 つの疑問のマーカーとして分析して良いことが分かる。

246) A: saNʃìru hadʒimeti naro-ta-nu tuki=wa ʔikutʃi jabu-ti=jo?
三味線をはじめて習ったときは何才でしたか？
B: ʔikutʃi=be: =kaja:=ja:?
何才ぐらいかな？

kaja:にマークされる文にフォーカス化がおこるばあいに、平山輝男（1986：893）は、沖永良部瀬利覚の方言では、疑いの疑問文のフォーカスマーカーga も用いられると報告しているが、沖永良部語正名方言では、ga は、kaja:と共起せず、du が用いられる。

247) na:tʃa ʔagu=nu ki:-ʃìga, du:tʃui=ʃì=du ki-N=kaja:?
明日、友達が来るけど、独りで来るのかな？

kaja:は、すべての品詞につくことができる。動詞・第 1 形容詞につくばあい、第 2 終止形にも、旧連体形にもつく。第 2 終止形につくか旧連体形につくかによって意味は、かわらないが、旧連体形につくばあいは、疑いのみならず、話し手の意志の未決定をあらわすことが多い。この用法は、「意志の疑問文」に属する。

kaja:にマークされる疑いの疑問文には、判断不明、思考過程、疑念という独話的な用法もあれば、聞き手に応答を強制しない、聞き手が答えを知っているかどうか分かなくても問いかけてみる用法もある。

判断不明の用法は、話し手がその命題が本当かどうか分からないことや、情報が欠けていることで、判断がつかないことを表明する。判断不明の疑いの疑問文には、疑問詞がよくあらわれる。次の用例は、判断不明の用法としての疑いの疑問文の使用を示す。

248) ʔaja=wa nama ki-ttʃu-ra-N =ja:. ʔikja ʃa-N=kaja:?
姉はまだ来ていないね。どうしたのかな？

249) <taro:>=wa ʃìNse=tu <puratoN>=ga <tetsugaku>nu
太郎は先生とプラトンの哲学の
hanaʃì ʃu:-ta-ʃìga,
話をしていたけど

[15] 沖縄島国頭村奥の方言のʔaN=ja ʔijaN =ka?「そうは言わないのだろうか」では、ka は、話し手に判断が成り立たないということをあらわす。

ʃima　ʔidʒi-ta-nu　kutu=nu　naː-nu　tʃuː
島を出たことのない人
ʔikjaʃi　gaNnjanu　kutu　atea-N =kajaː?
どうしてそんなことを知っているんだろう？

250)　ʔuda=mu　ɸui=mu　mi-ttʃa-ʃiga,
どこもかも見たけど、
waː　hama=wa　ʔuda=ne　ʔa-N =kajaː?
私の鎌はどこにあるんだろう？

思考過程の用法は、疑問の解消に向けてありうる可能性を検討していることをあらわすものである（日本語記述文法研究会 2003：36）。

251)　wudʒa=wa　jaː=ne　wu-ra-N =jaː.　hatte=gatʃi=du　ʔmoː-tʃu-N =kajaː?
おじさんは家にいないね。畑にいらしているのかな？

252)　ʔari=wa　ʃima=nu　tʃuː ʔana-N.　naʃe=nu　tʃuː =kajaː?
彼は島（＝沖永良部）の人ではない。名瀬（＝奄美大島）の人かな？

kajaːには、疑念の用法もある。疑念というのは、実際にどうなのかが分からないが、その命題に対してありのままや言われたままを不審に思うことをあらわす。

253)　ʔami=nu　ɸu-i-mu =di　gai-tʃu-ta-ʃiga,　ʔami　ɸu-i-Ø =kajaː?
雨が降ると言っていたけど、雨、降るのかな？

kajaːは、独話的な用法が基本でありながら、対話的な用法もある。疑いの疑問文の独話的な用法は、その命題に対して判断が未成立であるが、聞き手に問いかけないのに対し、対話的な用法は、その命題に対して判断が未成立であり、聞き手に問いかけるため、疑問文たらしめる 2 つの特徴を両方もつということになる。日本語標準語でその 2 つの特徴をもっても、疑いの疑問文をあらわす形式を用いるのは、宮崎 et al.（2002：188）がいう〈応答を強制しない質問〉と〈聞き手への配慮を表す質問〉という用法の 2 つである。

通常の疑問文は、聞き手が話し手の疑問に答えることができると想定し、問いかけることによって応答を強制する機能をもっているのに対し、〈応答を強制しない質問〉の疑いの疑問文による質問においては、聞き手が話し手の疑問に答えることができるという想定が成り立たないことが応答を強制しない機能を可能にする。

次の用例は、kajaːによる〈応答を強制しない質問〉の用法を示す。質問の対象となる田皆の区長が第三者であるため、新年会に来るかどうかは、B が知っているという想定が A に成り立たちにくいため、nja より kajaːが用いられる。

254)　A:　<ʃiNneNkai>=gatʃi=wa　tanja=nu　<kutʃoːsaN>=mu　ki-N=kajaː?
新年会には田皆の区長さんも来るかな？
B:　tabuN　kiː-mu =di　ʔumi-N =doː
たぶん来ると思うよ。

宮崎 et al.（2002：188）のもう 1 つの疑いの疑問文の対話的な用法の〈聞き手への配慮を表す質問〉は、正名方言にない。

旧連体形＋kaja:の使用範囲は、第 2 終止形＋kaja:のそれに重なっているが、前者は、話し手が自分の行為に迷っているニュアンスで用いられることが多い。

255) ʔitʃi muduru =kaja:?
いつ戻ろうかな？

256) <ke:ki> tʃukuru =kaja:?
ケーキを作ろうかな？

旧連体形＋kaja:に人称制限があるわけではない。疑いの疑問文の独和的な用法の中で〈疑念〉という用法に偏りがあるようである。

257) kjaku=nu ki-N-tu, <ke:ki> tʃuku-ti ʔa:-ʃiga,
客が来るから、ケーキを作っているけど、
ʔuri=gassa=ʃi jukkwaru =kaja:?
それだけで良いのかな？

258) hju: ʔami=nu ɸu-i-mu =di gai-tʃu-ta-ʃiga,
今日雨が降ると言っていたけど、
kumu=mu na:di, ʔami ɸuru =kaja:?
雲はないし、雨降るかな？

259) A: <peN> ʔa-N=nja?
ペンあるか？
B: ʔaru =kaja:? ʔa-tta-ʃiga hakk-ar-a-N-koi na-tta-N-tu
あるのかな？あったけど、書けなくなったから、
ɸuneda ɸunagi-ti ʃimo-ta-ʃiga…
この間捨ててしまったけど…

疑いの疑問文の対話的な用法である〈聞き手に応答を強制しない質問〉においては、旧連体形＋kaja:がほとんど用いられない。

疑問詞が動詞の-ru 強調形と共起するばあい、当惑して自分がどのような行為をとれば良いか分からないニュアンスで用いられる。人称は、1 人称に制限し、疑問詞疑問文にしか用いられず、判断不明という独話的な用法でしか用いられない。終助詞の djo:と jo:とよく共起する。

260) <ɸusaku> na-tti kam-i-ʃi=ga na-N-koi na-tta-mu =djo:!
不作になって食べるのがなくなったな！
nu: kam-i-ru =djo:?!
何を食べるのか？！

261) ja:=mu jakk-a-tti, ʃima=kara=mu ʔidʒi-rar-adi…
家も焼かれて、島からも出られないし…

ʔuda=gatʃì　　ʔik-i-ru =djoː?!
どこに行くのか？！

特記すべき点としては、沖永良部島で決まり文句として広く知られているʔikja=ga ʃi-ru =djoː!「どうしよう！」がある。

262)　ʔikkjadjoː!　　ʔikja=ga　　ʃi-ru =djoː?!
きゃーっ！どうしようかな？！

これには、フォーカス助詞 ga が疑問詞につき、-ru 強調形と共起する。奄美語名瀬方言（三石 1993：129）と奄美語湯湾方言（Niinaga 2014：511）においても、フォーカス助詞 ga と-ru 強調形が共起する構造が生産的におこるが、疑問詞質問として用いられる。それに対して、現在沖永良部語諸方言においては、このような構造は、判断不明や当惑をあらわす疑いの疑問として用いられる。

263)　ʔuda=gatʃi=ga　　ʔik-i-ru =djoː?!
どこに行こうかな？！

疑問詞と-ru 形が共起する疑いの疑問文において疑問詞にフォーカス助詞 du がつくばあいもある。疑問詞にフォーカス助詞 ga がつくのと、何もつかないのとことなるのは、du がつくばあいは、いくつかの選択肢があるがどれにするかに迷うというニュアンスで用いられることである。

次の用例では、A と B が踊りの練習の場所を決めようとする。選択肢としては、正名の公民館と知名町の劇場である『あしびの里』という 2 つがあるが、公民館が暑すぎることとあしびの里が高いことでどちらにするかが困難である。

264)　A:　wudui=nu　<reNʃuː>=wa　ʔuda=neti ʃi-N=jo?
踊りの練習はどこでするのか？
B:　<koːmiNkaN>=tu　ʔaʃibinusato=nu　ʔaː-ʃiga,
公民館とあしびの里があるけど
<koːmiNkaN>=wa　tʃiko-timu　jukkwa-ʃiga,
公民館は使ってもいいけど
nama　ʔutturuʃa　ʔatʃisa-N=gi=joː
今とても暑いのよ。
jaː-ʃiga　ʔaʃibinusato=neti　ʃi-N-tara
しかし、あしびの里でするなら
haro-raN-nja　na-ra-N.
払わなければならない。
gaNʃi-N-tu　ʔuduru=ga=du　jukkwa-N=gara　waka-ra-N=djaː
だから、どちらがいいか分からないのよ。
B:　ʔikkjadjoː!　ʔuda=neti=du　ʃiː-ru =djoː?!
きゃーっ！どこでやろうかな？

上に述べたように動詞・第 1 形容詞の-ra 形は、終助詞 jaːに後接されるばあい、確認要求の疑問文のマーカーとしても用いられるが、そのようなばあいは、述語が-ra 形をとらえた

疑いの疑問文専用のフォーカス助詞 ga があらわれることがないし、逆に ga があれば、疑いの疑問文としてしか捉えられない。

この ga…-ra 構造には、3 つの機能・用法がある。①一番基本的な用法は、疑いの疑問文としての用法である。②埋め込み疑問文としての用法である。③因果関係の不確定を提示する原因・理由節としての用法である。このセクションでは、①のみを検討する。

ga は、述語が-ra 形をとらえた文において疑問のフォーカスがどこにあるかをあらわす点では、使用が du と似ている。次の用例は、同じセンテンスであるが、ga によってフォーカス化される句がことなる。フォーカスの対象になる句が太字になっている。

265) **taroː=ga**=ga jaː=neti ʃìʃì kam-i-ra?
太郎が家で肉を食べるのだろうか？

266) taroː=ga **jaː=neti**=ga ʃìʃì kam-i-ra?
太郎が**家で**肉を食べるのかな

267) taroː=ga jaː=neti **ʃìʃi**=ga kam-i-ra?
太郎が家で**肉を**食べるのかな

述語が-ra 形をとらえた文のフォーカス助詞 ga の使用と、それ以外の疑問文のフォーカス助詞 du の使用とは、相違点が 2 つある。①-ra 形をとらえた述語の疑いの疑問文に疑問詞があるばあいは、その疑問詞が補充している欠けている情報が疑問の対象となるため、ga がかならず疑問詞につく。

268) taː=ga=ga kiː-ra?
誰が来るのだろうか？

269) kwaːʃi=wa nuː=nu=ga ʔmaːsa-ra?
お菓子は何がおいしいのだろうか？

270) ʔari=wa ʔikjaʃi=ga gaNʃi ʃimamuni dʒoːdʒi ja-ra?
彼はなぜそんなに島の言葉が上手なのだろうか？

271) taː=ga=ga <haNniN> ja-ra?
誰が犯人なのだろうか？

272) ʔikjaʃi=ga ɸuː-ra?
どうして来ないのだろうか？

「誰が何を持ってくるのだろう」のような疑問詞が 2 つあらわれる文においては、両方の疑問詞に ga がつく。

273) taː=ga=ga nuː=ga mu-ttʃi kiː-ra?
だれが何を持ってくるんだろう？

274) ʔatʃa=wa ʔuda=neti=ga nuː=ga ʃuː-ra?

お父さんはどこで何をしているのだろう？

②文全体が疑問の対象になっても、ga が述語につく。動詞述語文のばあいは、動詞がいわゆる連用形によって名詞化し、ʃiːmu「する」がテンスを担うようになる。

275) wa=ga gai-tʃa-ʃi wakai=ga ʃaː-ra?
私が言ったのを分かったのかな？

du も同じように連用形につくが、そのようなばあいは、文全体ではなく、動作が取り立てるような重いフォーカスを受ける。次の用例は、ga と du のフォーカスのスコープの違いを示す。ga が述語になる動詞ʔikkiN「炒める」につくばあいは、a のような文全体が疑問の対象となる解釈も、b のような、「炒める」という動作のみが疑問の対象となる解釈も可能である。du が述語になる動詞につくばあいは、「炒める」という動作のみが疑問の対象となる解釈しか考えられない。

276) I. ʔama=ga toːgura=neti ʔumu ʔikki=ga ʃiː-ra?
a.**お母さんが 台所で芋を炒める**のだろうか？
b.お母さんが台所で芋を（煮るんじゃなくて）**炒める**のだろうか？
II. ʔama=ga toːgura=neti ʔumu ʔikki=du ʃi-N=kajaː?
お母さんが台所で芋を（煮るんじゃなくて）**炒める**のかな？

述語動詞がシテオルに相当する-tumu 継続形か、シテアルに相当する-ti ʔaːmu 結果形をとらえ、動作がフォーカスの対象になるばあいは、-ti 中止形に ga がつき、助動詞が-ra 形をとらえるが、文全体がフォーカスの対象になれば、継続形の場合は、融合形式-tumu がいわゆる連用形をとらえ、-tui に ga がつき、ʃiːmu「する」がテンスマーキングを担うようになり、結果形のばあいは、助動詞ʔaːmu「ある」がいわゆる連用形をとらえ、ʔai に ga がつき、ʃiːmu「する」がテンスマーキングを担うようになる。

277) I. ʃigutu ʃi-ra-N-gane nibu-ti=ga wuː-ra?
仕事をしないで、**寝ている**のかな？
II. juː nibu-tui=ga ʃiː-ra?
よく寝ているのかな？

278) I. ʔunu hanaʃi=wa tʃukuti=ga ʔaː-ra?
その話は、**作った**のかな？
279) II. hjuː=nu ʃuːki=wa naː tʃuku-ti ʔai=ga ʃiː-ra?
今日のご馳走はもう作っているのかな？

否定形をとらえた述語が ga によってフォーカス化されるばあい、否定中止形-adana/-radana 形に ga がつき、無生物の存在動詞ʔaːmu「ある」によってテンスが表現される。

280) kam-adana=ga ʔaː-ra?
食べないのかな？

281) kam-adana=ga ʔa-tta-ra?

食べなかったのかな？

この言い方は、高年層の話者にしか認められず、衰退しつつあるようである。もっと若い話者は、否定形の疑いの疑問形として kamadana=ga ʔaːra より kamaN=kajaː と kamaN=gara のほうをよく用いるようである。

フォーカスの対象になる述語が第 1 形容詞であるばあい、形容詞の-sa/-ʃa 連用語幹に ga がつき、テンスが無生物の存在動詞によってあらわされる。

282) ɸumi=wa taːsa=ga ʔaː-ra?
米は**高い**のだろうか？

283) ʔui-ʃi=wa nissa=ga ʔa-tta-ra?
起きるのは**遅かった**のだろうか？

第 1 形容詞の原形とされる-samu/-ʃamu 形が-sa/-ʃa 連用語幹と無生物の存在動詞ʔaːmu 「ある」の縮約形であることが分かっている。ところが、正名方言では、-sa/-ʃa 連用語幹と無生物の存在動詞が縮約形になることが義務的ではないため、フォーカスの対象になる述語になる第 1 形容詞が縮約せず、ʔaːmu の連用形ʔai が ga をとり、テンスが ʃiːmu「する」によってあらわされることもある。

284) ɸumi=wa taːsa ʔai=ga ʃiː-ra?
米は**高い**のだろうか？

話者の内省によると、ga…-ra 構造による疑いの疑問文は、独話的な用法に限られているわけではないが、対話的な用法としての使用が少ない。なお、独話的な用法においても終助詞がつかなければ、心内発話のような響きがあり、会話の中では、終助詞の jaː、joː、djoːに後接されることが多い。

次の用例は、判断不明の用法を示す。

285) ʔaja=wa ʔumu ʔagassa=du mu-ttʃi
お姉さんは芋をあんなにたくさん持って
ʔuda=gatʃi=ga ʔik-i-ra =jaː?
どこに行くんだろうね？

286) wugi=nu muːru hadifuki=ni ʃi-ra-tti
砂糖きびがみな台風にやられて
ʔikja ʃi-rja=ga jukkwa-ra =joː?
どうすればいいんだろうな？

287) naɸa=gatʃi ʔumaga soː-ti ʔik-ʃi=wa taːsa=ga ʔaː-ra =jaː?
沖縄に孫を連れて行くのは高いのかな？

288) ʔaʃi=ga tuʃi=wa ʔikutʃi=ga ja-ra =jaː?
お婆さんの歳はいくつなんだろうな？

ga…-ra 構造による判断不明をあらわす文を wakaramu「分からない」という動詞の捕文に埋め込んでもほとんど変わらない。当該構造の埋め込み疑問文としての用法の起源は、それにあると思われる。

289)

ʔuda=gatʃi=ga ʔik-i-ra どこに行くのだろうか?	waka-ra-mu
どこに行くか分からない	

次の用例は、思考過程の用法を示す。

290) wu-jabu-N=kaja:…?! ʔabe...? taru=mu wu-ra-nu gutu ʔa:-mu =djo:.
ごめんください...（いますかね）！あれっ…？誰もいないようだな。
he:sa-ʃiga, ʔinahe hatte=gatʃi ʔi-dʒui=ga ʃi:-ra =ja:?
早いけど、もはや畑に行っているのかな？

291) naɸa=gatʃi ʔumaga so:-ti ʔik-iwa ta:sa=ga ʔa:-ra =ja:?
沖縄に孫を連れて行けば、高いのだろうかな？

292) A: ʔunu tʃa:tʃabuN=wa kirasa-mu =djo:. ʔuda=dʒi ho:-ti=jo?
この湯飲みはきれいだね。どこで買ったのか？
B: ʔuda=ga ja-tta-ra =jo:? <ko:be>=ga ja-tta-ra =jo:?
どこだったのかな？神戸だったのだろうかな？
<o:saka>=ga ja-tta-ra =jo:?
大阪だったのだろうかな？

次の用例は、疑念の用法を示す。

293) A: na:biʃiru ʔami=nu ɸu-i-mu =di
今夜雨が降ると
gai-tʃu-jabu-ta-N =sa=ja:
言っていましたよね
B: gaN =jo:. ja:-ʃiga kumu=wa ti:tʃi=Ntʃu=mu na-N =ja:
そうだよ。しかし、雲は 1 つさえもないね。
ɸuni ɸui=ga ʃi-ra =ja:
本当に降るのかな？

ga…-ra 構造には、対話的な用法の〈応答を強制しない質問〉もあるが、まれである。

294) A: ʔerabu=ne tukunuʃima=nu tʃu:=mu
沖永良部に徳之島の人も
wui=ga ʃi:-ra =ja:?
人もいるかな？
B: wu:-nu hadʒi =dja:
いるはずだよ。

疑いの疑問のマーカーgaraは、動詞と第1形容詞の第2終止形につき、第2形容詞と名詞には、直接つく。

295) ʔikja ʃa-N=gara?
どうしたんだろう？

296) ɸumi=wa mugi=jukkwa taːsa-N =gara?
米は麦より高いのかな?

297) taroː=wa dʒiroː=jukkwa dʒoːdʒi =gara? 疑わしい
太郎は次郎より上手かな？

298) ʔari=wa ʔuda=nu tʃuː =gara?
彼はどこの人かな？

garaの用法は、3つある。①疑いの疑問のマーカーである。②埋め込み疑問文のマーカーとしても用いられる。③garaは、-tu/-tuniや、動詞やコピュラの-ti中止形や、否定形の-adana/-radana中止形や、第1形容詞の-nu中止形などによる原因・理由節につけば、因果関係が不確定であることを示す。このセクションでは、①のみを検討するが、②の用法のほうが3つの中で圧倒的に使用頻度が高い。

garaの起源は、フォーカス助詞gaとコピュラの-ra形jaraとの縮約にあると考えられる。

299) I. ʔari=mu masana=nu tʃuː=ga ja-ra?
↓
II. ʔari=mu masana=nu tʃuː =gara?

彼も正名の人かな？

-ga jara → gara

北琉球語群のうち、喜界島、奄美大島、徳之島以外には、ga…-ra構造が広く用いられている（Personal communication）。名詞述語文・第2形容詞述語文にgaとコピュラとの-ra形との縮約が方々で見られる現象である[16]。沖永良部語は、例外的ではないが、その他の北琉球諸語に属する言語変種とことなるのは、gaとコピュラとの-ra形との縮約形が疑いの疑問文のマーカーとしてkajaːなどのような終助詞と似たような形態論的な分布を持ち、使用が名詞述語文・第2形容詞述語文から動詞述語文と第1形容詞述語文まで広がった。次の用例では、何の違和感もなくgaraをkajaːに置き換えることができる。

[16] 北琉球語群のgaとコピュラとの縮約の例として次のものがある。
久米島町謝名堂方言においては、ga+jeːraがgeːraになる。
用例：maː=nu tsu=geːra?「どこの人だろう？」
今帰仁村謝名方言においても、ga+jeːraがgeːraになる。
用例：daː=nu tʃuː=geːra?「どこの人だろう？」
国頭村奥方言においては、ga+jaraがgaraになる。
用例：daː=nu ttu=gara?「どこの人だろう？」

300)　wa=ga　gai-tʃa-ʃi　　waka-ta-N=gara?
私が言ったのを分かったのかな？

301)　ʔuduru=ga　　ne:　　ta:sa-N=gara?
どれが値段高いんだろう？

gara の起源が ga…-ra 構造にあるのにもかかわらず、gara による疑いの肯否疑問と選択肢疑問においてフォーカス化が起こるばあいは、du が用いられる。

302)　ʔitʃibaN　　dʒo:dʒi　　ja-tta-ʃi=wa
一番上手だったのは、
ʔanu warabi=du　　ja-tta-N=gara=ja:?
あの子どもだったのかね？

303)　wa:　　saki　　nu-da-ʃi=wa　　ʔari=du　　ja-tta-N=gara?
私の酒を飲んだのは、彼だったのかな？

ga…-ra 構造の文とことなり、gara の文においては、疑問詞にフォーカス助詞 ga がつくことがあるが、義務的ではない。

304)　ʔikjaʃi=ga　　wa:s-a-N-gane　　ʔumu　ʔitami-N=gara=ja:?
どうして煮ないで、芋を炒めるかな？

gara による疑いの疑問文は、独話的な用法がもっとも基本的な用法である。次の用例は、判断不明の用法を示す。A と B は、第 3 者であるʔagari=nu ja:=nu gja:gja「東の家のおじいさん」がなぜ英語が上手なのかが分からず、A は、B が知っているかどうか分からないため、kaja:によるいわゆる〈応答を強制しない質問〉で B に反応を引き出そうとしているが、B が gara による文で判断不明であることを表現している。

305)　A:　ʔagari=nu　　ja:=nu　　gja:gja=wa
東の家のおじいさんは、
ʔikjaʃi　<je:go>　　gaNʃi　dʒo:dʒi =kaja:?
なぜ英語がそんなに上手なのかな？
B:　gaN =ja:.　　ʔikjaʃi　　ʔubi-ta-N=gara =ja:?
そうだね。　どうやって覚えたんだろうね？

8.1.6 修辞疑問：非難の質問文

修辞疑問では、話し手が聞き手に問いかけるが、話し手には、不明な点がないし、聞き手に回答を求めるわけでもない。正名方言では、修辞的な肯否疑問文で nja/na と修辞的な疑問詞疑問文で-jo も用いられるが、語根につく o:/-ro:も用いられる。この語尾は、〈表出〉という意味でも用いられるが、疑問文においては、修辞的な意味しかない。-o:/-ro: は、肯否疑問文でも、Nga（なぜ）による疑問詞疑問文でも、修辞疑問のマーカーとして用いられる。聞き手の行為に対しての話し手の非難をあらわすことが多い。

306)　ʔusu-timu　　ʔuNk-i-nu　　gi:=nu　ʔa-ro:?
押しても動くわけがあるもんか？

307)　ʔura=ni　ʃi-ra-ro:?
あなたにできるもんか？

308)　Nga　waro-ro:?
どうして笑うか？

309)　ʔura=wa　Nga　gaNʃi　<kitana>-sa-ro:?
あなたはどうしてそんなに汚いか？

310)　Nga　ʔura　muni=nu　wa:ʃa　na-tta-ro:?
どうしてあなたの言葉がおかしくなったか？

動詞の否定形が述語になるばあい、-no:になる。

311)　Nga　ɸu:-no:?
どうして来ないか？

-no:は、勧誘的な意味でも用いられる。

312)　tʃa:　ʔoiʃi-ra-no:?
お茶を召し上がりませんか？

コピュラは、-o:/-ro:をとらない。コピュラが形態論的なマテリアルを担う第 2 形容詞が述語になる文と名詞述語文では、上に疑問詞疑問のマーカーとして述べた-jo が用いられる。動詞か第 1 形容詞が述語になる文でも-jo が非難的な修辞疑問のマーカーとして用いられる。そのようなばあいでは、肯否疑問にも用いられる。

313)　Nga　gaNʃi　<heta> =jo?
どうしてそんなに下手か？

nja/na が修辞的疑問で用いられるばあい、終助詞 djo:がつくことが多い。

314)　ʔura=ga　gai-tʃimu　ʔari=ga　kiki-N=nja =djo:?!
あなたが聞いても彼が聞くもんか？！

8.1.7 意志の疑問文

正名方言の-(r)a(:)による意志勧誘形は、話し手の行為を前提として、聞き手に行為の実行を誘いかける用法もあり、話し手が発話時からとる行為に決意したことをあらわす用法もある。当該方言における意志の疑問は、意志勧誘形の 2 つ目の意味から派生した。

意志勧誘形に疑問助詞 i がつく意志の疑問形は、話し手が聞き手のために行おうとしている行為を聞き手が受け入れるかどうかを問うばあいに用いられる。-(r)a:のように調音でおわる接辞をとる動詞もあり、そのようなばあいに i がつくと、超重母音をさけるために短音化がおこる。

「とろう」tura:+i > *tura:=i > tura=i 「とろうか」

意志勧誘形+i は、①話し手に不明な情報があるため判断がなりたたず、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消をめざすという 2 つの基本的性質があるという疑問の典型的な特徴を 2 つとももっていると言えよう。話し手が行為を実行する気があるが、聞き手がその行為をしてほしいかどうかが話し手にとって不明であるため、実際に行うのか行わないのかを聞き手に問いかける。

次の用例では、話し手が聞き手のグラスにビールを注いであげるという意志があるが、聞き手がビールを注いでほしいかどうかが話し手にとって不明であるため、話し手が意志勧誘形+i を用いて、聞き手に問いかける。

315) A: <biːru> tʃîg-jabu-ra=i?
ビールを 注ぎましょうか？
B: ʔiː, tʃîg-i
うん、注げ。

次の用例では、話し手が聞き手の荷物をもってあげるという意志があるが、聞き手が荷物を持ってほしいかどうかが話し手にとって不明であるため、話し手が問いかける。

316) A: waga mutt-a=i?
私が持とうか？
B: mihe dero!
ありがとうございます！

9 章 複文

単文は、述語を 1 つ持つのに対し、複文は、述語を 2 つもつ。主節に従属する節がさまざまあるが、本論文では、条件文に焦点を当てる。

9.1 条件文

ある事態が別の事態をひきおこす関係をあらわす文は、条件文という。条件文は、原因的なつきそいあわせ文、条件的なつきそいあわせ文、うらめ・ゆずり的なつきそいあわせ文に分けられる。このセクションでこの 3 つのタイプの条件文を考察する。

9.1.1 原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文

奥田（1986）によると、原因的なつきそい・あわせ文とは、ある出来事を事実的な根拠としてつきそい文にさしだして、その結果、実現した出来事をいいおわり文にさしだすことで、話し手が 2 つの出来事を原因（理由）・結果の因果関係としてむすびつけるつきそい・あわせ文である。個別的な動作や状態のあいだの原因・結果の関係をあらわすのに、-tu(ni) 原因形がもちいられる。つきそい文でもいいおわり文でも過去、現在、未来のレアルな出来事がさしだされるため、つきそい文でもいいおわり文でも述語は、テンス・アスペクトによる形式がとられる。

numiNtu(ni) （のむから）　　nudantu(ni)（のんだから）
nuduNtu(ni)（のんでいるから）　　nudutaNtu(ni)（のんでいたから）

原因は、物事がおこるもとになる事柄であり、理由は、人の行為をおこす事柄であるとすれば、日本語では、原因的な条件をあらわすつきそい文の形式が「ので」か「から」をとることによって、原因をあらわすか理由をあらわすかという区別がつくが、沖永良部語正名方言には、原因と理由の違いを形式であらわすことができない。317）では、つきそい文の出来事が未来におこるため、いいおわり文の出来事がそれによって自然におこるという原因をあらわすつきそいあわせ文である。318）では、話し手がつきそい文の出来事を理由とし、行動を勧誘するという理由をあらわすつきそいあわせ文である。両方は、つきそい文の述語の形式が-tu 原因形をとる。

317)　tudʒi=wa　na:tʃa　naɸa=gatʃi　ʔikiNtu　du:tʃui nai =do:　原因
妻は、明日沖縄に<u>行くので</u>、1 人になるよ。

318)　na:tʃa　naɸa=gatʃi　<u>muduitu</u>　na:biʃiru　agu=ʃi numa =ja:　理由
明日沖縄に<u>帰るから</u>、今夜一緒に飲もうね。

動詞も形容詞もコピュラも-tu(ni)原因形をとることができる。話者の内省によると、今まで集めた用例で-tu になっているところを-tuni にかえても、違和感もないし、意味も変わらないということである。

次の 2 つの用例では、継続している動作か変化した後の結果的な状態がつきそい文にさしだされて、つきそい文にさしだされる出来事が原因・理由になって条件づけられて実現する出来事がいいおわり文にさしだされる。次の用例では、話し手が話す瞬間に継続している出

来事がさしだされ、その継続している出来事がいいおわり文でさしだされる状態の存在する原因となる。

319)　ma:=wa kuruma=nu tu:tuNtu ʔo:ʃaN =do:
ここは、車が通っているので、あぶないよ。

次の用例では、つきそい文に継続している変化の結果がさしだされ、いいおわり文にさしだされた出来事がその変化の結果を理由とした人の行動である。

320)　na: niku nattuNtu gja:gja=wa na: nibutuN
もう遅くなっているから、おじいさんは、もう眠っている。

次の 321）と 322）では、つきそい文にさしだされる出来事がすでに実現した過去のことであり、いいおわり文とのあいだにある原因・結果的な関係があらわされている。321）は、いいおわり文の述語が否定形の過去形であり、つきそい文にさしだされた過去の出来事が、いいおわり文でさしだされた出来事がおこらなかった原因となる。

321)　ʔuja=ga nibututaNtu ja:=neti=wa ʔagu=tu ʔaʃibaradana ʔattaN
親が眠っていたので、家では、友達と遊べなかった。

322）でも、つきそい文でさしだされた出来事がすでに実現した過去のことであるが、その過去の出来事がいいおわり文にさしだされた未来の行動の理由となる。

322)　kinju ʔura=ga harotaNtu, hju:=wa waga haroi
昨日、あなたが払ったから、今日は、私が払う。

原因的なつきそいあわせ文で、つきそい文の述語形式が中止形をとらえている例もある。このようなばあいにあらわされている理由・原因が-tu(ni)による原因的なつきそいあわせ文よりは、やや弱いと考えらる。強調されるのは、理由・原因的な要素よりも時間の流れの中で出来事がどのように展開することであるばあいが多い。

323)　<tʃikiN>　ka-di　wata　ja:da-N
チキンを食べて、お腹が痛くなった。

もう少し理由・原因がより強調されるばあい、中止形にフォーカス助詞 du がつく。

324)　ʔura=ga gainu muni=nu wa:ʃanu=du warotaN =do:
あなたがいう言葉が可笑しくて笑ったよ。

つきそい文が名詞述語文であるばあい、コピュラの中止形より naimu「なる」の-ti 中止形 natti が用いられることが多い。

325)　wunagu=nu kwa: natti ʃuwa ʃuN=gi=jo:
女の子だから、心配しているんだよ。

9.1.2 条件をあらわすつきそい・あわせ文

条件づけを表現するつきそい・あわせ文は、次の 4 つのタイプにわけることができる。定義は、かりまた（出版未定）のとおりである。

1)条件的なつきそいあわせ文：　条件となる出来事が状況や話し合いの場面のなかにあたえられていて、その条件的な出来事のもとに実現する出来事をいいおわり文にさしだすつきそいあわせ文である。

2)仮定的なつきそいあわせ文：　あたえられた場面や状況のなかから可能性としての出来事を話し手自らが設定した仮定的な条件のもとに、話し手の積極的な態度や意志を表明するつきそいあわせ文である。

3)前提的なつきそいあわせ文：　話し手がある出来事の実現、話し手の評価を前提としてつきそい文にさしだして、いいおわり文に話し手自身の意欲や意志をあらわしたり、聞き手への願いや命令をあらわしたりするつきそいあわせ文である。

4)契機的なつきそいあわせ文：　つきそい文といいおわり文のあらわす 2 つの出来事が原因理由的な因果関係や条件づけ的な因果関係をあらわさず、2 つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。

9.1.2.1 条件的なつきそいあわせ文

つきそい文にさしだされる条件がいいおわり文のさしだす出来事の実現のための条件である。そういう意味でいいおわり文のさしだす出来事は、条件があれば実現し、なければ実現しない可能性としてポテンシャルな出来事である。このようなつきそいあわせ文の関係をあらわすつきそい文の述語になる形式には、さまざまな形式がある。-iwa 形式（否定のばあいは、-nja）、-to 形式、-tara 形式、-tukja 形式、-kja 形式、-gaʃara 形式は、全部条件的なつきそいあわせ文につきそい文の述語形式としてあらわれる。

次の用例では、つきそい文の述語がとる形式は、さまざまであるが、すべての用例は、つきそい文にさしだされる出来事がいいおわり文にさしだされる出来事の実現の条件となる。

326)　tʃu:=wa karada=nu <u>ʔubisa:rja</u> ʃugutu ʃirariN
人は、体が大きければ、仕事ができる。

327)　ʔerabu=neti=wa muni <u>kikiwa</u> ʔuda=nu ʃima=kara kittʃaN =ka wakai
沖永良部では、言葉を聞けば、どこの集落から来たか分かる。

328)　kusui <u>numiwa</u> noi =do=ja:
薬を飲めば、直るよね。

329)　<reNʃu:> <u>ʃirja</u> dʒo:dʒi naimu
練習すれば、上手になる。

330)　nama <ʔo:dzumo:>=neti <saNpun> ʃigitʃi <u>ʃiruto=wa</u> <gjo:dʒi>=nu tumiN =sa
今大相撲で 3 分過ぎて<u>やると</u>、行司が止めるさ。

331) tʃìNʃì ʔuttuto jamiN
膝を打つと痛い。

332) saki numatʃi mjuːto ʔunu tʃuː=nu kimugukuru=nu wakai
酒を飲ませてみると、その人の心が分かる。

333) gaNnjanu kutu ʃìNtara ʔama=ga waʃìmikiN
そんなことしたら、お母さんが怒る。

334) satta ʔirikwa ʃìNtara ʔutturuʃa ʔamasa nai
砂糖を入れすぎたら、非常に甘くなる。

335) ʃìNbuN miNtara nuː=mu wakai
新聞を見たら、何でも分かる。

336) <reNʃuː> ʃìNkja dʒoːdʒi naimu
練習したら、上手になる。

次の用例では、つきそい文にさしだしている条件がないため、いいおわり文の出来事が実現しなかったため、非レアルになる。

337) naː ʔunu gjaːgja ʔaʃi moːʃi wuraʃìga, meːriwa naː hjaku ʔamai =ga
もうそのおじいさんおばあさん、亡くなって、いないけど、いらっしゃればもう 100 才あまりだよ。

338) ʔami=nu ɸutti ʔarja hana=nu sattʃanu hadʒi
雨が降ったら、花が咲いたはずだ。

339) ʔari=ga ʔunu tuki <ʃippai> ʃìː ʔariwa, meːtanu hadʒi
彼がそのとき失敗したら、負けたはず。

340) nama ʃuːkja jukwattanu muN
今やっておけばよかったのに。

341) ʔura=ga tʃantu <ʃìtʃìdʒi>=ni ʔuːtʃì kuririwa manioitanu muN
お前がちゃんと 7 時におこしてくれれば、間に合ったのに。

-iwa 条件形と-to 条件形がことなる点として、つきそい文にさしだしている条件がないため、いいおわり文の出来事が実現しなかった場合にはもちいられない点がある。

342) ×nama ʃuːkuto jukwattanu muN
今しておけばよかったのに。

9.1.2.2 仮定的なつきそいあわせ文

仮定的なつきそいあわせ文は、かりまた（出版未定）の定義によると、「あたえられた場面や状況のなかから可能性としての出来事を話し手自ら設定した仮定的な条件のもとに、話

し手の積極的な態度や意志を表明するために、いいおわり文の述語に命令形や禁止形や希望をあらわす形式を述語にもつはたらきかけ文やまちのぞみ文になります」とのことである。

正名方言では、仮定的な条件をあらわす、つきそい文の述語になる形式に-tara、-tukja、-kja という、第 2 終止形につく形式がよくあらわれる。つきそい文の述語が否定形であるばあい、-nja 条件形をとらえることが多い。

次の用例では、つきそい文にさしだされる仮定的出来事が聞き手か第三者が行う動作であり、いいおわり文は、その動作が実行されるなら、実行するという話し手の意志をあらわす。

343) ʔura=ga ʔari ʔoNmi-N-tara wa=ga ʔura <ʃukudai> ʃi-N =ga
お前が彼をなぐったら、おれがお前の宿題をするわ。

344) <ʔitʃìmaNeN> haroi-tukja wana nu:=mu gaij-a-N =do:
一万円を払ったら、私は何も言わないよ。

345) haroi-kja wa=ga <so:dʒi> ʃì-N =do:
払ったら、私が掃除するよ。

次の用例では、つきそい文にさしだされる、話し手によって仮定された出来事が聞き手がおこなう動作であり、いいおわり文にさしだされるのは、聞き手への命令、または、禁止である。

346) Numi-N-tara nuN-na
飲めば、乗るな。

347) ʔari=ga ʃi-ra-N-nja, ʔura=ga ʃì-ri =jo:
彼がやらなければ、お前がやれよ。

つきそい文の述語が否定形をとらえているばあいには、-(r)iwa と語源が同じである-nja が用いれることが多いが、話者の内省によれば、-nja を-tara、-tukja、-kja に置き換えても違和感がまったくないとのことである。次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文で、つきそい文の述語が否定述語になり、その否定形が-tukja による条件形をとらえている。

348) ʔari=ga ʃi-ra-N-tukja, ʔura=ga ʃì-ri =jo:
彼がやらなければ、お前がやれよ。

仮定的なつきそいあわせ文でつきそい文の述語が肯定形であるばあい、-(r)iwa と-to がほとんど用いられず、接辞の-tara、-tukja、-kja が用いられることが多い。話者の内省のよると、-(r)iwa は、仮定的なつきそいあわせ文で使えないわけではないが、-tara、-tukja、-kja、-gaʃara のほうが使いやすいとのことである。-to の使用は、仮定的なつきそいあわせ文に不適当であるとのことである。

9.1.2.3 前提的なつきそいあわせ文

前提的なつきそいあわせ文は、つきそい文の出来事の実現・実行を前提にして、話し手にとってのぞましい出来事がいいおわり文にさしだされる。いいおわり文に話し手自身の意欲や意志をあらわしたり、聞き手への願いや命令をあらわしたりする。つきそい文にさしだされる出来事といいおわり文にさしだされる出来事のあいだの時間的関係は、先行後続であっても同時であってもよい。つきそい文の出来事といいおわり文の出来事のあいだには、かならずしも因果関係があるわけではない。

次の用例では、つきそい文の出来事の実現、または、実行を前提にして、話し手が話し手にとって望ましい行為を命令・禁止の形で聞き手にすすめる。

349) kwa:=nu hanaʃa ʔaNtara gutʃì ɸukkuna
子供がかわいいなら、文句をいうな。

350) nuitukja numuna
乗るなら、飲むな。

351) mumigutu naNtukja gutʃì ɸukkuna
問題ないなら、文句を言うな。

352) jaʃìki hoitukja ja:=nu hata ho:ri
宅地を買うなら、家の側を買え。

353) ʃìgutu taNmiNgaʃara ʔagu=gatʃì taNmi
仕事を頼むなら、友達に頼め。

354) <nimotsu> muttiNgaʃara du:tʃui=ʃì mutti
荷物を持つなら、1 人で持て。

355) ʔaro=neti ʔaʃìbiNgaʃara <bo:ʃì> haburi
外で遊ぶなら、帽子を被れ。

356) kuruma muttiNgaʃara saki=wa numaNkoi ʃìri
車を持つなら、酒を飲まないようにしろ。

次の用例では、つきそい文の出来事の実現、または、実行を前提にして、話し手自身の意欲や意志がしめされている。

357) hani=nu ʔaNtara tudi ʔikibuʃa =ja:
羽があったら、飛んでいきたいね。

358) ʔura=ga ʔikiNtara wanu=mu ʔikiN
お前が行ったらおれも行く。

次の用例では、話し手が聞き手にひまがないことを前提にして、話し手には、ナカウチという農作業をする意志があるが、聞き手がその意志の実行を受け入れるかどうかを疑問化した意志勧誘形で問う。

359) ʔura hima naNkja wanu nakautʃi ʃira=i?
あなた暇ないなら、わたしナカウチしようか。

正名方言の前提的なつきそいあわせ文では、主に接辞の-tara、-tukja、-kja-、-gaʃara が用いられる。話者の内省に前提的なつきそいあわせ文には、接辞-to の使用が不適当であるとのことである。

360) ×hani=nu ʔaru-to tu-di ʔiki-buʃa =ja:
羽があると、飛んでいきたいね。

9.1.2.4 契機的なつきそいあわせ文

かりまた（出版未定）の定義によると、「契機的なつきそいあわせ文は、つきそい文といいおわり文のあらわすふたつの出来事が原因理由的な因果関係や条件づけ的な因果関係をあらわさず、ふたつの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわします」とのことである。それに加えて、奥田（1986：14）が「《契機的なつきそいあわせ文》は、基本的には、《条件づけ》をともなっていようと、いなかろうと、継起的におこってくる、ふたつの動作をさしだしている。」と定義する。

次の用例では、非過去形であり、2 つの出来事が継起的におこってくることをあらわす。

361) wa: ɸuʃi=nu jamuto=wa ʔami=nu ɸui =do:
私の腰が痛かったら、雨が降るよ。

362) ʔe:da=nu tubuto=wa hadi ɸukkiN =do:
トンボが飛ぶと、風ふくよ。

上の用例には、-to 条件形にトピックをあらわすとりたて助詞 wa「は」がついた形が用いられているが、話者の内省によれば、wa がなくても同じような契機的な意味になるし、-to を-(r)iwa に置き換えても違和感がないとのことである。

次の用例では、つぎの例のつきそい文では、いいおわり文にさしだされる出来事が進行する時間的な状況がさしだされている。時間や時期をあらわす状況語にnaimu「なる」の条件形がつき、意味は、その条件節が時間をあらわす、na:tʃa=waやnatʃi=waというような状況語にトピックをあらわすとりたて助詞wa「は」がついた形にちかづいている。

363) na:tʃa nariwa ʔma:=ne gumi=nu aN
明日になったら、ここにごみがある。

364) natʃi nariwa hi:bi ʔattʃamu =djo
夏になったら、毎日暑いよ。

上の用例のようなばあいには、-tara、-tukja、-kja、-gaʃara がもちいられない。

上の 2 つの用例では、-(r)iwa 条件形が用いられているが、話者の内省によると、-to 条件形に置き換えることができる。

-tukja 条件形は、-tara 条件形と同じく動詞の過去形につくばあい、つきそい文といいおわり文があらわす 2 つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわすこともある。

次の用例でしめしているように、契機的なつきそい文の述語が過去形の尾略形+-tu、過去形の第 2 終止形+-tara、-kja をとるばあい、つきそい文といいおわり文があらわす 2 つのアクチュアルな出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。

365) waga mukaʃi=nu hanaʃi ʃa:tu ʔari=ga waʃimitʃamu
私が昔の話をしたら、彼が怒った。

366) waga ʔuri kittʃatu ʔari=ga gaNʃi narotʃi kuritaN
私がそれを聞いたら、彼がこういう風に教えてくれた。

367) waga nibututatu ʔari=ni ʔu:satti =jo:
私が眠っていたら、彼におこされてよ。

368) Nga wakaranu muN wakaramu ditʃi
なぜ分からないのに分からないと
gajadina =di ʃa:tu,
言わないかと言ったら、
<jeNrjo> ʃi: gaijaramu =ditʃi...
遠慮して言えないと…

369) ja:=gatʃi ʔittʃatu ʔama=ga wuttaN
家に入ったら、お母さんがいた。

370) ʔagu=nu <ʔo:imi>=di gaitʃaNtara <hai> gaitʃaN =gi=jo:
友達が「オーイミ」と言ったら、「はい」言ったわけだよ。

371) waga mukaʃi=nu hanaʃi ʃa:tu ʔari=ga waʃimitʃamu
私が昔の話をしたら、彼が怒った。

372) waga ʔuri kittʃatu ʔari=ga gaNʃi narotʃi kuritaN
私がそれを聞いたら、彼がこういう風に教えてくれた。

373) waga nibututatu ʔari=ni ʔu:satti =jo:
私が眠っていたら、彼におこされてよ。

374) ja:=gatʃi ʔittʃatu ʔama=ga wuttaN
家に入ったら、お母さんがいた。

375) do:ka <hjo:dʒuNgo>=ʃi hanatʃi kuriri =di:ʃi ʃaNkja,
どうか標準語で話してくれということをしたら、
ʔunu ʔatu=kara na: wakatamu =ditʃi
その後で「もう分かった」と。

つきそい文といいおわり文のアクチュアルな出来事のあいだの時間的な契機性をあらわすばあい、過去尾略形+-tu か、過去第 2 終止形+-tara、-tukja、-kja しかもちいられないようである。'古めかしい言い方'とされる-gaʃara が契機的なつきそいあわせ文に用いられるかどうか、話者も断定できないようである。

9.1.2.4 まとめ

沖永良部語正名方言の条件をあらわす形式と条件文を分析した上で、今までの琉球諸語の研究にとりあげられていないいくつかの特徴が見えてくる。

契機性をあらわすには、他の条件文に用いられない独自の形式がある。過去尾略形+-tu 契機形は、第 2 終止形+-tu 原因形と元は同じであり、互いに用法がことなってきたと考えられる。

当該方言は、沖縄語（かりまた出版未定）とことなり、条件をあらわすつきそい文の述語になる形式が前提的条件と仮定的条件によって形式が使い分けられる傾向がみられない。両方が-tara、-tukja、-kja、-gaʃara によって表現され、この 4 つのなかで一つが話者の内省によって「一番適切」とされるわけではない。同じ用法をもつ形式が 4 つある原因は、おそらく正名方言とその周辺の方言との接触によると考えられる。-kja は、高年層の話者に「よその言い方」とされる。-tara、-tukja、-gaʃara もかつてよその地域の言い方であったと考えられる。高年層の話者を中心とする、この形式の地理的分布の調査が必要である。

条件形の分析によって沖永良部語と日本語との接触がはっきり見える現象もいくつか見えてきた。次にその例を 2 つあげる。

-to 条件形は、他の北琉球語群の変種には、見られない形式である。日本語のト条件形の影響でできたものであると言ってよかろう。日本語の-to という形態素が借用され、正名方言の動詞の旧連体形につけられるというのは、日本語の形態素がそのまま琉球諸語の語形につけられる珍しい例である。

6. 沖永良部語正名方言におけるさまざまな条件形接辞の使用

	-(r)iwa	-to	-tara	-tukja	-kja	-gaʃara	-nja	-tu
条件	○	○	○	○	○	○	○	×
仮定	△	×	○	○	○	○	○	×
前提	△	×	○	○	○	○	○	×
契機（非過去）	○	○	×	×	×	×	×	×
契機（過去）	×	△	○	○	○	?	×	○

9.1.3 うらめ・ゆずり的なつきそい・あわせ文

うらめ・ゆずり的なつきそいあわせ文は、原因・結果の関係が別の要因によって原因として正当にはたらかないことをあらわす。うらめ原因的な関係が事実的であって、つきそい文の出来事もいいおわり文の出来事もレアルであれば、うらめ原因的なつきそいあわせ文にな

り、うらめ原因的な関係が条件的であって、つきそい文の出来事がポテンシャルか、非レアルであれば、ゆずり状況的なつきそいあわせ文である。

9.1.3.4 うらめ的なつきそい・あわせ文

うらめ原因的なつきそいあわせ文の述語に使用される、代表的な形式は、連体形＋muN 条件形である。連体形＋muN 条件形を述語にもつ文は、事実的なうらめ原因的な関係をあらわし、つきそい文にもいいおわり文にもレアルな出来事が表現される。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべて muN の前に来ることができる。

次の用例は、つきそい文の述語の形は動詞の非過去形であり、いいおわり文には、過去のレアルなできごとがあらわれている。

376) ma:ni=wa ʔari=ga ki:nu muN, kinju=wa fu:dana attaN
普段は、彼が来るのに、昨日は来なかった。

377) <koNdo>=wa wakja kwa:=nu <butai>=gatʃi ʔidʒinu muN gja:gja=wa fu:mu =di
今度は、うちの子が舞台に出るのに、おじいさんは来ないそうだ。

次の用例のうらめ原因的なつきそい・あわせ文は、現在のレアルな出来事の因果関係をあらわし、つきそい文の述語は、継続相の形をとっている。

378) mu:ru tattʃunu muN ʔanu <se:to>=wa tattaN
皆立っているのにあの生徒は立たない。

379) ʔunu ʔju:=wa tutti=kara tiNge tattʃunu muN nama ʃidʒuraN =ja:
この魚は、とってからしばらく経っているのに、まだ死んでいないね。

次の用例は、運動をおこなわないことがうらめ原因になり、つきそい文の述語の形が否定形になっている。

380) tʃu:sa ʔusuturanu muN kuruma=nu ʔuNkinu gi:=nu ʔaro:
強く押していないのに、車が動くわけがあるもんか。

381) ʔari=wa <zeNzeN> ʃumutʃi jumanu muN Nga <toʃokeN> kuriN=jo
彼はぜんぜん本を読まないのに、なんで図書券をあげるのか。

次の用例は、つきそい文の述語になる条件文は、過去形の連体形に muN をつけた形が、過去のレアルな出来事に関して因果関係をあらわす。

382) jumibuʃa ʔattanu ʃumutʃi jattanu muN, niga ɸunagiti=jo?
読みたかった本だったのに、どうして捨てたか。

383) ʔanu ja:gi ʃinjaN=di ʃu:tanu muN nama ʃidʒuraN =ja:
あのヤギ死のうとしていたのに、まだ死んでいないね。

-ti 中止形+助詞 mu からできた-timu 形は、主にゆずり的なつきそいあわせ文にもちいられるが、うらめ的なつきそいあわせ文に用いるばあいもある。

384) harumaɸudʒi=wa hagi=nu ja:-dimu <ju:ʃo:> ʃa:-mu =djo:
日馬富士は足が痛んでも優勝したな。

うらめ的なつきそいあわせ文では、つきそい文が連体形+muN も-timu 形もとらえることができるが、いずれを用いるかによって意味がかわる。連体形+muN がもちいられるばあいには、いいおわり文にさしだされる出来事が話し手にとって望ましくないことであるのに対し、-timu 形がもちいられるばあいには、いいおわり文にさしだされる出来事が話し手にとって望ましいことである。

9.1.3.5 ゆずり的なつきそいあわせ文

ゆずり的なつきそいあわせ文でつきそい文の述語がとらえる形式は、過去第 2 終止形-te、-ti 中止形+助詞 mu からできた-timu 形、-dana 否定中止形+助詞 mu からできた-danamu 形、語根+(r)abamu 形がある。

過去第 2 終止形-te 条件形もつきそい文の述語につかわれて、ゆずり状況的なつきそいあわせ文をつくっている。いいおわり文のできごとがのぞましくないばあいに-te 条件形が用いられる傾向が見られる。つきそい文の条件は、本来ならいいおわり文の事態をひきおこすと予想されるのであるが、その予想に反していいおわり文の事態がおこらないことを、反事実的に述べるばあいにもちいられる。

385) ʔuri=ʃi <keNʃu:> ʃaNte=wa nu:=mu tʃuburu=ni ʔjaN
それで研修しても何も頭に入らない。

386) ʔikja: ʃaNte ʃiramu
どうしてもやらない。

つきそい文の出来事が実現するにもかかわらず、いいおわり文の出来事がそれに影響を受けずに、前と同じく成立するばあいに、つきそい文の述語が-timu 条件形をとる。このとき、つきそい文の出来事もいいおわり文の出来事もポテンシャルである。

387) wunagu=wa ʔikja:sa hataratʃimu <kju:rjo:>=wa ʔagaramu
女はいくら働いても、給料はあがらない。

388) ʃiNna =ditʃi gaitʃimu ʃiN =do=ja:
するなと言ってもするよね。

389) satta ʔiritimu ma:ku naN
砂糖を入れても、おいしくない。

390) ʃigutu ʔibiritimu ʃi:=du ʃiN =do:
仕事を飽きても、するんだよ。

391) ʔikjasa mutʃikasa ʔattimu ʃi: miN =ga
いくら難しくてもやってみるわ。

-timu 条件形に jukkwamu（よい）をくみわせて、許可をあらわす形式がつくられる。

392) nibutimu jukkwaN =do:
眠ってもいいよ。

-danamu 条件形を述語にもつ文は、-timu 条件形の否定形であり、つきそい文の述語が否定形式になるばあいにもちいられる。

393) <kaNdʒi> jumaradanamu ʃìgutu ʃìrariN
感じが読めなくても仕事できる。

394) ja:danamu dariraN
座らなくても疲れない。

ゆずり的なつきそいあわせ文における-te 形の使用と-timu 形と-danamu 形の使用の違いは、話し手のいいおわり文の出来事に対する態度である。話し手にとってその出来事が望ましくないばあいには、-te 形を用いるが、望ましいばあいには、肯定形なら-timu 形、否定形なら-danamu 形を用いる。

-(r)abamu 条件形を述語にもつ文は、-timu 条件形を述語にもつ文とかさなる部分が多いが、正反対、あるいは類似の意味のことがらを重ねて述べ、「どのようなことをしても・何があっても」というニュアンスでもちいられる傾向がみられる。

395) ʔakkabamu wudurabamu jukkwantu tʃa:ma=wa <ʔundo:> ʃi: jaseri
あるいても走ってもいいから、少しは運動して痩せろ。

396) <ʔoranda>tʃu jarabamu, ʔerabutʃu jarabamu mu:ru junu niNgiN =dja
オランダ人であっても、沖永良部人であっても、皆同じ人間だ。

397) ta:sa ʔarabamu jasa ʔarabamu ho:ri
高くても安くても買え。

ゆずり条件形をあらわす-timu 条件形と-abamu 条件形は、話者の内省によると前者が新しい言い方で後者が古い言い方であるということから-timu が日本語のテモ条件形の影響でできた言い方だと考えてよかろう。そうであれば、正名方言の-timu 条件形は、日本語の構造を正名方言に存在する形態素にもたせたものであり、Heath （1984：367-368）が定義した structural convergence（構造収束）の一例であると言ってよい。

10 章　　テンス・アスペクト・ムード

10.1 主体動作動詞のテンス・アスペクト・ムード

琉球諸語のなかのすべての変種が危機に瀕しているという状況のなかで、琉球諸語の文法記述のための調査をおこなうことが難しくなってきた。テンス・アスペクト・エヴィデンシャリティーの調査をおこなうにあたっては、自分の母語を離れた視点から見て、相対化して考えることができる母語話者の協力が必要である。そのため、このような調査をおこなうのがさらに難しくなっている。

10.1.1.用語の概説

用語の定義は基本的に工藤（2014）にしたがうが、沖永良部語正名方言に重要でないところを除く。

テンス

基本的に発話時を基本として、事象を発話時以前に位置づけるか否かを示すカテゴリーである。テンスは、日琉語族には形態論的カテゴリーとしてのテンスがあり、過去・非過去にわかれている。テンスは、アスペクトよりも抽象的な主体的時間であり、アスペクトからテンスへの文法化の進展が見られる。過去と未来とは、一見、発話時以前か以後かで対称的であるかのように見えるが、過去の出来事は体験的認識が可能であり、未来の出来事は、体験的認識が不可能である。したがって、対称的とはいえず、テンスは、認識的ムード、エヴィデンシャリティーと相関する。

未来：発話時を基準にしてに運動が発話時以後におこなわれることが予想されるが実現していないことをあらわす。

現在：発話時に運動がおこなわれていることをあらわす。

過去：発話時を基準にして発話時前後に運動がおこなわれたことをあらわす。

アスペクト

アスペクトは、時間的展開性のある（終了あるいは開始の時間限界がある）動的事象をあらわす運動動詞述語に成立するカテゴリーである。perspective aspect、view-point aspect とも言われるように、文法的アスペクトは、他の事象との時間関係のなかで運動の時間的展開の捉え方のちがいである。アスペクトは、時間的限定性と相関しており、一時的（具体的）事象の場合に、完成、進行、結果といったアスペクト的意味の対立が成立する。一方、「彼はいつも 6 時におきる/おきている」といった時間的限定性のない（ポテンシャルな）反復の場合は、アスペクト対立がなくなり、「する」形式でも「している」形式でも可能になる。

完成：時間的に限界づけられた運動の捉え方であり、開始から終了までをひとまとまり的に捉える場合もあれば、終了限界達成あるいは開始限界達成が焦点化される場合もある。他の事象との時間関係は継起となる。

日本語諸方言では無標形式であるが、北琉球語群には、「スル」相当形式がなく、シ中止形（“連用形”）＋有情物存在動詞という有標形式が、テンスと相関して完成（未来）というアスペクト的意味をあらわすようになっている。

継続：運動の限界づけられない継続的な捉え方であり、他の事象との時間的関係は同時になる。日本語標準語の「している」形式は、動詞の語彙的意味のタイプと相関しつつ、主体の動作継続（進行）をあらわす場合と主体の変化結果の継続をあらわす場合がある。

進行：運動が、自らの時間的限界に至っていない過程的な姿・とらえ方である。＜継続＞は、動作のつづく状態か変化の結果がつづく状態をあらわすのに対し、＜進行＞は動作がダイナミックにすすむことをあらわすか、変化が変化達成へ向かってすすむことをあらわす。

結果：変化が達成し、その結果が継続する状態をあらわす。主体結果と客体結果がある。日本語標準語の「している」形式では「戸が開いている」のような主体結果しかあらわせないが、九州・四国・中国地方を含める西日本諸方言のシトル系形式は、「戸が開いとる」「戸をあけとる」のように主体結果、客体結果の両方をあらわすこともできる。

直前：兆候の知覚に基づく近未来の動作・変化の推定をあらわす。西日本諸方言の多くの変種の例で説明すれば、戸があきつつあるのを見て「戸があきよる」という場合には知覚したままを捉えているのだが、風で戸ががたがた音をたてている状況で「戸があきよる」という場合には、＜直前＞というアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー的な意味がある。

習慣：運動の限界づけられない定期的な捉え方である。運動がおこなわれる回数が決まっていない。

反復：習慣と反復は似ているが、後者が同じ運動がおこなわれることを数回観察したということにしか基づかない。

パーフェクト：パーフェクトという用語は、運動動詞にある複合的な時間的意味でもあるが、＜先行時の運動の完成＞と＜以後の設定時における結果、痕跡、効力の継続＞の両方をとらえる複合的な時間的意味である（工藤：2014）。

エヴィデンシャリティー

エヴィデンシャリティーは、ある発言の情報源がどのようなものかということによって形式を変える文法的カテゴリーである。「証拠性」ともいう。

直接確認：話し手が直接確認した動作・変化であることを形式に明示することである。

間接確認：話し手が間接的証拠で確認した以前の動作・変化を形式に明示することである。

10.1.2 沖永良部語正名方言のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティー形式

次の表は、沖永良部語正名方言の主体動作動詞 numimu（飲む）のテンス・アスペクト・エヴィデンシャリティーによる述語形式を示す。以下の表に日本語相当形式も入れることにする。この日本語相当形式は沖永良部語正名方言の訳ではなく、正名方言が分からない読者にとって理解しやすくするためである。括弧内の形式が用いられていることは、確認できているが、その使用の詳細はまだ調査していないため、表には入れたが、以下に使用の説明がない。

7. 正名方言動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー形式

日本語相当形式	主体動作動詞（飲む）	主体動作客体変化動詞（落とす）
1)シオリ 2)シタ 3)シテオリ 4)シテオッタ	numimu nudamu nudumu nudutamu	ʔutuʃimu ʔututʃamu ʔututʃumu ʔututʃutamu
5)シオッタ	numitamu	ʔutuʃitamu
6)シテアリ 7)シテアッタ	nudi ʔaːmu nudi ʔattamu	ʔututʃi ʔaːmu ʔututʃi ʔattamu
8)シテオッテアリ 9)シテオッテアッタ	nuduti ʔaːmu nuduti ʔattamu	ʔututʃuti ʔaːmu ʔututʃuti ʔattamu
10)シテアッテアル	×	(ʔututʃi ʔatti ʔaːmu)
11)シテアルキオリ 12)シテアルイタ 13)シテアルキヨッタ	nudi ʔakkimu (nudi ʔattʃamu) (nudi ʔakkitamu)	ʔututʃi ʔakkimu ʔututʃi ʔattʃamu ʔututʃi ʔakkitamu

日本語相当形式が日琉祖語に近いと思われる。形式の 1、2、3、4、5、6、10 がとらえた音声推移を以下見ていく。

1) *nomi omu > nomjomu > numjumu > numimu

2) *nomite amu > nuNdamu > nudamu

3) *nomite omu > noNdi omu > nudi umu > nudumu

4) *nomite otta > noNdi utta > nudi utta> nudi uttaN > nudutaN > nuduttamu

5) *nomi otta > numi utta > numiuta > numjuta > numitaN > numitamu

6) *nonde ari > nundi aN > nudi aN > nudi aːmu

10) nonde aruki ori > nonde akkioN > nundi akkiuN > nudi akkjuN > nudi akkjuN > nudi akkjumu > nudi akkimu

10.1.3.主体動作動詞

下の表は、numimu（飲む）のテンス・アスペクト・エヴィデンシアリティー（モダリティー）形式を示す。

8. 動詞 numimu「飲む」のさまざまな形式と（疑似）日本語の相当形式とその意味。

正名方言形式	日本語相当形式	主要な意味
(1) numimu (2) nudamu (3) nudumu (4) nudutamu	ノミオリ ノンダ ノンデオリ ノンデオッタ	完成・未来　Narrative(叙述) 完成・過去 動作進行・現在 動作進行・過去
(5) numitamu	ノミオッタ	習慣・過去
(6) nudi ʔaːmu (7) nudi ʔattamu	ノンデアリ ノンデアッタ	間接確認（過去） 間接確認・過去
(8) (nuduti ʔaːmu) (9) (nuduti ʔattamu)	ノンデオッテアリ ノンデオッテアッタ	動作進行・過去・間接確認 動作進行・過去・間接確認・過去
(10) nudi ʔakkimu (11) nudi ʔattʃamu (12) nudi ʔakkitamu	ノンデアルキオリ ノンデアルイタ ノンデアルキヨッタ	動作反復・現在 動作反復・過去 動作反復・習慣・過去

（1）～（4）は中核的なテンス・アスペクト形式である。（人称制限？）

（5）は、過去の習慣をあらわす形式である。この形式は、工藤（2007）に述べた沖縄語首里方言と異なり、沖永良部語正名方言では＜直接確認（目撃）＞という意味がない。

（6）～（9）は、間接的エヴィデンシャリティー形式である。テンス的に過去の動作である。沖縄語首里方言にあるような＜意外性＞という意味がない。（8）と（9）は、未確認である。

（10）～（12）は、ʔakkimu（あるく）が入っている形式であり、シテ中止形＋ʔakkimu は、反復をあらわす。次の用例は、シテアルキオリ相当形式の文法化を証明する。ɸunuja（最近）は時間的な局所限定がなく、発話時を含む一定の幅のある時間をあらわす時間名詞であり、hiːdʒu（しょっちゅう）は、動作か運動が多回的におこなわれることをあらわす副詞であり、シテアルキオリ相当形式を述語にもつ文にあらわれる。次の用例には、ʔakkimu は「あるく」という意味をうしない、反復という文法的な意味しかあらわさなくなった。

398)　ʔari=wa ɸunuja hiːdʒu ʔattʃi ʔakkimu
（彼は最近しょっちゅう歩いている）

399)　ʔari=wa hiːdʒu ʔudamuɸuimu wuduti ʔakkimu
（彼はしょっちゅうあちこち走っている）

400)　ʔutu=wa ɸunuja <biːru>=beː nudi ʔakkimu
(弟は最近ビールばっかり飲んでいる)

401)　hiːdʒu kuruma=nu tuːti ʔakkimu
（しょっちゅう車がとおっている）

ところが、シテ中止形＋ʔakkimu という組み合わせでは、いつもʔakkimu の「歩く」という意味がなくなり、＜反復＞という文法的な意味しか持てないわけではない。文法化してい

ないシテ中止形＋ʔakkimu もある。それは、ただ「して（から）歩く」という意味になる。たとえば、以上にあった用例ʔutu=wa ɸunuja <biːru>=be: nudi ʔakkimu は、「弟は最近ビールばっかり飲んでから歩く」という意味を持っていることも考えられる。

なお、シテアルキオリ相当形式は、反復の意味では、シテオリ形式をとらない。そのため、次の用例は、文法化していないʔakkimu と文法化したʔakkimu がともに用いられるとして不可能であり、「彼は最近しょっちゅう歩いている」という意味にならない。

402)　×ʔari=wa ɸunuja hiːdʒu ʔattʃi ʔattʃumu
（彼は最近しょっちゅう歩いて歩いている）

動詞のテ中止形＋ʔakkimu のシテオリ相当形式であるʔattʃumu は組み合わせとしてまったくあらわれないことはないが、そういうばあいは、反復の意味ではなく、日本語と同じく「して歩いている」、または「してかよっている」という意味になり、ʔakkimu は、そのまま「歩く」や「かよう」という意味であるため、ʔakkimu の文法化の例にはならない。次の用例では、ʔakkimu がシテオリ相当形式をとったことから文法化していないことが分かる。

403)　ʔutu=wa ɸunuja <biːru>=be: nudi ʔattʃumu
（弟は最近ビールばかり飲んで歩いている）

北琉球語群のなかのさまざまな変種にシテアルキオリ相当形式が存在するが、文法化の進行の程度がことなる。次の用例は、沖縄語久米島謝名堂方言の例であり、シテアルキオリ相当形式が進行をあらわすことを示す。

404)　wano: nama saki nureːtsuN
（私は今酒を飲んでいる）

正名方言では、シテアルキオリ相当形式のもっとも基本的な意味は、反復であるが、反復は、シテオリ相当形式によってもあらわすことができる。シテアルキオリ形式があらわす反復とシテオリ形式のあらわす反復にどのような違いがあるかは、未確認であるが、シテアルキオリ相当形式の使用は、限定されている。主語はある程度有情性をもたなければ、シテアルキオリ相当形式は用いられず、シテオリ相当形式が用いられる。

405)　×hiːdʒu ʔiʃi=nu ʔutiti ʔakkimu（しょっちゅう石が落ちている）

↓

hiːdʒu ʔiʃi=nu ʔutitumu（しょっちゅう石が落ちている）

もう一つのシテアルキオリ相当形式の使用が不可能なのは、場所が限定される場合である。次の用例では、動作がおこなわれている場所が jaː（家）であるため、シテアルキオリ相当形式の使用が不可能で、シテオリ相当形式が用いられる。

406)　×wakja kwaː=wa hiːdʒu jaː=neti maNga yudi ʔakkimu
（うちの子どもはしょっちゅう家で漫画を読んでいる）

↓

407)　wakja kwa:=wa hi:dʒu ja:=neti maNga yudumu
（うちの子どもは、しょっちゅう家で漫画を読んでいる）

シテアルキオリ形式の使用の特徴は、次のとおりである。

①時間的な限定性はない。
②空間的な限定されていない場合しか用いられない。
③主語がある程度有情性をもち、意図的な運動にしか用いられない。
④主体動作動詞と「行く」にしか確認できていない。

以下、形式を一つずつ見ていく。

10.1.3.1. シオリ相当形式

シオリ相当形式の numimu には、4 つの意味用法が確認できている。

１）完成・未来
２）直前・近未来
３）特性
３）習慣・現在

①＜完成・未来＞

スル相当形式が沖永良部語正名方言にはなくなったため、＜完成・未来＞の意味もこの形式があらわすようになっている。

408)　ʔutu=wa hju: ji:=nu tuki bi:ru numimu
（弟は今日夕飯の時ビールを飲む）

409)　na:tʃa=mu ami ɸuimu
（明日も雨が降る）

410)　wana: na:tʃa <kare:> kamimu
（私は明日カレーを食べる）

②＜直前・近未来＞

411)　[雨の雲が近づいてきて、最初の水滴が落ちるとき]
nama sugu ʔami=ga ɸuimu
（今すぐ雨が降る）

412)　[赤ん坊が汚いものを口に入れようとしている]
nu:gara kamimu
何かを食べる

③＜特性＞

シオリ相当形式は、時間が抽象化された、時間的・ありか限定性がない＜特性＞をもあらわす。次の用例は、「人」、それから「島の男」の＜特性＞を語る例文である。

413)　tʃu:=wa ikinu tame=ni munu kamimu
（人は生きるためにご飯を食べる）

414)　ʃima=nu jiNga=wa <ʃo:tʃu:> numimu
（島の男は焼酎を飲む）

④＜習慣・現在＞

＜習慣＞もシオリ相当形式であらわすことがある。シオリ相当形式によってあらわされる＜習慣＞は、＜特性＞ほど、時間が抽象化されていない。「ことなる時空間でのポテンシャルな規則的繰り返し」である（工藤：2014）。

ʔutu=wa çi:bi <bi:ru> numimu（弟は毎日ビールを飲む）

ʔatʃa=wa ju: <kare:> kamimu（お父さんはよくカレーを食べる）

こういうばあいは、、シテオリ相当形式の nudumu も用いられるが、numimu のばあいは、主語が持つ習慣がその主語の本来的な特性であるということがより強調される。例えば、人間は、食べなければ生きていけないため、ご飯を食べるものであるということが人間の本来的な特質である。

10.1.3.2. シタ相当形式

シタ相当形式である nudamu は、2 つの意味用法がある。

①＜完成・過去＞

415)　kinju:=wa juna=ni ami=nu futtamu
（昨日は夜中に雨が降った）

416)　kinju: ʔutu=wa ji:=nu tuki bi:ru nudamu
（弟は夕食の時ビールを飲んだ）

②＜パーフェクト・現在＞

417)　A:　na: bi:ru nudina?
もうビールを飲んだか
B:　ʔiN, na: nudamu
うん、もう飲んだ

10.1.3.3. シテオリ相当形式

シテオリ相当形式の nudumu は、＜現在・未来＞の＜動作進行＞をあらわし、なお、＜パーフェクト・現在＞、＜習慣＞、＜反復＞もあらわす。

①＜動作進行・現在（未来）＞

418)　wana: nama minoru-jaku=tu ʔagu=ʃi nudumu
（私は今実お兄さんと一緒に飲んでいる）

419)　ʔari=wa nama timitimuN kadumu

（彼は今朝ごはんを食べている）

420)　na: timiti=kara ami ɸuttumu
（もう朝から雨が降っている）

②＜パーフェクト・現在＞

＜パーフェクト・現在＞のばあいは、nudamu も nudumu も用いられるが、nudumu のほうが話している瞬間にもっとレレバントであるというようなニュアンスである。次の用例では、nudamu も可能であるが、nudumu のほうがよく用いられる。用例のお父さんは、話しているとき、もう充分飲んでいるため、話し手は飲ましてほしくないということである。

421)　ʔatʃa=wa na: ʔu:gutu nudumu. gaNʃìNtu nahi numasuna.
（お父さんはもうたくさん飲んでいる。だから、さらに飲ますな）

③＜習慣・現在＞

＜習慣＞のばあいは、シオリ相当形式であらわす＜習慣＞ほど時間の抽象化が進んでいない。

422)　ʔari=wa ɸunuja <ʃo:tʃu:>=jukkwa <bi:ru> nudumu
（彼は最近焼酎よりビールを飲んでいる）

423)　ɸunuja=wa hi:bi ami=nu futtumu
（最近毎日雨が降っている）

424)　ʔari=wa hi:bi <kanodʒo>=ni <tegami> hattʃumu
（彼は毎日彼女に手紙を書いている）

425)　funuja=wa na: ju: ami futtumu
（最近は、よく雨降っている）

426)　ʔami=nu fuinu hi:=wa <saburo:>=wa ja:=neti <maNga>=be: judumu
（雨が降る日は三郎は家で漫画ばっかり読んでいる）

④＜反復・現在＞

＜反復＞は、さらに＜習慣＞ほど時間の抽象化が進んでおらず、ことなる時空間で不規則的に繰り返されているレアルな個別具体的な運動である。

427)　hju:wa ʔari=ga hi:dʒu kwa:ʃì kadumu
（今日は彼がしょっちゅうお菓子を食べている）

428)　jiNga=nu kwa:=wa funuja hi:dʒu ja:=neti aʃidumu
（息子は最近しょっちゅう家で遊んでいる）

＜反復＞は、nudi ʔakkimu にかえても良いばあいもあるが、それについては下で述べる。

10.1.3.4. シテオッタ相当形式

シテオッタ相当形式 nudutamu は、基本的に、シテオリ相当形式の過去形式である。＜過去＞の＜動作進行＞と＜習慣＞と＜反復＞をあらわす。

①＜動作進行・過去＞

429) ja:=gatʃi muduti kittʃanu tuki ʔutu=wa bi:ru nudutamu
（家に帰ってきたとき、弟はビールを飲んでいた）

430) ʔura=ga kittʃanu tuki wakja=wa nama timitimuN kadutamu
（あなたが来たとき、私達はまだ朝ごはんを食べていた）

431) juna=wa <dzu:tto> ami futtutamu
（夜中はずっと雨が降っていた）

②＜反復・過去＞

432) kinju=wa ʔari=ga hi:dʒu kwa:ʃi kadutamu
（今日は彼がしょっちゅうお菓子を食べていた）

③＜習慣・過去＞

433) ʔari=wa ʔanu maNgura ju: bi:ru nudutamu
（彼はそのころよくビールを飲んでいた）

10.1.3.5. シオッタ相当形式

シオッタ相当形式の numitamu は、過去の反復習慣と未遂（非実現）をあらわす。

①＜反復習慣・過去＞

434) mukaʃi wakja=wa wugi to:tʃi kamitamu
（昔、私達はさとうきびを倒して食べていた）

435) wakja ʔatʃa=wa horo=kara mudutanu tuki ʔitʃi:mu <ʃo:tʃu:> numitamu
（うちのお父さんは畑から戻ったときいつも焼酎を飲んでいた）

②＜未遂＞何かの事情によって、運動が実現しなかったときに用いられる。

436) ʔura=ga wanu=mu ʔabiriwa madʒini numitamu
（あなたが私も呼んだら一緒に飲んだ）

437) warabi=nu ʔabune <te:buru>=nu ʔui=nu <bi:ru> numitamu
（子供があわやテーブルの上のビールをもう少しで飲むところだった）

次の用例も未遂の意味があるが、「あやうくそうなりそうになったが結局はしなかった」という場面である。

438) ʔabune ʔinu=nu kusu ɸumitamu
（もう少しでイヌのフンをふむところだった）

沖縄語首里方言とことなり、沖永良部語正名方言のシオッタ相当形式には、＜目撃＞というエヴィデンシャリティー的な意味がない。

439) ×ʔama=ga hisa timitimuN kamitamu

↓

ʔama=ga hisa timitimuN kadamu（お母さんがさっき朝ごはんを食べた）

10.1.3.6. シテアリ相当形式

シテアリ相当形式は、形跡の知覚に基づく過去の動作の推定である＜間接確認＞というエヴィデンシャリティー的意味をもつ。

440) [弟の顔が赤くなっているのを見て]
ʔutu=nu nudi ʔa:mu
（弟が飲んだんだ）

441) [朝起きて道が濡れているのを見て]
juna ʔami=nu futti ʔa:mu
（夜雨が降ったんだ）

442) [家のなかにカレーの匂いがして]
wakja ʔuja=ga <kare:> kadi ʔa:mu
（うちの親がカレーを食べたんだ）

沖縄語首里方言では、シテアル相当形式にもう一つ、＜意外性＞という意味がある。例えば、ʔare: numaNdi gaitʃutaʃîga nude:saja（彼は飲まないと言っていたが、飲んだね）というのがあるが、沖永良部語正名方言では、そういう使い方がない。

10.1.3.7. シテアッタ相当形式

シテアッタ相当形式の nudi ʔattamu は、＜間接確認＞の＜過去＞をあらわす。

443) [弟の顔が赤かったのを思い出して]
ʔutu=nu nudi ʔattamu
（弟が飲んだんだ）

444) [朝起きて道が濡れていたのを思い出して]
juna ʔami=nu futti ʔattamu
（夜雨が降ったんだ）

445) [家のなかにカレーの匂いがしていたのを思い出して]
wakja ʔuja=ga <kare:> kadi ʔattamu
（うちの親がカレーを食べたんだ）

10.1.3.8. シテオッテアリ相当形式

シテオッテアリ相当形式の nuduti ʔa:mu は＜過去の動作進行の間接確認＞と＜過去の動作のパーフェクトの間接確認＞をあらわす。

①＜動作進行・過去・間接確認＞

446)　[本がテーブルに置いてあるのを見て]
ʔutu=nu <beNkjoː> ʃuːti ʔaːmu
（弟が勉強をしていたんだ）

447)　[ビール瓶とポテトチプスの残りを見て]
ʔutu=nu ʔaguNkja=tu madʒini nuduti ʔaːmu
（弟が友達と一緒に飲んでいたんだ）

②＜パーフェクト・過去・間接確認＞

448)　[車の前に大きな凹みを見て、その人が飲酒運転をし、何かとぶつかっただろうと思って]
ʔunu tʃuː=nu nuduti ʔaːmu
（その人が飲んでいたんだ）

10.1.3.9. シテオッテアッタ相当形式

シテオッテアッタ相当形式の nuduti ʔattamu は、＜過去の動作進行の間接確認＞の＜過去＞と＜過去の動作のパーフェクトの間接確認＞の＜過去＞をあらわす。

①＜動作進行・過去・間接確認・過去＞

449)　[本がテーブルに置いてあるのを思い出して]
ʔutu=nu <beNkjoː> ʃuːti ʔattamu
（弟が勉強していたんだ）

450)　[ビール瓶とポテトチプスの残りがあるのを思い出して]
ʔutu=nu ʔaguNkja=tu madʒini nuduti ʔattamu
（弟が友達と一緒に飲んでいたんだ）

②＜パーフェクト・過去・間接確認・過去＞

451)　[車の前に大きな凹みがあるのを思い出して]
ʔunu tʃuː=nu nuduti ʔattamu
（その人が飲んでいたんだ）

10.1.3.10. シテアルキオリ相当形式

シテアルキオリ形式の nudi ʔakkimu は、＜現在＞の＜反復＞をあらわす。上に述べたように、用いられる状況が限定されている。主語はある程度有情性をもち、運動が意図的でないと、用いられず、空間が限定されていないばあいしか用いられない。

452)　ʔari=wa ɸunuja hiːdʒu ʔattʃi ʔakkimu
（彼は最近しょっちゅう歩いている）

453)　ʔari=wa hiːdʒu ʔudamuɸuimu wuduti ʔakkimu
（彼はしょっちゅうあちこち走っている）

454)　ʔutu=wa ɸunuja <biːru>=beː nudi ʔakkimu
(弟は最近ビールばっかり飲んでいる)

455)　hiːdʒu kuruma=nu tuːti ʔakkimu
（しょっちゅう車がとおっている）

10.1.4.主体動作客体変化動詞

以下の表で示しているとおり、主体動作客体変化動詞には、14 の形式がある。主体動作客体変化動詞では、シテアリ(6)・シテアッタ(7)相当形式が＜客体結果＞という意味も持っている。

9. 動詞ʔutuʃimu「落とす」のさまざまな形式と（疑似）日本語の相当形式とその意味。

正名方言形式	日本語相当形式	主要な意味
(1) ʔutuʃimu (2) ʔututʃamu (3) ʔututʃumu (4) ʔututʃutamu	オトシオリ オトシタ オトシテオリ オトシテオッタ	完成・未来 完成・過去 動作進行・現在 動作進行・過去
(5) ʔutuʃitamu	オトシオッタ	習慣・過去
(6) ʔututʃi ʔaːmu (7) ʔututʃi ʔattamu	オトシテアリ オトシテアッタ	1.客体結果・現在 2.間接確認（過去） 1.客体結果・過去 2.間接確認・過去
(8) ʔututʃuti ʔaːmu (9) ʔututʃuti ʔattamu	オトシテオッテアリ オトシテオッテアッタ	動作進行・過去・間接確認 動作進行・過去・間接確認・過去
(10) (ʔututʃi ʔatti ʔaːmu) (11) (ʔututʃi ʔatti ʔattamu)	オトシテアッテアリ オトシテアッテアッタ	客体変化・過去・間接確認 客体変化・過去・間接確認・過去
(12) ʔututʃi ʔakkimu (13) ʔututʃi ʔattʃamu (14) ʔututʃi ʔakkitamu	オトシテアルキオリ オトシテアルイタ オトシテアルキオッタ	動作反復・現在 動作反復・過去 動作反復・習慣・過去

10.1.4.1.シオリ相当形式

シオリ相当形式のʔutuʃimu には、4 つの意味用法が確認できている。

１）完成・未来
２）直前・近未来
３）習慣・現在
４）反復

①＜完成・未来＞

456)　<taʃikani> ʔanu kwaː=wa naːtʃa kurubu ʔutuʃimu
（確かにあの子供は明日ミカンを落とす）

457)　hju:=wa ʔutu=nu ja: ʔe:mu
（今日は、弟が家をあける）

②＜直前・近未来＞

458)　［赤ん坊がぬいぐるみを持っている手を乳母車の外へ出して］
jo:jo=wa <nuigurumi> ʔutuʃimu
（赤ん坊はぬいぐるみを落とす）

459)　［子供がテーブルの上にあるものを取ろうとして］
ʔanu warabi=ga <te:buru>=nu ʔwa:bi=nu muN tuimu
（あの子供がテーブルの上のものをとる）

③＜特性＞

460)　<paNjasaN>=wa <paN> tʃukuimu
（パン屋さんはパンを作る）

④＜習慣・現在＞

461)　ʔama=nu <paNjasaN>=wa ma:ni=wa <ke:ki>=mu tʃukuimu
（あそこのパン屋さんは普段はケーキも作る）

462)　ma:ni=wa ʔama=ga jaa ʔe:mu
（普段はお母さんが家を開ける）

463)　warabi=wa hi:bi kurubu=nu mi: ʔutuʃimu
（子供は毎日ミカンを落とす）

10.1.4.2. シタ相当形式

シタ相当形式であるʔututʃamu は、三つの意味用法がある。

①＜完成・過去＞

464)　kwa:=nu kinju kurubu ʔututʃamu
（子供が昨日ミカンを落とした）

465)　ʔama=ga kinju kwa:ʃi kittʃamu
（お母さんが昨日お菓子を切った）

466)　funeda ʔattʃattantu, ja: ʔe:tamu
（この間あつかったから、家を開けた）

②＜パーフェクト・現在＞

467)　A:　na: kwa:ʃi kittʃina?
（もうお菓子を切ったか）
B:　ʔiN, na: kittʃamu
（うん、もう切った）

468)　A:　ja:=wa na: ʔe:tina?
（家はもう開けたか）
B:　ʔiN, na: ʔe:tamu
（うん、もう開けた）

10.1.4.3 シテオリ相当形式

＜反復・現在＞

469)　ʔuranda=nu jiNga=nu ʔattʃamu =di gaitʃi, hi:dʒu <mado> ʔe:tumu
オランダの男が熱いと言って、しょっちゅう窓を開けている。

10.1.4.4 シテアリ相当形式

主体動作客体変化動詞のばあいには、シテアリ相当形式のʔututʃi ʔa:mu は、＜間接確認＞のみならず、＜客体結果＞をもあらわす。

①＜客体結果・現在＞

＜客体結果＞のばあいは、沖永良部語正名方言では、日本語標準語とちがって、主体を主語として明示する。次の用例のとおりであるが、日本語訳では、主体を主語ととしてあらわす擬似日本語である。

470)　ʔama=ga kwa:ʃi kittʃi ʔa:mu
（お母さんがお菓子を切ってある）

471)　<taro:>=ga haʃi ʔe:ti ʔa:mu
（太郎がふすまを開けてある）

②＜間接確認・現在＞

＜間接確認＞としての用法は、上に述べた主体動作動詞と同じである。

472)　[今窓は閉まっているが、部屋が寒いのを感じて]
<taro:>=ga mata <mado> ʔe:ti ʔa:mu
（太郎がまた窓を開けたんだ）

473)　[子供の部屋にミカンを落とすための棒がちらがっているのを見て]
kwa:=ga kurubu ʔututʃi ʔa:mu
（子供がミカンを落としたんだ）

10.1.4.5.シテアッタ相当形式

シテアッタ相当形式は、シテアル相当形式の過去形で、＜客体結果・過去＞と＜間接確認・過去＞をあらわす。

①＜客体結果・過去＞

＜客体結果・現在＞と同じく、主体が主語として明示され、日本語標準語訳は、擬似訳である。

474)　ʔama=ga kwa:ʃi kittʃi ʔattamu

（お母さんがお菓子を切ってあった）

475) ʔaʃi=ga ʔiju ho:ti ʔattamu
（おばあさんが魚を買ってあった）

476) <teNiN>=nu <kaNbaN> ʔidʒatʃi ʔattamu
（店員が看板を出してあった）

②＜間接確認・過去＞

477) [子供の部屋にミカンを落とすための棒がちらばっているのを思い出して]
kwa:=nu kurubu ʔututʃi ʔattamu
（子供がミカンを落としたんだ）

478) [今窓は閉まっているが、部屋が寒かったのを思い出して]
<taro:>=ga mata <mado> ʔe:ti ʔattamu
（太郎がまた窓を開けたんだ）

10.1.4.6. シテオッテアリ相当形式

シテオッテアリ相当形式のʔututʃuti ʔa:mu は＜過去の動作進行の間接確認＞をあらわす。

479) [テーブルに包丁が置いてあるのと半分まで切れているお菓子を見て、「お母さんがお菓子を切っている最中だっただろう」と思って]
ʔama=ga kwa:ʃi kittʃuti ʔa:mu
（お母さんがお菓子を切っていたんだ）

480) [ミカンの木の下にミカンが落ちているのと、ミカンを落とすための棒がころがっているのを見て、「子供がミカンを落としている最中だっただろう」と思って]
kwa:=nu kurubu ʔututʃuti ʔa:mu
（子供がミカンを落としていたんだ）

10.1.4.7. シテオッテアッタ相当形式

シテオッテアッタ相当形式のʔututʃuti ʔattamu は、＜過去の動作進行の間接確認＞の＜過去＞をあらわす。

①＜動作進行・過去・間接確認・過去＞

481) [テーブルに包丁が置いてあるのと半分まで切れているお菓子を見て、「お母さんがお菓子を切っている最中だっただろう」と思ったのを思い出して]
ʔama=ga kwa:ʃi kittʃuti ʔattamu
（お母さんがお菓子を切っていたんだ）

482) [ミカンの木の下にミカンが落ちているのと、ミカンを落とすための棒がころがっているのを見て、「子供がミカンを落としている最中だっただろう」と

思ったのをおもだして]
kwa:=nu kurubu ʔututʃuti ʔattamu
（子供がミカンを落としていたんだ）

10.1.4.8. シテアルキオリ相当形式

シテアルキオリ形式の nudi ʔakkimu は、＜現在＞の＜反復＞をあらわす。主体動作動詞でも述べたように、用いられる状況が限定されている。

483) ʔunu kwa:=wa funuja ʔitʃi:mu kurubu=nu mi: ʔututʃi ʔakkimu
（その子供は、最近いつもミカンの実を落としている）

10.1.4.9. シテアルイタ相当形式

シテアルイタ相当形式は、＜過去＞の＜反復＞をあらわす。

484) ʔunu kwa:=wa kinju hi:dʒu kurubu ʔututʃi ʔattʃamu
（その子供は、昨日しょっちゅうミカンを落としていた）

10.1.4.10. シテアルキオッタ相当形式

シテアルキオッタ相当形式のʔututʃi ʔakkitamu は、＜過去＞の＜習慣＞をあらわす。＜反復＞が＜習慣＞になるというのは、動作が異なる時空間で不規則的に繰り返されていることが規則的におこっていたことになるということである。

485) ɸudu=nu natʃi=wa <ʔoraNda>=nu niʃe=nu ʔattʃamu =di gaitʃi
去年の夏は、オランダの少年が暑いと言って
hi:dʒu <seNpu:ki> tʃikiti ʔakkitamu
しょっちゅう扇風機をつけていた

10.2.正名方言シテアルキオリの歴史的な経路と北琉球語群の中の位置

人間の体の姿勢（立つ、座る、寝る）や、体の動き（あるく）をあらわす動詞が助動詞化し、アスペクト的な意味をもつようになるのは、世界の言語によくみられる現象である。「あるく」に相当する動詞が助動詞化し、アスペクト的な意味をあらわすようになった例として、これまで、オランダ語で＜反復＞（Lemmens 2005）、テュルク諸語のさまざまな言語変種で＜動作継続＞をあらわす（Anderson 2002）などの報告がある。

琉球諸語においても、さまざまな変種で「あるく」の助動詞化がみられる。この傾向は、南琉球語群でも確認できているが[17]、北琉球語群では広い地域でより一般的にみられる[18]。北琉球語群の変種ごとにテンス・アスペクト体系の一部として当該形式にふれた研究はある。しかし、テ中止形＋「あるく」形式をテーマとする研究は、まだない。

橋尾(1993)は、沖縄北部伊江島方言におけるテ中止形＋あるく形式が＜進行（動作継続）＞や＜反復＞をあらわすことにふれ、島袋（1997）は、同じ沖縄北部方言に属する今帰仁村謝名方言の当該形式について、＜反復＞と＜習慣＞をあらわすと述べる。また、上村(2003)

[17]Lawrence（2012）によると、八重山語鳩間方言では、＜習慣＞をあらわす numi-aakuN（「飲む」連用形＋「あるく」）をはじめ、ʔaakuN をふくむアスペクト的な形式が存在するが、本報告では、あつかわないことにする。

[18] 当該形式は、北琉球語群のなかでは、特に沖永良部与論沖縄北部語群で広く見られる。沖縄中南部語群に属する離島でもよく見られるが、首里那覇方言にはない。

によると、沖縄中南部西原方言では、当該形式が「してばかりいる」というニュアンスをあらわすと述べている。

本論文では、北琉球語群に属する変種である沖永良部島正名方言、沖縄島北部今帰仁村謝名方言、沖縄久米島町謝名堂方言を対象にする。

10.2.1.北琉球語群におけるテ中止形＋ʔakkimu のアスペクト的意味

このセクションでは、上にのべた北琉球語群の 3 つの言語のアスペクト的な意味を記述する。

10.2.1.1.沖永良部正名方言

沖永良部正名方言のテ中止形＋ʔakkimu 形式は、本動詞が主体動作動詞の場合、＜反復＞と＜習慣＞をあらわす。工藤真由美（2004）の定義によると、＜反復性＞というのは、次のとおりである。

> ＜異なる時空間＞における事象のポテンシャルな複数性で、ここから＜思考による一般化＞がはじまる。規則的な場合も不規則的な場合もある。

次の用例は、テ中止形＋ʔakkimu 形式の＜反復＞の用例であり、ある場所に車がよく通ることを観察した上での発話である。

486) hi:dʒu kuruma=nu tu:ti ʔakkimu
しょっちゅう車がとおっている

487) hi:dʒu kwa:ʃi kadi ʔakkimu
しょっちゅうお菓子を食べている

488) <ke:tai>=ʃi <ge:mu>=be: ʃi ʔakkimu
携帯でゲームばっかりやっている

489) ʔuni mittʃuʃiga hi:dʒu hittu=nu tudi ʔakkimu
海を見ているが、しょっちゅうクジラが飛んでいる

490) wakja kwa: hatte=gatʃi sooti kittʃaʃiga hatarakadana <ke:tai>=be: mittʃi ʔakkimu
うちの子畑に連れて来たが、働かないで、携帯ばっかり見ている

それに対し、＜習慣性＞というのは、次のとおりである。

> ＜思考による一般化＞によって判断されたポテンシャルな規則的繰り返し。規則的繰り返しという量的アスペクトとしての側面もあるが、＜非レアル＞というムード的側面が前面化するハイブリッドな範疇である。

次の用例は、テ中止形＋ʔakkimu 形式の＜習慣＞の用例であり、太郎が 6 時に家をあけているという出来事を話し手が何度も観察し、そこに規則性を見出した上での発話である。

491) taro:=wa hiNbi <rokudʒi>=ni ja: ʔe:ti ʔakkimu
太郎は毎日 6 時に家を開けている

492) ʔari=wa kuruma=nu jaburiti=du ɸunuja ʔattʃi ʔakkiru

彼は車が壊れたから最近歩いている

493) ʔaNta=wa hiːbi ʔama=neti=mu ʔmaː=neti=mu joːti ʔakkimu
彼らは毎日あちこち集まっている

494) ʔari=ga <giːN> natti, miːsaːnu <kuːkoː> tʃukuimu =ditʃi gaitʃi ʔakkimu
彼が議員になって、新しい空港を作らないといけないとばっかり言っている

＜反復＞と＜習慣＞は、＜一回性＞から＜特性＞にいたる＜時間的限定性＞の連続体にある一点である。＜レアリティー＞の観点から言えば、＜レアル＞から＜ポテンシャル＞までの連続体である。次の図で示しているように、左から右へ行くほど時間が抽象化されていく。

【時間的限定性】

＜レアル＞			＜ポテンシャル＞
〈多回〉	〈反復〉	〈習慣〉	〈特性〉
（同じ時空間での繰り返し）	（異なる時空間でのアクチュアルな繰り返し）	（異なる時空間でのポテンシャルな規則的繰り返し）	（恒常的な本質的な特徴であるポテンシャルな事象）

（正名方言いおけるテ中止形＋ʔakkimu 形式の使用）

＜多回＞から＜反復＞へのステップは、＜同じ時空間＞から＜異なる時空間＞へのステップになるため、厳密に言えば、連続的ではない。＜反復＞、＜習慣＞、＜特性＞は、純粋な連続体をなしている。正名方言におけるテ中止形＋ʔakkimu 形式の使用は、＜習慣＞と＜特性＞の間のどこかで不可能になる

テ中止形＋ʔakkimu 形式を述語にもつ文には、ɸunuja（最近）と hiːdʒu（しょっちゅう）という単語がよくあらわれる。ɸunuja は時間的な局所限定がなく、発話時を含む一定の幅のある時間をあらわす時間名詞であり、hiːdʒu は、運動が多回的、あるいは反復的におこなわれることをあらわす副詞である。

495) ʔutu=wa ɸunuja <biːru>=beː nudi ʔakkimu
弟は最近ビールばっかり飲んでいる

496) ʔunu kwaː=wa funuja ʔitʃiːmu kurubu=nu miː ʔututʃi ʔakkimu
その子供は、最近いつもミカンの実を落としている

497) ʔari=wa hiːdʒu ʔattʃi ʔakkimu
彼はしょっちゅう歩いている

498) taroː=wa hiːdʒu jamatu=gatʃi ʔidʒi ʔakkimu
太郎はしょっちゅう日本本土に行っている

10.2.3.今帰仁村謝名方言

沖永良部のʔakkimu（あるく）は、今帰仁村謝名では、ʔattʃuN であらわれる。テ中止形＋ʔattʃuN 形式は、アスペクト的な意味をあらわす場合、形式上、かならず融合する。融合しない場合は、「して　あるく」という意味合いになる。融合は、次のとおりになる。

tʰu:ruN（とおる）	:	tʰu:ti	＋	ʔattʃuN	→	tʰu:tattʃuN
tʰatʃuN（たつ）	:	tʰatʃi	＋	ʔattʃuN	→	tʰatʃattʃuN

沖永良部正名方言と同じく、今帰仁村謝名方言では、当該形式が主体動作動詞の＜反復＞と＜習慣＞をあらわすが、正名方言とことなり、主体変化動詞では、＜反復＞をあらわすことができる。

499) tʰunai=nu <ʔokkaN>=ja me:nitʃi <ke:ki> ʃiko:tattʃuN
隣のお母さんは毎日ケーキを作っている

500) <ʔokka:>=ja tfikaguru de:kuni tʃittʃattʃuN
お母さんは最近大根を切っている

501) kʰu:=ja pittʃui <ʔosupure:> tʰu:tattʃuN
今日は、しょっちゅうオスプレイがとおっている

502) pʰisa: jamitu tʰuNgwa=nti jitʃattʃuN
足が痛いから、台所で（しょっちゅう）座っている

503) pʰisa: jadi jiraraNgutu tʰatʃattʃuN
足が痛くて座れないから、（しょっちゅう）立っている

504) <tʰo:kjo:>=Nti=ja jaNme:=tʃi tʃu:=nu baNnai ʃidʒattʃuN
東京では病気で人がどんどん死んでいる

謝名方言のテ中止形＋ʔattʃuN 形式が＜習慣＞をあらわす場合は、きわめて時間が抽象化した場合もある。なお、以下のような例の場合は、正名方言ではふつうテオリ相当形式が用いられる。

505) ʔari=ja kʰiga: ʃitʃi: gusa:ni ʃitʃattʃuN[19]
彼が怪我して杖をしている

506) A: ʔanu tʃu:=ja harusa: je:ʃiga, nu: sukotattʃuga?
あの人は農家だけど、何を作っている？
B: ʔanu tʃu:=ja suikwa sukotattʃuN
あの人は西瓜を作っている

[19] この用例は、「彼が怪我して杖をして歩く」という意味にはならない。「杖をして歩く」という、ʔattʃuN の語彙的な意味で用いられるばあいは、融合がおこらず、gusa:ni ʃitʃi: ʔattʃuN になる。

10.2.4.久米島町謝名堂方言

久米島町謝名堂方言では、（あるく）は、ʔattsuN になり、テ中止形＋あるく形式は、今帰仁村謝名方言と同じく、アスペクト的な意味で用いられる場合に融合する。次のとおりである。

tu:juN（とおる）	:	tu:ti	＋	ʔattsuN	→	tu:te:tsuN
katsuN（書く）	:	katʃi	＋	ʔattsuN	→	katʃe:tsuN

当該方言では、主対動作動詞の＜反復＞と＜習慣＞と＜動作継続＞をあらわし、主体変化動詞の＜反復＞をあらわす。以下の用例のとおりである。＜結果継続＞は、シテオリ相当形式によってあらわされる。

＜動作継続＞

507) wano: nama tumitimuN kare:tsuN
私は今朝ごはんを食べている

508) ʔaNma=ja toNgwa=yo:ti jase: tsukute:tsuN
お母さんは台所で野菜を作っている

＜反復＞

509) ʔiɸu:na jaNme:=ga ʔa:ti ʔiju=ga me:nitʃi ʃidʒe:tsuN
変な病気があって、魚が毎日死んでいる

510) ja:=nu tʃa=kara to:bi:ra=nu gwasagwasa Ndʒite:tsuN
家の下からゴキブリがうようよ出ている

＜習慣＞

511) watta: su:=ja me:nitʃi <kaNkokudorama> Ntʃe:tsuN
うちのお父さんは毎日韓国ドラマを見ている

512) ʔure: me:nitʃi na:ha=katʃi Ndʒe:tsuN
彼は毎日那覇に行っている

10.2.5.三つの方言のテ中止形＋あるく形式のアスペクト的な意味の一覧

	反復	習慣	動作継続（主体動作動詞のみ）
沖永良部正名	○	○	×
今帰仁村謝名	○	○	×
久米島謝名堂	○	○	○

上の図で見られるように、テ中止形＋あるく形式が＜反復＞、＜習慣＞、＜動作継続＞を3つともあらわすのは、謝名堂方言のみであり、テ中止形＋あるく形式が＜反復＞と＜習慣＞をあらわすのは、正名方言と謝名方言である。

10.2.6. テ中止形＋ʔakkimu の使用の制限

正名方言におけるテ中止形＋ʔakkimu 形式の使用には、次の 3 つの制限がある。

①主語がある程度有情性をもち、意図的な運動にしか用いられない
②空間的に限定されていない場合しか用いられない
③主体変化動詞には用いられない

以下この 3 つを言語変種ごと見ていく。

10.2.7 主語がある程度有情性をもち、意図的な運動にしか用いられない

1 つ目は、主語がある程度の有情性をもち、意図的な動作にしか使えないことである。次の用例では、無情物である「石」が主語になり、＜反復＞と＜習慣＞をあらわす場合は、テ中止形＋ʔakkimu 形式が用いられず、いわゆるシテオリ相当形式である-tumu 形式が用いられる。

513) × hi:dʒu ʔiʃi=nu ʔutiti ʔakkimu
↓
hi:dʒu ʔiʃi=nu ʔutitumu
しょっちゅう石が落ちている

514) × hi:dʒu ʔami=nu ɸutti ʔakkimu
↓
hi:dʒu ʔami=nu ɸuttumu
しょっちゅう雨が降っている

「ある程度」の有情性というのは、かならず人間か動物でなくてもよいということである。次の用例で示されるように車や飛行機などにも用いられる。

515) hi:dʒu kuruma=nu tu:ti ʔakkimu
しょっちゅう車がとおっている

516) ɸunuja hi:dʒu <hiko:ki>=nu tudi ʔakkimu
最近しょっちゅう飛行機が飛んでいる

謝名方言では、正名方言とことなり、主語が有情性を持たなくても当該形式が用いられる。次の用例のとおりである。

517) nu:ge:ra namadʒibuN ʔami pʰutattʃuN
なぜかこのごろ雨が降っている

久米島町謝名堂方言の当該形式は主語が無情物であっても、用いられる。

518) ʔami ɸute:tsuN
雨が降っている

519) haNta=kara hittʃi: ʔiʃi=nu ʔutite:tsuN
崖からしょっちゅう石が落ちている

10.2.8. 空間的に限定されていない場合しか用いられない

正名方言における当該形式は、一つの限られた空間の意味をあらわす名詞と共には用いられない。次の正名方言の用例では、動作がおこなわれている場所が ja:（家）であるため、テ中止形＋ʔakkimu 形式の使用が不可能で、シテオリ相当形式が用いられる。

520)　×　wakja kwa:=wa hi:dʒu ja:=neti <maNga> judi ʔakkimu
↓
wakja kwa:=wa hi:dʒu ja:=neti <maNga> judumu
うちの子どもは、しょっちゅう家で漫画を読んでいる

次の用例で示すようにのこりの 2 つの言語変種では、当該形式の使用には、そのような限定がない。

521)　（謝名）　ʔari=ga　ja=Nti=ja　<bi:ru>=bike:=du　nudattʃuru
彼が家ではビールばっかり飲んでいる

522)　（謝名堂）　ʔari=ga me:nitʃi ja:=jo:ti <maNga>=gatʃa:=ru jure:tsuru
かれが毎日家で漫画ばっかり読んでいる

10.2.9.主体変化動詞にテ中止形＋ʔakkimu 形式が用いられない

正名方言では、主体変化動詞にテ中止形＋ʔakkimu 形式が用いられない。主体変化動詞の＜反復＞は、シテオリ相当形式があらわす。

523)　×　<ʔaɸurika>=neti=wa <bjo:ki>=ʃi tʃu:=nu hi:bi ʃidʒi ʔakkimu
↓
<ʔaɸurika>=neti=wa <bjo:ki>=ʃi tʃu:=nu hi:bi ʃidʒumu
アフリカでは病気で人が毎日死んでいる

次の用例で示しているように今帰仁村謝名方言と久米島町謝名堂方言では、主体変化動詞にも当該形式が用いられる。

10.2.10 三つの方言のテ中止形＋ʔakkimu の使用が限定されることの一覧

	有情性制限	空間名詞同居可能性	主体変化動詞可能
沖永良部正名	○	×	×
今帰仁村謝名	×	○	○
久米島町謝名堂	×	○	○

上の図で見られるように、正名方言だけで当該形式の使用が主語の有情性と空間的に限定されていない場合しか用いられないことと、主体変化動詞が当該形式をとらないことによって制限されている。これは、正名方言の場合にʔakkimu の主体動作動詞としての意味と、「移動」という意味がのこっているためであると思われる。

10.2.11 まとめ

以上、北琉球語群の 3 つの変種におけるテ中止形＋ʔakkimu 形式の使用を比較し、ʔakkimu の助動詞としての文法化の通時的な経路が見えてきたかというと、そうだとは、かならずしも言えない。

正名方言のデータを考慮に入れると、テ中止形＋ʔakkimu 形式の一番本来的なアスペクト的意味は、＜反復＞であると考えられる。今帰仁村謝名方言にも久米島町謝名堂方言にも、当該形式が＜反復＞という意味をもち、＜反復＞が一番広く見られる意味である。

謝名方言と謝名堂方言には、当該形式の使用に有情性制限がないこと、空間名詞同居可能性があること、主体動作動詞と主体変化動詞の両方に用いられることから、当該形式の意味が正名方言のそれより抽象化していると考えられる。

異なる時空間でのアクチュアルな繰り返しがさらに繰り返され、抽象化し、異なる時空間でのポテンシャルな繰り返しになれば、＜反復＞の意味が＜習慣＞まで広がる。

＜反復＞から＜動作継続＞へと意味が広がるということは、考えがたい。文法化の経路の出発点が＜多回＞だとすれば、次のように考えることができる。Bybee 他（1994：165）によると、＜多回＞と＜継続＞の違いは、主に動詞の種類と関係がある。「撃つ」のような 1 つの動作をあらわす動詞は、動作が続けば、その動作の多回になる。「考える」のようなより抽象的な動作の場合は、その動作が続けば＜継続＞になる。

テ中止形＋ʔakkimu 形式は本来「して、あるく」という意味で＜多回＞であり、1 つの動作しかない動詞の＜多回＞の意味は、同じ動作が続いているという側面では＜動作継続＞の意味と重なる。当該形式が再分析（reanalysis）され、＜動作継続＞の意味が前面化した。テ中止形＋ʔakkimu 形式の＜動作継続＞としての使用が他の種類の動詞まで広がったと考えられる。謝名堂方言では、当該形式が以上の文法化の経路で＜動作継続＞をあらわすようになったが、正名方言と謝名方言では、そこまで意味が広がらなかった。

つまり、当該形式の発展の経路に関し、＜多回＞というよりアクチュアルな意味からポテンシャル化し、反復まで広がり、さらに　＜習慣＞まで広がる。今帰仁村謝名方言と久米島町謝名堂方言では、＜多回＞の場合は、融合形式にはならないが、それよりポテンシャル化すると、融合形式が使用される。

11 章待遇表現

本節では、沖永良部語正名方言の待遇表現を日本語標準語に対応させて得られた待遇表現形式とその用法について述べる。できる限り、琉球諸語に属するほかの言語変種との比較もおこなう。比較は、主に重野裕美 2010、2013 及び、西岡敏 2003、2011 に照らし合わせておこなう。

目上に対して丁寧な言葉を使うことを正名方言でʔoːhoː-ʃiːmu「オーホーする」という。沖永良部島の人々が強制的に学校教育で日本語を用いさせられたことと、他地域との交流が増えたことによって、沖永良部語を使用するのが当たり前である社会的な場面、いわゆる使用領域（英語：domain）が狭くなり、沖永良部の人々同士でも日本語を用いるようになっているため、沖永良部語の敬語体系を日常生活で自然に覚える環境が破壊されている。沖永良部語の母語話者の中でも敬語体系を断片的に習得している人が少なくない。そのため、敬語体系を習得している程度にきわめて激しい個人差が見られる。

正名方言の待遇表現形式を大きく 2 つにわけられる。規則的な手続きを経て作られる派生形式（日本語標準語の例：書く→書きます・叔父→叔父さん）と不規則的な対応をする補充形式（日本語標準語の例：食べる→召し上がる）がある。

11.1 待遇表現形式

本節では、当該方言の応答詞、人称代名詞、述語における待遇表現形式を記述する。

10. 述語における待遇表現

	動詞	接辞
敬語	ʔmeːmu (ʔmoːramu) ʔmeːmu (ʔmeːramu) ʔoiʃimu (ʔoiʃiramu) jaʃimeːmu (jaʃimoːramu) ʔudumimu (wudumamu) [taboimu] tabori	-joːri/-oːri [-ʃoːri/-NʃoːRi]
謙譲語	ɸugamimu (ɸugamamu) ʔoiʃimu (ʔoiʃiramu) tumu-ʃiːmu(tumu-ʃiramu)	-
丁寧語	-	-jabu- dero

11.1.1 応答詞

話し相手から「あなたも行くか」と聞かれて、「うん、行く」と肯定の返事をする応答詞には、待遇意図による使い分けがある。次の用例のとおりである。

524) I. A=目上、B=目下

A: ʔura=mu ʔik-i-N=nja?

あなたも行くか？

B: ʔoː, ʔik-jabu-N =dja

はい、行きますよ。

II. A=目下、B=目上

A: ʔui=mu ʔme-N=nja?

あなた様もいらっしゃるか？
B: ʔiN, ʔik-i-N =dja
うん、行くよ。

重野（2013：48-49）によると、目上に対してʔo:が用いられ、目下・同等に対してʔiN が用いられるのは、奄美群島で話される北琉球語群の言語で広く見られるパターンである。

名前を呼ばれる際、または、話し相手がいうことが聞こえない際に用いられる応答詞においても待遇意図による使い分けがある。次の用例で示すように名前が呼ばれる際に ho: が目上、nu:が目下と同等に対して用いられる。

525) I. A=目上、B=目下
A: ɸumiko!
ふみ子！
B: ho:?
はい?
II. A=目下、B=目上
A: ɸumiko-aja!
ふみ子お姉さん！
B: nu:?
なに？

話し相手がいうことが聞こえなくて聞き返す際にも目上に対して ho:が用いられるが、目下と同等に対しては、日本語の「何と」に相当する nu:di が使われる。

526) I. A=目上、B=目下
A: saki num-i-N=nja?
酒を飲むか？
B: ho:?
はい?
A: saki num-i-N=nja =di
酒を飲むかと。
II. A=目下、B=目上
A: saki oiʃ-i-N=nja?
酒を召し上がりますか？
B: nu:=di?
何と？
A: saki oiʃ-i-N=nja?
酒を召し上がりますか？

応対詞のʔo:と ho:が用いられるのは、奄美群島のさまざまな言語変種のみならず、沖縄語のいわゆる平民敬語でも見られる（仲宗根 1987：221）。「敬語を使う」という意味のʔo:ho:-ʃi:mu「オーホーする」という言い方の由来は、このʔo:と ho:にあると思われる。

話し相手から「あなたも行くか」と聞かれて、「いや、行かない」と否定の返事をする応答詞にも待遇意図による使い分けがある。次の用例のとおりである。

527) I. A=目上、B=目下

A: ʔura=mu ʔik-i-N=nja?
あなたも行くか？

B: ʔajaburaN, ʔik-jabu-ra-N =dja
いいえ、行きませんよ。

II. A=目下、B=目上

A: ʔui=mu ʔme-N=nja?
あなた様もいらっしゃるか？

B: ʔai, ʔik-a-N =dja
いや、行かないよ。

11.1.2 二人称代名詞

下の表で示すように、2 人称代名詞には、3 つからなる区別がある。ʔura は、目下と同等に対して用い、琉球諸語において同じ系統の言葉が広く見られる（中本正智 1983：162）。ʔui は、北琉球語群の中で、徳之島の一部でも用いられる（東京大学言語学研究室 1977：140）。沖永良部島では、ʔui の使用は、主に正名、住吉、田皆という 3 つの隣り合っている集落を中心とし、そこの人々同士でかならず目上に対してその言い方を用いる。ところが、沖永良部島の東に行くほど、ʔui の使用が少なくなり、和泊町の人々には、理解されないようであるため、正名の人々には、よその集落の人に対してʔui を用いれば通じないという意識が強い。そのため、ʔui の分布がかつてより広かったが、和泊を中心とする島の東のほうで用いられる nata がʔui の分布地域に浸透してきたと考えられる。そのため、今日は、正名の人々がよその集落の目上に対して nata を用いる傾向にある。話者の内省によれば、正名・住吉・田皆の人同士には、ほとんど用いないが、nata が正名方言話者の言語レパートリーにあるため、ここで正名方言として記述することにする。nata は、北琉球語群で広く見られる na:系の二人称代名詞に属すると思われる（中本正智 1983：162-163）。

話し相手のことを卑しくいうʔunaNda は、卑語とされるが、待遇表現に属する。二人称代名詞ʔura に卑語接辞-Nda（正名・住吉以外では、-Ndʒa）がついた形であると思われる。特記すべき点としては、八重山語石垣方言にも卑語接辞-Ndʒa が代名詞につく（宮城親友 2003、石垣方言辞典文法・索引遍：21）。

11. 二人称代名詞

	目下・同年	卑	目上	目上（よそ）
単数	ʔura	ʔunaNda	ʔui	nata
双数	ʔutte	?	ʔuitatokoro	-
複数	ʔukja	ʔukjaNda	ʔuita	natata

11.2 待遇表現形式

本節では、述語にあらわれる待遇意図をあらわす語形を記述する。

11.2.1 丁寧形式

日本語記述文法研究会（2009：261）の定義によれば、「丁寧語は、尊敬語や謙譲語のように話題に対する敬意をあらわす敬語（素材敬語）とはことなり、もっぱら聞き手や発話の場面に配慮して用いられる敬語（対者敬語）である」。

正名方言の丁寧形式として、接辞の-jabu-と、コピュラの位置にあらわれる dero がある。-jabu-は、動詞につく。沖縄島とその離島で広く用いられている-biːN 丁寧形式と同じく、日本語の「侍り」と同根語であると思われる。次の用例では、I は、述語のʔik-i-mu が丁寧形式をとらえておらず、II は、丁寧形をとらえた形を示す。

528)　I.　聞き手＝目下・同等
wana:　naɸa=gatʃi　ʔik-i-N
私は沖縄へ行く。
II.　聞き手＝目上
wana:　naɸa=gatʃi　<u>ʔik-jabu-N</u>
私は沖縄に行きます。

529)　I.　聞き手＝目下・同等
ʔama=wa　tʃaːbuN=gatʃi　me:　ʔiri-tu-ta-N
お母さんは茶碗にご飯を入れていた。
II.　聞き手＝目上
ʔama=wa　tʃaːbuN=gatʃi　me:　<u>ʔiri-tu-jabu-ta-N</u>
お母さんは茶碗にご飯をいれていました。

次の用例で示すように、動詞の否定過去形は、否定中止形-adana/-radana＋無生物存在動詞ʔaːmu「ある」の過去形ʔa-tta-mu からなる形であり、否定過去形が丁寧形式をとらえるばあい、ʔaːmu のみが-jabu-をとらえる。

530)　I.　聞き手＝目下・同等
ʔari=wa　matʃi=gatʃi　ɸuːdana　ʔa-tta-N
彼は祭りに来なかった。
II.　聞き手＝目上
ʔari=wa　matʃi=gatʃi　<u>ɸuːdana　ʔa-jabu-ta-N</u>
彼は祭りに来ませんでした。

第 1 形容詞が丁寧形式をとらえるばあいは、-jabu-が分析的な形につく。第 1 形容詞の-samu/-ʃamu 形は、-sa/-ʃa 連用形と無生物存在動詞ʔaːmu「ある」とが縮約した形であり、縮約しない形式を分析的な形と呼ぶことにする。次の用例で示すように、第 1 形容詞が丁寧形式をとらえるばあい、-sa/-ʃa 連用形との縮約がおこらず、ʔaːmu に-jabu-がつき、-sa/-ʃa 連用形＋ʔajabumu（第 2 終止形ʔajabuN）となる。

531)　I.　聞き手＝目下・同等
ʔunu　ʃiru=wa　ʔadʒi=nu　ʃaːsa-N
その汁は味がうすい。
II.　聞き手＝目上

ʔunu　ʃiru=wa　ʔadʒi=nu　ʃa:sa　ʔa-jabu-N
その汁は味がうすいです。

名詞が述語になる文と第 2 形容詞が述語になる文においては、丁寧擬似コピュラ dero がコピュラの位置にあらわれ、終助詞も dero につく。

532)　I.　聞き手＝目下・同等
hju:=wa　jukkwa　hi: =do:
今日は良い日だよ。
II.　聞き手＝目上
hju:=wa　jukkwa　hi:　dero =do:
今日は良い日ですよ。

終助詞の間投詞的な使用（あるいは、フィラーとしての使用）においては、話し相手が目上であるばあい、dero が終助詞を担う役になる。

533)　I.　聞き手＝目下・同等
hju:=wa =jo:,　<sumijoʃi>=neti
今日はね、住吉で
<kutʃo:>=tu　hanaʃi　ʃi:　ki-ttʃa-ʃiga
区長と話しをしてきたけど
II.　聞き手＝目上
hju:=wa　dero=jo:,　<sumijoʃi>=neti
今日はですね、住吉で
<kutʃo:>=tu　hanaʃi　ʃi:　kja:bu-ta-ʃiga
区長と話しをして来ましたけど

目下・同等に呼びかける際に用いる間投詞ʔanu=jo:「あのね」にも目上の人に呼びかけるばあい、dero が入り、ʔanu dero=jo:「あのですね」となる。

名詞述語文や第 2 形容詞が述語になる文においてテンスマーキングや接続詞があらわれるばあい、コピュラの ja-がそれらの形態素を担う。そのようなばあいには、コピュラの丁寧形式の jabu-が用いられる。

534)　I.　聞き手＝目下・同等
ʔari=wa　jamatu=nu　tʃu:=du ja:-ʃiga,
彼は日本本土の人だけど、
ʃimamuni=mu　dʒo:dʒi
沖永良部の言葉も上手だ。
II.　聞き手＝目上
ʔari=wa　jamatu=nu　tʃu:=du jabu-ʃiga,
彼は日本本土の人ですけど、
ʃimamuni=mu　dʒo:dʒi dero
沖永良部の言葉も上手です。

535)　I.　聞き手＝目下・同等

kinju:=wa　hatʃìgatʃì　mja:　ja-tta-N =ja:
昨日は 8 月 6 日だったね。

II.　聞き手＝目上
kinju:=wa　hatʃìgatʃì　mja:　jabu-ta-N =ja:
昨日は 8 月 6 日でしたね。

11.2.2 尊敬語

日本語記述文法研究会（2009：239）によれば、「尊敬語には、話題の人物やその人物に関わる事物の行為や事態を高めて表現する述語の尊敬語と、話題の人物自身やその人物に関わる事物自体を高めて表現する名詞の尊敬語がある」。沖永良部語正名方言の尊敬語にもこの 2 つの種類がある。

11.2.2.1 名詞の尊敬語

当該方言の名詞の尊敬語は、日本語の「さん」や「様」などのような人をあらわす名詞につく接辞である。

接辞-ganaʃì は、主に親族名詞につき、その人物を高めて表現するものである。

wuba 「叔母」→　wuba-ganaʃì「叔母様」
ujaho 「先祖」→　ujaho-ganaʃì「先祖様」

接辞の-bi-は、複数接辞-Nkja に前接し、人物をあらわす名詞を高めて表現するものである。

ʃìda-Nkja 「先輩たち」→　ʃìda-bi-Nkja「先輩がた」
ʔuja-Nkja「親たち」→　ʔuja-bi-Nkja「親がた」

11.2.2.2 述語の尊敬語

上に述べたように、文の主体を高めて表現する述語の尊敬語を 2 つにわけることができる。①派生形式と②補充形式がある。②に属する動詞が補助動詞として文法化し、主語を高めて表現する手段となるのを「尊敬語補助動詞」として 3 つ目のカテゴリーとして認めることもできるが、本稿では、それを②の機能の 1 つとしてあつかうことにする。

11.2.2.2.1.派生形式

日本語の「お・ご～になる」と似たような一般動詞（＝尊敬語でない動詞）を尊敬語にする派生的な方法が 2 つある。動詞の種類によって動詞の語根に①-jori か-o:ri がつくのと、②-Nʃori か-ʃori がつくものである。話者の内省によると、前者は、正名の人同士でも用いる言い方であるが、後者は、二人称代名詞 nata と同じくよその人に対して用いる言い方であり、「和泊っぽい」と評価することが多い。正名方言の母語話者の中で用いないという人が少なくないが、完全を期してここで記述することにする。

-jori/-o:ri は、目上に対して依頼・命令するばあいに用いる。語源は、いわゆる連用形に、沖縄古語にもあった「おわり」がついた形にあると考えられるが、現在正名方言においては、連用形よりも語根につくことが多い。現在正名方言においては、命令形の形しかない。

12. -jori/-oːri 形式の作り方

	一般動詞	尊敬形式
とる	tuimu	tujori (tuijori)
座る	jiːmu	joːri
書く	hakkimu	hakkjori
する	ʃiːmu	ʃoːri

536) I. 聞き手＝目下・同等
ki: tʃîki-ri =joː
気をつけてね。
II. 聞き手＝目上
ki: tʃîki-jori =joː
気をつけてくださいね。

話者の指摘によれば、-jori/-oːri 形式は、尊敬語ではあるが、尊敬語の中できわめて'軽い'ほうである。

-jori/-oːri は、ほとんどの有情物の運動をあらわす待遇的にニュートラルな動詞につくが、

wuːmu「いる」、ʔikimu「行く」、kiːmu「来る」、kamimu「食べる」、numimu「飲む」には、-joːri/-oːri 形式が尊敬補充形式によって lexical blocking される。gaimu/ʔiːmu「言う」、nibuimu「寝る」「眠る」、ʔuimu「おきる」「目がさめる」にも尊敬補充形式があるが、これらのばあいは、-jori/-oːri 形式が lexical blocking されない。kurimu「呉れる」のばあいは、-jori/-oːri 形式と尊敬補充形式には、意味的な違いがあるが、次のセクションでそれについて述べる。

-Nʃori/-ʃori 形式は、動詞のいわゆる連用形に動詞の形態論的なカテゴリーによって-Nʃori か-ʃori がつく。どちらがつくかは、正名方言の動詞形態論に働く音素配列論の超重音節を避ける法則によって統率されている。動詞の連用形が ai、 ui、 oi の母音連続で終わるばあい、超重音節にならないように、-Nʃori より-ʃori がつく。

13. -Nʃoːri/-ʃoːri 形式の作り方

	一般動詞	尊敬形式
とる	tuimu	tuiʃori
入る	ʔiːmu	ʔiNʃori
書く	hakkimu	hakkiNʃori
する	ʃiːmu	ʃîNʃori

537) I. 聞き手=目下・同等
kiba-ri =joː!
頑張れよ！
II. 聞き手=目上
kibai-ʃori =joː!
頑張ってくださいね！

沖永良部語の-Nʃo:ri/-ʃo:ri 形式は、奄美群島沖永良部以北で広く見られる-Nsjori 系（重野 2010：7）と沖縄語首里方言の-miʃe:N 系（西岡 2003：99）と同じ系統であると考えられるが、-jori/-o:ri 形と同様、-Nʃori/-ʃori 形は、現代沖永良部語において命令形としてしかあらわれないようである。1 人の正名出身の話者が ʃi:mu「する」につき、過去形をとらえた形の ʃiNʃo:tʃaN を聞いたことがあると言っていたが、現在正名方言では、-Nʃori/-ʃori 形式の命令形以外の使用が衰退していると考えて良かろう。

11.2.2.2.2.補充形式

正名方言には、尊敬語補充形式が 6 つ確認できている。

①ʔme:mu (ʔmo:ramu)　来る、行く、言う
②ʔme:mu (ʔme:ramu)　居る
③ʔoiʃimu (ʔoiʃiramu)　食べる、飲む
④jaʃime:mu (jaʃimo:ramu)　寝る
⑤ʔudumimu (ʔudumamu)　おきる、目が覚める
⑥[taboimu] tabori　呉れる

①と②は、非過去形の終止形において同音異義語になる。通時的に同根語であっても、その他の活用形を見れば、共時的にことなる語彙になっていることが分かる。

538)　ʔme:-timu　jukkwa ʔa-jabu-N
おられてもいいです。

539)　ʔmo:-tʃimu　jukkwa ʔa-jabu-N
来られてもいいです。

〈ʔme:mu 系〉は、北琉球語群で広く見られる語形である。重野（2010：4）によれば、「行く」「来る」「居る」「言う」という意味で与論島をのぞく奄美群島全地域で使用されている。沖縄語辞典（国立国語研究所 2001：368）では、沖永良部語正名方言のʔme:mu の同根語である me:N が「行く」来る」「居る」の平民の年長に対する敬語（いわゆる平民敬語）として載っている。〈ʔme:mu 系〉の語源は、仲宗根（1987：224）によると、尊敬接頭辞イミ＋尊敬語動詞オワリにある。

正名方言の-tumu 継続形は、-ti 中止形と wu:mu「いる」からできた形であり、継続形を尊敬語にするばあい、wu:mu をʔme:mu に置き換える。

540)　I.　ʔutu=wa　nama　kwa:ʃi　ki-ttʃu-mu
妹は今お菓子を切っている。
II.　ʔama=wa　nama　kwa:ʃi　ki-ttʃi　ʔme:-mu
お母さんは今お菓子を切っていらっしゃる。

これに加え、沖永良部語においてʔmeNsʃori「いらっしゃい」という語形も存在するが、話者の内省によれば、前述した-Nʃori/-ʃori 形と同じく、かつてよその人に対して使用していた尊敬語形式である。ʔmeNsʃori の語源は、次のとおりであると考えられる。

ʔme:mu の連用形：　ʔme:　+　-Nʃori　→　ʔmeNsʃori

③ʔoiʃimu「食べる」「飲む」は、謙譲語の「差し上げる」という意味でも用いられるが、詳細は、次のセクションに述べる。kamimu「食べる」と numimu「飲む」の尊敬語形式としての ʔoiʃimu 系の使用は、北琉球語群に属する他の言語変種において見られないが、特記すべき点としては、八重山語に属している竹富方言（西岡 2011：56）と石垣方言（宮良 1980：224）にも「食べる」「飲む」という意味で用いられる。西岡（2011：58）によると、〈ʔoiʃimu 系〉は、沖縄古語の「おやす」と歴史的なかかわりがある語である。形態論的には、正名方言のʔoiʃimu は、ʃiːmu「する」と似ている不規則的な活用をしめす。

これに加え、ʔoiʃimu 以外にも kamimu「食べる」の待遇意図に応じた多様な語彙をもっていることが特徴的である。見下げていうばあい、kuroimu「食らう」というし、koːri「食べなさい」という主によその子どもに対して用いる言い方もある[20]。

④jaʃimeːmu「寝る」の語源は、jaʃimimu「休む」の語根 jaʃim-に「オワリ」がついた形にあると考えられるが、nibuimu「寝る」「眠る」の尊敬語として用いられる。jaʃimeːmu の使用は、命令形に限られていないため、同じ「おわり」に語源をもつ-jori/-oːri もかつて命令形以外にも使用されていたと考えられる。

⑤ʔudumimu は、ʔuimu「おきる」「目が覚める」の尊敬語として用いられる。この系統の語彙の尊敬語としての使用は、奄美大島で広く見られる（重野 2013：53）。沖縄語首里方言にもʔudumimu の同根語ʔudʒunuN が存在するが、尊敬語ではない（国立国語研究所 2001：574-575）。-jori/-oːri 形をとらえるばあい、ʔudumjori「おきてください」もある。

⑥*taboimu「くださる」は、kurimu「呉れる」の尊敬語として用いられるが、活用せず、命令形 tabori「ください」としてしかあらわれなくなっている。日本語のテ中止形に相当する-ti 中止形につき、助動詞として使用が多い。『沖縄古語大辞典』によると、沖縄古語の taboːjuN は、「たぶ」+「おわる」がついた形である。沖永良部語正名方言の tabori は、その同根語であると考えられる。

tabori は、動作主を高めると同時に受益享受者を謙遜する働きもあるため、受益享受者が話し手自身か話し手の身内であるばあいのみ用いる。動作主を高めるだけであれば、kurimu を-jori/-oːri 形にして kurijori を用いる。次の用例の I のばあいは、話し手自身かその身内が受益享受者になるのに対し、II のばあいは、wutu「夫」が受益享受者になる。

541) I. ʔui=ga wutu=gatʃi=mu gai-tʃi tabori
あなた様の夫にも言ってください。
II. ʔui=ga wutu=gatʃi=mu gai-tʃi kuri-jori
あなた様の夫にも言ってあげてください。

11.2.3 謙譲語

沖永良部語正名方言における謙譲語形式は、補充形式のみからなり、日本語の「お・ご～する」のような派生形式がない。

[20] koːri の語源は、沖縄語にもある kwajuN＋「おわり」にあると考えられる。

謙譲語補充形式は、3つ確認できている。重野（2009：9）が沖永良部語畦布方言で報告した「言う」の謙譲語形式 ʃaːjuN[21]は、正名で確認できていない。

①ɸugamimu　会う
②ʔoiʃimu　差し上げる
③tumu-ʃiːmu　一緒に行く、連れて行く

①ɸugamimu「お会いする」は、日本語「拝む」と同根語であり、目上の人と会うばあいにʔoimu「会う」や miːmu「見る」の謙譲語として用いられる。この〈拝む系〉の「会う」の謙譲語としての使用は、琉球諸語中に確認できてる。ɸugamimu の-jabu-形の意志勧誘形 ɸugamjabura が目上の人と会う際の挨拶である。〈拝む系〉の丁寧形の意志勧誘形が日本語の「こんにちは」と似たような挨拶として用いられるのは、奄美群島であまねく見られる（岡村 2007：104）。首里那覇を中心として沖縄でも見られる（国立国語研究所 2001：576）。西岡（2003：104）が報告する謙譲語派生形式をつくるための〈拝む系〉の助動詞としての使用は、正名方言においては、見られない。

miːmu「見る」の連用形と第 1 形容詞 tuːsamu「遠い」の-sa/-ʃa 連用形からできた miːduːsa があり、目下・同等に対して「久しぶり」や「ご無沙汰」という意味で用いられるが、目上の人と会う際には、ɸugamimu の連用形と tuːsamu の-sa/-ʃa 連用形からできた ɸugamiduːsa が用いられる。この〈拝み遠さ系〉は、奄美群島においてあまねく見られるし（重野 2010：10）、沖縄語首里方言においても存在する（国立国語研究所 2001：576-577）。

②ʔoiʃimu「差し上げる」は、kurimu「呉れる」「やる」[22]と turaʃimu「呉れる」「やる」の謙譲語形式として用いられる。後述したように、ʔoiʃimu は、「召し上がる」という意味でも用いられる。「差し上げる」として用いる〈ʔoiʃimu 系〉は、奄美群島においてどこにでも用いられるが、特記すべき点として八重山語諸方言（荻野 2011：41）や宮古語（西岡 2012）においても見られる。

ʔoiʃimu は、日本語のテ中止形+アゲル構造と同じく、テ中止形に相当する-ti 中止形につき、助動詞としても用いれる。重野（2010：11）によると、日本語の「してさしあげる」構造の「恩着せがましさ」は、奄美群島で話される言語変種の相当形式にないとのことである。沖永良部語正名方言の〈ʃiː ʔoiʃimu 系〉にも「恩着せがましさ」がない。年配者の重い荷物を持ってあげようとするばあいに次の用例のような表現を用いても違和感がない。

542)　wa=ga　mu-ttʃi　ʔoiʃ-abu-ra
私が持ってあげます。

③tumu-ʃiːmu「ともをする」は、soimu「連れる」の謙譲語として用いられる。soːti ʔikimu「連れて行く」や soːti kiːmu「連れて来る」という決まり文句は、目上の人が対象となるばあには、失礼にあたり、tumu-ʃiː ʔikimu と tumu-ʃiː kiːmu になる。

[21]正名方言に畦布方言の ʃaːjuN「申し上げる」に相当する語形があるとすれば、ʃaːrimu になるだろう。
[22] 沖永良部語正名方言の kurimu は、日本語の「呉れる」とことなり、話し手への方向性がない。

11.3 尊敬語形式の組み合わせ

尊敬語補充形式には、丁寧語接辞-jabu-をつけることは可能であるが、相手が尊敬の対象となるばあいには、義務ではない。次の用例は、目下の A が目上の B にどこから来たかを問う場面であるが、I でも II でもまったく違和感がないが、話者の内省によると、II は、さらに丁寧な言い方であるとのことである。

543) I. A: ʔuda=kara ʔmoː-tʃi=jo?
どこから いらっしゃったか？
B: horo=kara=du ki-ttʃa-ru
畑から来た。
II. A: ʔuda=kara ʔmeː-jabu-ti=jo?
どこからいらっしゃいましたか？
B: horo=kara=du ki-ttʃa-ru
畑から来た。

尊敬語接辞-joːri を尊敬語補充形式につけることができるかどうかは、語によってことなる。次のとおりである。

ʔmeːmu 来る、行く、言う	＋-jori	→	×
ʔmeːmu 居る	＋-jori	→	×
ʔoiʃimu 食べる、飲む	＋-jori	→	ʔoiʃori
jaʃimeːmu 寝る	＋-jori	→	×
ʔudumimu おきる	＋-jori	→	ʔudumjori
[taboimu] tabori 呉れる	＋-jori	→	×

上の形式を考慮に入れると、尊敬語補充形式に尊敬語接辞-jori がつけられるかどうかは、その尊敬語動詞に「オワリ」が入っているかどうかによるようである。-jori の語源も「オワリ」にあるため、「オワリ」の二重的使用が許されないと考えられる。

動詞述語の謙譲語は、行為の主体である人物をへりくだらせ、その行為の向かう先の人物を高める機能をもつ（日本語記述文法研究会 2009：250）。そのため、話し手より目上の聞き手の行為の向かう先の人物が聞き手よりさらに目上であるばあいに謙譲語補充形式と尊敬語形式の組み合わせが可能なばあいがある。次の用例では、話し手がその父親に対して祖父の手伝いをするように依頼するため、謙譲語のʔoiʃimu「差し上げる」に尊敬語接辞-joːri がつく。

544) ʔatʃa, gjaːgja=ga kaʃi ʃiː <u>ʔoiʃori</u>.
お父さん、おじいさんの手伝いをしてください。

謙譲語 tabori「ください」の助動詞としての使用にも上のような使用が可能である。次の用例では、孫である話し手が祖父に祖父より 10 才上の年配の男性に手紙を送ってあげるように依頼する。

545) ʔaʃi, ʃiNma=nu gjaːgja=gatʃi dʒihi <tegami>
おばあさん、シンマ(屋号)のおじいさんにぜひ手紙を
ʔuku-ti <u>ʔoiʃi tabori</u>.

送ってあげてください。
ɸu:raʃa ʃi:-mu =di　　ʔumu-jabu-N
喜ぶと思います。

継続形の助動詞としてのʔme:mu「いらっしゃる」は、尊敬補充系をもつ動詞の一般形式か尊敬形式と組み合わせるかは、その語による。

ʔme:mu「行く」「来る」が継続形をとらえるばあいは、-tumu 形をとらえても助動詞のʔme:mu を用いてもよいが、一般動詞のʔikimu「行く」ki:mu「来る」を用いるばあいは、ʔme:mu が用いられない。

546)　I.　gja:gja=wa　hatte=gatʃi　ʔmo:-tʃu-N
おじいさんは畑にいらしている。
II.　gja:gja=wa　hatte=gatʃi　ʔmo:-tʃi　ʔme:mu
おじいさんは畑にいらしていらっしゃる。
III.　×　gja:gja=wa　hatte=gatʃi　ʔi-dʒi　ʔme:mu
おじいさんは畑に行っていらっしゃる。

ʔme:mu「いう」のばあいは、-tumu 形をとらえてもよいが、話者の内省によると、ʔme:mu を助動詞として用いれば、二重敬語になる。一般形式の gaimu「いう」は、ʔme:mu を助動詞としてとってもよい。

547)　I.　gja:gja=wa　hi:dʒu　gaN　ʔmo:-tʃu-mu
おじいさんはしょっちゅうそうおっしゃっている。
II.　×gja:gja=wa　hi:dʒu　gaN　ʔmo:-tʃi　ʔme:mu
おじいさんはしょっちゅうそうおっしゃっていらっしゃる。
III.　gja:gja=wa　hi:dʒu　gaN　gai-tʃi　ʔme:mu
おじいさんはしょっちゅうそう言っていらっしゃる。

ʔoiʃimu「食べる」「飲む」は、継続形をとらえるばあい、-tumu 形をとらえても、ʔme:mu を助動詞としてとってもよい。一般形の kamimu「食べる」と numimu「飲む」が用いられるばあいは、ʔme:mu を助動詞として用いられない。

548)　I.　gja:gja=wa　nama　ʔaʃi　ʔoiʃu-mu
おじいさんは今昼ごはんを召し上がっている。
II.　gja:gja=wa　nama　ʔaʃi　ʔoiʃi　ʔme:mu
おじいさんは今昼ごはんを召し上がっていらっしゃる。
III.　×　gja:gja=wa　nama　ʔaʃi　kadi　ʔme:mu
おじいさんは今昼ごはんを食べていらっしゃる。

jaʃime:mu「寝る」は、ʔoiʃimu「食べる」「飲む」と同じく、-tumu 形をとらえても、ʔme:mu を助動詞としてとってもよいが、一般形式の nibuimu の継続形にʔme:-mu を助動詞として用いられない。話者の内省によると、nibu-ti ʔme:-mu「寝ていらっしゃる」というと、本動詞と助動詞に敬意の差が大きすぎて、より冗談的なニュアンスがある。

549)　I.　gja:gja=wa　nama　jaʃimo:-tʃu-mu

おじいさんは今お休みになっている。

II. gja:gja=wa nama jaʃimo:-tʃi ʔme:-mu
おじいさんは今お休みになっていらっしゃる。

III. × gja:gja=wa nama nibu-ti ʔme:-mu
おじいさんは今寝ていらっしゃる。

ʔudumimu「おきる」「目がさめる」は、ことなるパターンをしめす。話者の内省によれば、ʔudumimu が-tumu 形をとらえると、皮肉めいた言い方になるため、助動詞のʔme:-mu を用いるのが一般的である。ところが、-tumu 形のʔududumu に丁寧語形態素-jabu-をつけたʔududujabuN は、二人称に尊敬語としても用いられる。ところが、一般形式のʔuimu の継続形にʔme:-mu を助動詞として用いれば、違和感なく尊敬語形式になる。

550) I. × gja:gja=wa nama ʔudu-du-mu
おじいさんは今お起きになっている。

II. gja:gja=wa nama ʔudu-di ʔme:-mu
おじいさんは今おおきになっていらっしゃる。

III. gja:gja=wa nama ʔui-ti ʔme:-mu
おじいさんは今おきていらっしゃる。

11.4 まとめ

沖永良部正名方言の応答詞、人称代名詞、（親族）名詞、動詞・形容詞・コピュラには、敬意差がある。沖永良部語正名方言の待遇表現体系が広範囲にわたるのは、待遇表現的な分類として素材敬語と対者敬語がある。

沖永良部語の北琉球語群の中の系統的な位置は、議論されている。狩俣（2000）は、沖永良部語、沖縄北部、与論島を 1 つのグループとして主張しているのに対し、Pellard（2015 ）はは、奄美群島で話されている言語は、沖縄全島で話されている言語とは別のグループであると出張している。沖永良部語の待遇表現体系を考慮に入れると、次のような敬語体系になる。

5. 北琉球諸語の敬語形式（沖永良部以外の奄美群島のデータは、重野（2010）から。

	沖縄	与論	沖永良部	徳之島	奄美大島	喜界
丁寧形式						
ハベリ系	○	○	○	×	×	×
尊敬語形式						
イミオワリ系 （いる・行く・来る）	○	×	○	○	○	○
ʔoiʃimu 系（食べる・飲む）	×	○	○	×	×	×
ʔudumimu 系（目が覚める）	△*	不明	○	不明	○	不明
謙譲語形式						
オガム系	○	○	○	×	○	○
ʔoiʃimu 系（差し上げる）	×	○	○	○	○	○

*沖縄語方言辞典（国立国語研究所 2001：574）によると、ʔudumimu 系であるʔudʒunuN「目が覚める」は、存在するが、尊敬語ではないとのことである。

上の表でしめしているとおり、沖永良部にハベリ系が存在することは、喜界島、奄美大島、徳之島とことなり、沖縄全島と与論島と同様である。

ʔoiʃimu 系の「食べる・飲む」としての使用は、沖永良部と与論以外の北琉球語群であらわれないのに対し、南琉球語群のうちの八重山語諸方言では、あらわれる。

ʔudumimu 系は、沖縄では、待遇的な意味がないが、奄美群島の沖永良部と奄美大島では、尊敬語としての使用が確認できた。

尊敬語は、ʔoiʃimu 系の「差し上げる」としての使用が奄美群島全体と共通するが、沖縄には、その系統の形式が存在しない。また、ʔoiʃimu 系の「差し上げる」としての使用も八重山諸語でも見られる。

丁寧語形式は、沖縄と与論で共通しているのに対し、待遇的な意味をもつ動詞は、沖縄より奄美群島で使われる諸言語と共通するものが多いようだ。

参考文献

Anderson, Gregory D.S. (2002). Auxiliary verb constructions in Old Turkic and Altai-Sayan Turkic. Paper presented at the Old Turkic Symposium, Frankfurt

Booij, Geert. (2005). The Grammar of Words: An Introduction to Linguistic Morphology. 2nd edition. Oxford University Press Inc. New York. New York.

Bybee, Joan ; Perkins, Revere ; Pagliuca, William (1994) The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World. Chicago: The University of Chicago Press

Comrie, Bernard (1981) Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology. Chicago: The University of Chicago Press.

Hagers, S. (1997). The importance of a Korean source on the Ryukyuan language. in *Japan and Korea: contemporary studies: proceedings of the Fourth Nordic Symposium on Japanese and Korean Studies*, ed. B. Frellesvig and R. Starrs, pp. 34-43. Aarhus University Press.

Heath, J.G. (1984). Contact and Language Change. Annual Review of Anthropology, Vol. 13 (1984), pp. 367-384

Lawrence, W.P. (2012). Southern Ryukyuan. In D.N. Tranter (ed.) The Languages of Japan and Korea (pp. 381-411). New York: Routledge

Lemmens, Maarten (2005). Aspectual posture verbs in Dutch. *Journal of Germanic Linguistics* 17: 183-217

Martin, Samuel E. (1970). Shodon: A Dialect of the Northern Ryukyus. Journal of the Americal Oriental Society vol. 90 no. 1 pp. 97-139

Matsumori, Akiko (2001). Historical tonology of Japanese dialects. Kaji, S (ed.) *Proceedings of the symposium: Cross-linguistic studies of tonal phenomena: Tonogenesis, Japanese accentology, and other topics.* (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studes), 98-122.

Miyara, Shinsho (2011). Clausal Focus Structure in Okinawan. 『欧米文化論集』 第 55 号 pp. 85-111

Niinaga, Yuto (2014). A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language. Unpublished PhD. thesis, University of Tokyo

Payne, Thomas E. (1997). Describing Morphosyntax: A Guide for Field Linguists. Cambridge: The Cambridge University Press

Shimoji, Michinori (2012) .Northern Ryukyuan. in Tranter, Nicolas (ed.) *The Languages of Japan and Korea*, Oxon / New York: Routledge

Uemura, Yukio (2003). Endangered Languages of the Pacific Rim - The Ryukyuan Language. ELPR

Van der Lubbe, Gijs & Akiko Tokunaga (2015). Okinoerabu grammar. in: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.): *Handbook of the Ryukyuan Languages*. Berlin / Boston: Mouton de Gruyter: 345–377.

Van der Lubbe, Gijs (2012). The Okinawan Language of Janadō Village on Kume Island: A Grammar Sketch. Unpublished MA thesis submitted to Leiden University, The Netherlands

かりまた、しげひさ；島袋、幸子（2007）「沖縄方言のとりたてのくっつきとかかりむすび : 今帰仁謝名方言と具志川安慶名方言のばあい（おぼえがき）」、『日本東洋文化論集』(13): 1-29

かりまた、しげひさ（2007）「沖縄県うるま市安慶名方言の形容詞」工藤、真由美　編『日本語形容詞の文法』pp. 205-224　東京：ひつじ書房

かりまた、しげひさ（2010）「琉球語安慶名方言の動詞の形つくり」『琉球の方言』34 号 pp.85-107　法政大学沖縄文化研究所：東京

かりまた、しげひさ（2014）「語構成からみた沖縄県名護市幸喜方言の形容詞」『琉球の方言』39 号　pp. 87-116　法政大学沖縄文化研究所：東京

かりまた、しげひさ（2014）「北琉球・名護市幸喜方言の可能表現の**文**」日本東洋文化論集 no.20 p.31 -52

まつもと、ひろたけ（1996）「奄美大島方言のメノマエ性」鈴木、泰；角田、太作　編『日本語文法の諸問題』pp.77-105　ひつじ書房：東京

伊是名島方言辞典編集委員会（2004）「伊是名方言辞典：索引編」伊是名村教育委員会：沖縄県伊是名村字仲田

奥田靖雄 1986 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文——その体系性をめぐって——」
岡村、隆博（2007）『奄美方言—カナ文字での書き方—』南方新社　鹿児島市下田町

荻野、千沙子（2011）「八重山地方の授受動詞タボールンと中世語「給はる」—敬意優先の授受動詞体系—、『日本語の研究』第7巻4号、p.p.39-54

下地、理則（2013）「琉球諸語の代名詞双数形」『琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究』報告書、pp. 17-32、京都大学大学院文学研究科言語学研究室

外間、守善代表（1995）『沖縄古語大辞典』『沖縄古語大辞典』編集委員会編　角川書店

菊、秀史（2007）「与論の言葉で話そう　ユンヌフトゥバではなそう（2）—動詞を覚えよう（文法・文型編）」与論民族村

菊、千代；高橋、俊三（2005）「与論方言辞典」武蔵野書院：東京

宮崎、和人；安達、太郎；野田、春美；高梨、信乃（2002）「モダリティ」仁田、義雄；益岡、隆志；田窪、行則『新日本語文法選書4』東京：くろしお出版

宮良、信詳（1995）『南琉球・石垣方言の文法』東京：くろしお出版

宮良、當壯（1980）『宮良當壯全集 8』第一書房、東京

宮良、信詳（1995）『南琉球・石垣方言の文法』東京：くろしお出版

橋尾、直和（1993）「伊江島方言のテンス・アスペクトに関する一考察」『人文学報』243 p23-45, 1993-03 首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 東京都立大学人文学部

金田、章宏（2012）「八丈方言における新たな変化と上代語」『言語研究』142 号 pp.119-142　日本言語学会：東京

工藤、眞由美；仲間、恵子；八亀、裕美（2007）「与論方言動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」『国語と国文学』84,3,　pp.53-67

工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美（2007）「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」『大阪大学文学研究科紀要』第 47 集

工藤真由美（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて―』ひつじ書房

工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房

国立国語研究所（2001）『沖縄語辞典』

三石、泰子（1993）「名瀬市の方言」東京：秋山書店

寺師、忠夫（1985）「奄美方言、その音韻と文法」根元書房：東京

狩俣、繁久（2000）「奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ」『日本東洋文化論集』6、pp.　43-69　琉球大学法文学部

狩俣、繁久；島袋、幸子（2006）「琉球語の終止形 : 沖縄謝名方言と沖縄安慶名方言」『日本東洋文化論集』 no.12 p.89 -123　琉球大学法文学部

狩俣、繁久（出版未定）「初めての人のためのシマクトゥバの文法」

渋谷、勝己（2000）「徳島県海部郡方言の可能表現」『教育国語』87、pp. 2-19

重野、裕美（2010）「奄美諸方言の敬語法―敬語形式の分布とその展開に着目してー」『国文学項』208 号、１-18 ページ、広島大学国語国文学会

重野、裕美（2013）「鹿児島県瀬戸内町与路方言の敬語形式」『広島経済大学研究論集』第３６巻第３号、広島経済大学

松森、明子（2000）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発」　『音声研究』4 号 61-71

上村、幸雄；須山、名保子（1997）「奄美方言」亀井、孝；河野、六郎；千野、栄一　編『言語学大辞典セレクション　日本列島の言語』　431-459. 東京：三省堂

新永、悠人（2014）「北琉球奄美大島湯湾方言の動詞形態論」『琉球の方言』39 号 pp.49-74 法政大学沖縄文化研究所：東京

西岡、敏（2003）「沖縄語首里方言の敬語付き動詞」『琉球の方言』27 号、p.p.97-137、法政大学沖縄文化研究所、東京

西岡、敏（2011）「竹富方言の敬語助動詞と対者敬語的終助詞」『日本語の研究』第 7 巻 4 号、p.p.55-68、日本語学会

西岡、敏（2012）「宮古方言の敬語法再考」2012年度（第35回）沖縄言語研究センター・研究発表会　7月7日

中本、正智（1983）「琉球語語彙の研究」、三一書房、東京

仲間、恵子（2007）「鹿児島県大島群与論町麦屋方言の形容詞」工藤、真由美　編『日本語形容詞の文法』pp. 225-240　東京：ひつじ書房

仲宗根、政善（1987）『琉球方言の研究』

島袋幸子（1997）「琉球列島の言語（沖縄北部方言）」『日本列島の言語　言語学大辞典セレクション』三省堂

東京大学言語学研究質（1977）「奄美徳之島のことば―分布から歴史へ」、柴田、武；学生有志　編、秋山書店、東京

徳永、明子（2013）「沖永良部島国頭方言の人称代名詞」『琉球の方言』38 号　pp.179-195 法政大学沖縄文化研究所：東京

徳永、明子（2014）「沖永良部島国頭方言の動詞形態論」2014 年 3 月 14 日に沖縄県立博物館で行われた発表の資料

内間、直仁（1985）「琉球方言文法の研究」笠間書院：東京

日本語記述文法研究会編（2003）「現代日本語文法　4 第 8 部モダリティ」。東京：くろしお出版

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4：第 8 部　モダリティ』くろしお出版、東京

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 7：第 12 部　談話、第 13 部　待遇表現』東京：くろしお出版

日本語記述文法研究会編（2010）『現代日本語文法 1：第 1 部　総論、第 2 部　形態論、総索引』東京：くろしお出版

白田、理人（2013）「奄美語喜界島小野津方言の談話資料」田窪　行則　編『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』259-290　東京：くろしお出版

平山、輝男（1998）「広島県のことば」明治書院：東京

平山（1986）「奄美基礎語彙の研究」東京：明治書院

林、優花（2014）「与論方言の可能表現：動作主体の人称による形式の使い分けを中心に」『鹿児島国際大学大学院学術論集』pp. 41-53

當山、奈那（2013）「沖縄県首里方言における使役文の意味構造」『日本語文法』13 巻 2 号 pp.105-121

當山、奈那（2015）「琉球語平安座方言の名詞の格」『国際琉球沖縄論集』第 4 号

付録

付録１：ペア・ストリー

収録日：2015 年 9 月 12 日
話者：M.F.(1936 女性)

<baʃo>=wa <ʔamerika>=di.
場所は、アメリカだって。
<hoNto:ni> <ɸu:ke:>=wa ʔirabu=mu ʔuda=mu <ʔiʃʃo> dʒa =ja:.
本当に風景は、沖永良部もどこも一緒だね。
nama =jo:, ʔu:do ʃo:=nu gutu=nu muN =jo:,
今ね、大きいショーみたいなものね、
ʔirabu=neti=wa =ja: ʃo:..
沖永良部ではね、ショー…
ʃo:=nu gutu=nu muN <dʒi:saN>=ga muttumu =djo:
ショーみたいなものをおじいさんがもいでるんだよ。
ʔutturuʃa muttuN
一生懸命もいでる。
ʃa:=gatʃi mu:ru ʔututʃuN=sa:re
下に全部落としているんだね。
<dʒi:saN>=ga na:tʃui=ʃi:
おじいさんが自分一人で
<dʒi:saN>=ga na:tʃui=ʃi: ʔutturuʃa mutti,
おじいさんが自分一人で一生懸命もいで、
gaNnjanu <kudamono>=wa ʔirabu=ne=wa na:-ʃiga
そんな果物は、沖永良部にはないけど、
ʔuri=wa ʃo:=kaja:?
それは、ショーかな？
baNʃiru=kaja:?
ばんしろうかな？
<dʒi:saN>=ga <ʔiʃʃo:keNme:> du:tʃui=ʃi: kibatuN
おじいさんが一生懸命一人で頑張っている。
ʔutturuʃa ʔunu çi:=kara mutti, <haʃigo> ke:ti mutti,
一生懸命その木からもいで、はしごをかけてもいで、
ʔuri=jo: <pappaja>=tu=mu nittʃuN=sa:re
それね、パッパヤとも似ているんだね。
ʃaN-kja ʔu:gutu mutti,
そしたら、たくさんもいで、
ʃa:=gatʃi mu:ru ʔututʃi,
下に全部落として、
<koNdo>=wa <dʒi:saN> ʔikjaʃi ʃi-raN=di=kaja:?
今度は、おじいさん、どうしようと【としているの】かな？

na: mata agati, mata muiga ʔidʒa-N=do...
もうまた上がって、またもぎに行っただろう。
muiga ʔidʒunu <dʒiːsaN> miːga=gara
もぎに行っているおじいさんを見にかどうか…
<koNdo> ʔuda=gara=nu <ʔottʃaN>=ga jaːgi ʃukkjagiti kittʃamu =djoː
今度、どこかのおじさんがヤギを引っ張ってきたんだよ。
jaːgi=wa nu: ʃimiraN=di =kajaː?
ヤギに何をさせようと【しているの】かな？
Hai? ʔunu <ʔottʃaN>=wa <tʃotto> ʔmaː mittʃi, muni=dake ʔiːga kittʃaN=do…
え？そのおじさんは、ちょっとそこを見て、言葉だけ言いに来ただろう。
muni ʔittʃi=kara mudutaN
言葉を言ってから戻った。
ʔunu <dʒiːsaN> ʔutturuʃa mutti, muiburi ʃaN=saː
そのおじいさん、一生懸命もいで、もぎ惚れしたな。
<koNdo> mata ʔmaː=kara mukega=gara... mukega=gara kaʃi ʃiːga=gara kittʃaN
今度、またそこから迎えにかどうか…迎えにか、手伝いをしにか、来た。
<dʒiteNʃa> muttʃi kittʃamu =djoː
自転車を持ってきたんだよ。
gjaːgja=ga kaʃi ʃiri =joː
おじいさんの手伝いしなさいよ。
jappai ʔuritaN=saː, ʔe!
やっぱり降りたんだね。え？
ʔuri=wa na: jappai gjaːgja taʃikiga kittʃaN=gara wakaraN
それは、もう、やっぱりおじいさんを助けに来たかも分からない。
<dʒiteNʃa> maNgeratʃi, gjaːgja=ga ʔurutʃanu <kudamono> juku=neti…
自転車を倒して、おじいさんが下した果物を横で…
gjaːgja=ga ʔuriti kiːʃi mattʃuN=saːre
おじいさんが降りてくるのを待っているんだね。
ʔui miːmi: ʃuN=djaː
上をずっと見ているよ。
ʃaː-ʃiga… matti =joː
やったけど…待てよ。
ɸunu kwa=wa ʔuri=mu...
この子は、それも…
jaː=gatʃi hakubaN=di ʃuN=saː, <dʒiteNʃa>=ʃiː...
家に運ぼうとしているんだね、自転車で…
deːdʒi-na muN=jaː
大変なものね。
duː=jukkwa=mu ʔubusanu <kago>=ne <ʔippai> nuʃiti, <dʒiteNʃa>=nu meː=ni nuʃitaN
自分よりも大きいかごにいっぱい乗せて、自転車の前に載せた。
na: ʔamati, jaː=gatʃi muduti... <hako>-di ʔidʒamu =djoː
もう余って、家に戻って、運んで行ったんだよ。
<dʒiteNʃa>=nu meː=ni nuʃiti ʔidʒaN
自転車の前に載せて行った。
ʔama-muge ʔmaː-muge ʃiːgenja…

ジグジャグしながら…
mata <koNdo> ʔaja=ga mukega kittʃaN
また今度、お姉さんが迎えに来た。
ʔunu kwa mukega=ga jara mata <koNdo> ʔaja=ga <dʒiteNʃa> nutti kittʃaN=do:
その子を迎えにやら、また今度お姉さんが自転車に乗って来たよ。
hai? ʃi:-shiga... hai?
え？だけど…え？
natte... abe!
その二人…あら！
nidosa!
かわいそう！
ʔunu jiNga=nu kwa=ga maNgetamu =djo:, <dʒiiteNʃa>-ma:ma =jo:
その男の子が転んだんだよ、自転車と全部よ。
nidosa ʔattaN!
かわいそうだった！
<kega> ʃi:=da:
怪我しただろう。
ʔuda-ka jamatʃi=da:
どこか怪我しただろう。
na:ditumu =djo:
撫でているんだよ。
ʃaN-tukja ʔma:=gatʃi <koNdo> ʔaguNkja=mu mittʃei kittʃi...
そしたらそこに今度、友だちたちも三人来て…
mata ʔunu haNkaritanu baNʃiru=gara nu:=gara mu:ru mata <kago>=gatʃi…
またその散らかしたばんしろうか何か全部またかごに…
nakja mu:ru ʃi: kurituN=sa:re
彼ら、全部やってくれているんだね。
de:dʒi-na muN jaN-sa
大変なものだね。
kira:sa ʔiriti=kara mata <dʒiteNʃa>=gatʃi tʃidi,
きれいに入れてからまた自転車に積んで、
jappai ʔuda:=nu kuni=nu tʃu:=mu <ʔiʃʃo> =ja:
やっぱりどこの国も人も一緒ね。
ʔunu waraNkja <ʃiNsetsu> =jo:
その子供たち、親切ね。
de:dʒi-na muN jaN-sa
大変なものだね。
gaNʃi, ʔunu warabi=wa <koNdo> <dʒiteNʃa> ʔusuti <kago>=wa me:me: nuʃiti
そして、その子供は、今度、自転車を押して、かごは皆で載せて、
<dʒiteNʃa> ʔusuti, muduti,
自転車を押して、戻って、
ʔunu taʃikitanu mittʃei=ga kjo:de=ga jara ʔagu=ga jara <muko:>=gatʃi ʔidʒaN=dja:
その助けた三人が兄弟やら友達やら、向こうに行ったよ。
ʔunu warabi=wa mata <bo:ʃi> waʃiriti =jo:
その子供は、また帽子を忘れてね、

ʃaN-kja ʔunu mittʃei=nu warabi=nu tʃui=nu <boːʃi> muttʃi miːtʃikiti ʔidʒaN
そしたら、その三人の子供の一人が帽子を持って、見つけて、行った。
'<boːʃi> wąʃirituN=dja'=ditʃi habuʃiti,
「帽子を忘れているよ」と、被せて、
ʃaN-kja ʔunu kwa, ʔare, mata jaː=gatʃi mukoti,
そしたら、その子、あれ、また家に向かって、
<boːʃi> turatʃanu kwa, mata, naːdu=nu duʃiNkja miːga ʔidʒaN
帽子をくれた子、また自分の友達たちを見に行った。
<ato> nuː-gara nakja mittʃei=mu nuː-gara... hai?
後、何か彼ら三人も何か…え？
ʔunu baNʃiru=nu gutuʃi ʔaː-ʃiga nakja mittʃei kamaN=di ʃiː, kaduN=dja
そのばんしろうみたいなの、あるけど、彼ら三人、たべようとして、食べているよ。
murotaN=do...
もらっただろう。
nakja mittʃei kamigenja naː ʔattʃumu =djoː
彼ら三人、食べながら、もう歩いているんだよ。
<koNdo> naː ʔunu gjaːgja=ga ʔuriti kittʃaN
今度、もう、そのおじいさんが降りてきた。
naː ʔmaː=nu ɸutʃukuru=ne muːru mutti kittʃi…
もう、そこの懐に全部もいできて、
ʔunu ʔikitanu mittʃei=nu waraNkja=nu mata muduti kittʃi,
その行っていた三人の子供たちがまた戻ってきて、
gjaːgja=ga niː tuːti ʔidʒamu =djoː
おじいさんのところを通って行ったんだよ。
naː ʔuNta=mu jaː=gatʃi muduraN=di =do
もう彼らも家に戻ろうと【している】だろう。
naː gjaːgja=wa ʔikja ʃiraN=di =kajaː? <ʔowari>=joː
もうおじいさんはどうしようと【している】かな？

付録 2：沖永良部語正名方言の地名

baːdʒima 正名（古）
digi 出花
dʒikkjo 瀬利覚
dʒinja 知名

guʃikinu 久志検
gusuku 内城
hjoː 上平川
jaːdʒa 屋者
jamatu 日本
joːmu 屋子母
juNnu 与論
junubi 伊延
juʃikja 下平川

kibiru 喜美留
kjaː 喜界島
kuNgjani 国頭
kunugi 黒貫
naganiː 永嶺
naɸa 沖縄
niʃiboro 西原
niʃimi 新城、下城、上城
njui 根折
ɸugumi 小米
saːtu 古里
ʃimadʒi 住吉
ʃinja 瀬名
soːdi 竿津

taNnja 田皆
ti:tʃinja 手々知名
to: 中国
tuduki 徳時
tuiʃima 硫黄鳥島
tukunuʃima 徳之島
wodomai 和泊
ʔa:mi 赤嶺
ʔadʒiɸu 畦布
ʔamata 余多
ʔaʃikira 芦清良
ʔidʒina 伊是名
ʔihja 伊平屋
ʔinjagu 谷山
ʔinjahja 皆川
ʔirabu 沖永良部
ʔo:ʃima 奄美大島
ʔuɸugusuku 大城
ʔuɸutʃikanu 大津勘